

蘇北におけるキリスト教宣教師の布教活動の展開

——中華民国期から改革開放の現在まで

西澤 治彦

はじめに

一 淮陰及び淮安地域の歴史的な変遷

二 淮陰市の概況——『淮陰市志』に見える天主教（カトリック）の布教活動

（1）概況

（2）『淮陰市志』に見える天主教（カトリック）に関する記述

（3）布教活動の歴史地理

（4）建国後の情況

（5）各県志に見える天主教（カトリック）の記述

（6）年表

三 淮陰市の概況——『淮陰市志』に見える基督教（プロテスタント）の布教活動

（1）概況

- 四 各県志に見える基督教（プロテスタント）の記述
- (2) 『淮陰市志』に見える基督教（プロテスタント）に関する記述
 - (3) 布教活動の歴史地理
 - (4) 『淮陰市志』に見える基督教（プロテスタント）の慈善事業に関する記述
 - (5) 『淮陰市志』に見える建国後の基督教（プロテスタント）の情況

- (1) 『淮安市志』の記述
- (2) 『漣水県志』の記述
- (3) 『淮陰県志』の記述
- (4) 『宿遷市志』の記述
- (5) 『灌南県志』の記述
- (6) 『泗陽県志』の記述
- (7) 『洪澤県志』の記述
- (8) 『泗洪県志』の記述
- (9) 『盱眙^{くち}県志』の記述
- (10) 『金湖県志』の記述

五 考察

おわりに

注

文献リスト

はじめに

私は二〇一四年に、「蘇北におけるプロテスタント宣教師の布教活動—アブサラム・サイデンストリッカーの中国における軌跡を中心に」という論考を書いた。^(注1)これは中国におけるプロテスタント宣教師の布教活動の概況を整理した上で、長老教会の宣教師であったアブサラム・サイデンストリッカーの蘇北における布教活動を詳細に描き出し、最後に宣教師の目を通して見た当時の蘇北社会を描き出そうとしたものである。アブサラム・サイデンストリッカーという宣教師は日本では著名とは言えないが、パール・バックの父親と言え、ある程度のイメージは湧くのではないだろうか。パールは南京で、農学者のロッシング・バックと結婚したため、パール・バックと名乗ったが（後に離婚するも、その名前を通した）もともとこの姓はサイデンストリッカーであった。故に、中国語ではパール・バックのことを「賽珍珠^{サイジエンジュ}」と表記する。

私とアブサラムとの出会いは、一九八五年に南京大学に留学していた際、蘇北の淮安県車橋鎮にて農村調査をした時に遡る。自然災害の度に江南の都市に逃げていたという農民の話聞き、パール・バックの『大地』を思い出し、もしかして淮安が『大地』の舞台なのではないかと思った。この推測は、調査中に入手した『淮安文史資料』第二輯に収められている「淮安基督教簡況」という一文を読んで確信へと変わった。というのも、蘇北に初めて布教にきた宣教師はアメリカの長老教会牧師の賽兆祥とあり、この人物の説明として、『大地』の作者である賽珍珠の父と記されていたからである。^(注2)

こうした経緯から、蘇北での調査以降も、パール・バックやアブサラム・サイデンストリッカーについて資料を集めてきた。そして二〇〇一年に、小説『大地』の舞台を巡って、「パール・バックと江北農村」という論考を、

二〇〇二年にパール・バックの中国での足跡を訪ねた「中国におけるパール・バックの足跡」という一文を書いた。^(注3) リサーチの結果、『大地』の舞台は安徽省北部の宿州であるということが判明するが、同じ淮北平原ということで、当初の推測はそれほど間違っていなかったことになる。

そして二〇一一年には、アブサラム・サイデンストリッカーが刊行した宣教師向けの漢語テキストを分析した、「アメリカ人宣教師の著わした漢語テキスト：Absalom Sydenstricker 著 *An Exposition of the Construction and Idioms of Chinese Sentences : As Found in Colloquial Mandarin for the Use of Learners of the Language* (1889) を巡って^(注4)」を書いた。先述の、二〇一四年に公表した「蘇北におけるプロテスタント宣教師の布教活動―アブサラム・サイデンストリッカーの中国における軌跡を中心に」は、こうした研究の集大成でもあった。

とはいえ、この論考は時間軸で記述しているため、アブサラムが南京にて亡くなった一九三一年をもつて終わっている。しかし、一九八〇年代以降、実際に蘇北を訪ねてみると、キリスト教の教会も残っているし、信者の数も決して少なくないということに気が付いた。いつか、中華民国期以降の情況も整理してまとめてみたいと考えていた。幸い、新編の県志が陸続と刊行されだし、その中の「宗教」のセクションにおいて、キリスト教に関する歴史と現状が記載されていることを知った。しかもその記述がなかなか詳しい。それもそのはず、これらの市志や県志が刊行され始めたのは、改革開放の機運が盛り上がりを見せた一九八〇年代後半から一九九〇年代にかけてで、地方の郷土史家もそれまでの文革を頂点とする「極左」路線への反省も込めて、我が郷土の歴史を克明に記録に残しておきたい、という志に満ちていたからである。現在ではキリスト教も含め、中国での人類学的な現地調査は非常に難しく、たとえ一九九〇年代にキリスト教関連の調査ができたとしても、外国人がここまでの情報（現地の档案史料を含む）を得ることは不可能である。

前回の考察では、プロテスタントの宣教師、なかでも長老教会の宣教師に焦点を当てたが、実際には他の宗派の宣教師も多数、入っていたし、何よりもカトリックの宣教師による布教活動について、まったく落としていた。そこで、主に新編の県志を資料として、カトリックも含め、蘇北におけるキリスト教宣教師の布教活動のその後の展開を整理することにした。この意味で、本稿は前作を補足する続編という位置づけになる。

新編県志は、蘇南の各県でも刊行されており、理想は江蘇省全体、さらには上海を含む華東地区全体の動向を論じることであるが、これは学位論文を執筆するぐらいの労力を要する作業である上に、郷鎮レベルまで降りていて詳細に検討するには、あまりに地理的な範囲が広すぎる。むしろ、人類的なフィールドワークのように、限定された地域を徹視的に考察する方が、見えてくる世界があると思う。そこで、今回は、蘇北、とりわけアブサラム・サイデンストリッカーと深い関わりのある淮陰地域に限って、布教活動の歴史と現状を整理してみたい。

当初は、市志や県志の記述内容を分解、整理統合して時系列で記述し直すつもりであったが、この方法は読者には分かりやすくても、市志や県志の執筆者の一貫した思いを解体してしまうことになる。彼らが何を選択し何を記録に残そうとしたのか、またその際の宗教的、思想的なスタンスはどうなっているのか、こうした文脈もまた一つの「歴史」でもあると考え、まずは市志や県志の記述をそのまま翻訳して紹介することにした。整理と分析は、その後に行うこととする。

一 淮陰及び淮安地域の歴史的な変遷

本題に入る前に、淮陰と淮安の関係、及び両者のその後の名称の変更などをここで整理しておきたい。というのも、

両者は古代から現代に到るまで、数々の変遷を経ており、とりわけ民国以降は極めて複雑な情況となっているからである。

淮陰は古代より淮河の南岸にあつて、春秋時代から江南より北方へ至る通路であつた。劉邦は前漢建國に貢献した韓信を楚王として淮陰侯に封じ、淮陰県が置かれた。(西) 晋代には広陵郡が置かれるも、南遷した東晋(三一七～四二〇)により山陽郡が設置されると、淮陰は南北朝期には南北両勢力の拮抗する軍事上の要地となつた。

隋代になると淮陰は山陽郡に編入されるも、開皇二(五九二)年に山陽郡は廃止され、新たに楚州が設置された。隋朝による大運河建設の結果、淮安で淮河と交差したため、淮安は江南と華北とを結ぶ水運の拠点として経済的に大きな発展を遂げることになる。このため、広域行政の中心は淮陰から東の淮安に移動する。淮安の前身は東晋代の山陽県であるが、宋代になつて淮安県に改められた。

その宋代に、淮安より淮河に至る清江浦(沙河)が築かれ、その河口は水運の中心として発展した。そしてここに清河県が置かれると、淮陰県は廢れ、元代には清河県に併入され、清代に至るまで清河県と呼ばれた。^(注5)

明清代になると淮安府は治水、漕運、製塩行政の中心地として最盛期を迎え、揚州、蘇州、杭州と並ぶ大運河上の「四大都市」と呼ばれるまでになる。管轄範囲も黄海沿岸から内陸の広い範囲に及び、現在の淮安市、塩城市、宿遷市、連雲港市、及び徐州市東部に及んだ。清代になると海州直隸州(現在の連雲港市)が分離し、さらに徐州市付近に徐州府が新設されたため淮安府の行政範囲は縮小した。

ここまでの清代までの変遷である。整理すると、淮陰の方が淮安よりも由緒ある歴史を誇ったが、南北朝以降、とりわけ隋代の大運河の建設を契機として、広域行政の中心は淮陰から淮安に移る。そして宋代になり、淮安から淮河に至る所に清江浦が築かれ、その河口は水運の中心として発展した。その為、ここに清河県が置かれ、淮陰県

は廃れて元代には清河県に併入された。

清末から民国期にかけての江蘇省に関する英語文献や地図を見ると、Tsinhsiangpu という名称がよく登場する。即ち、これは清江浦を指す。アブサラム・サイデンストリッカーが蘇北での布教の拠点にしたのも、この清江浦であった。行政的には清河県内にあったが、大運河の河口の市街地を指す清江浦の方が通称として通っていたのであろう。歴史的には、清江浦は宋代に淮安から淮河に向かって発展した新エリアで、ここに清河県が置かれると、元代には廃れていった淮陰県も吸収することになる。従って、民国期までの清江浦は、かつての淮陰県や淮安県の一部を含む、広域の水運都市であり、行政上は清河県と呼ばれていたことになる。

なお、淮安県の名称であるが、宋代になって淮安県に改められたものの、元代に山陽県に復し、民国期の一九一四年に再び淮安県と改称されている。しかしながら、名称の変遷はこれだけではない。民国期になると、淮陰県の古名が復活し、王營鎮に県庁所在地が置かれた。また、市街地は清江浦鎮となり、淮陰県に属した。これを要するに、淮陰と淮安の関係は、漢代から南北朝にかけては淮陰県と山陽県、宋代は清河県と淮安県、元代は清河県と山陽県という対比であったが、民国期に再び淮陰県と淮安県という名称に戻るようになる。なお、淮安県の県庁所在地は淮城鎮に置かれていた。これに加え、宋代以降は両県の間に清江浦が開発され、時に清河県に帰属しながらも、第三のエリアとして栄えたことになる。

淮陰と淮安の関係の変遷は新中国成立後も続いた。即ち、一九五一年、淮陰県の清江浦鎮を清江市として独立させた。一九五八年には淮陰県が清江市に編入され、その清江市も淮陰市に改称される。ところが、一九六四年、再び市と県とが分離し、市の一部を割いて淮陰県が復活する。

改革開放以降の一九八三年になると、淮陰地区の清江市が「地級市」（かつての「地区」に相当、通常の「市」

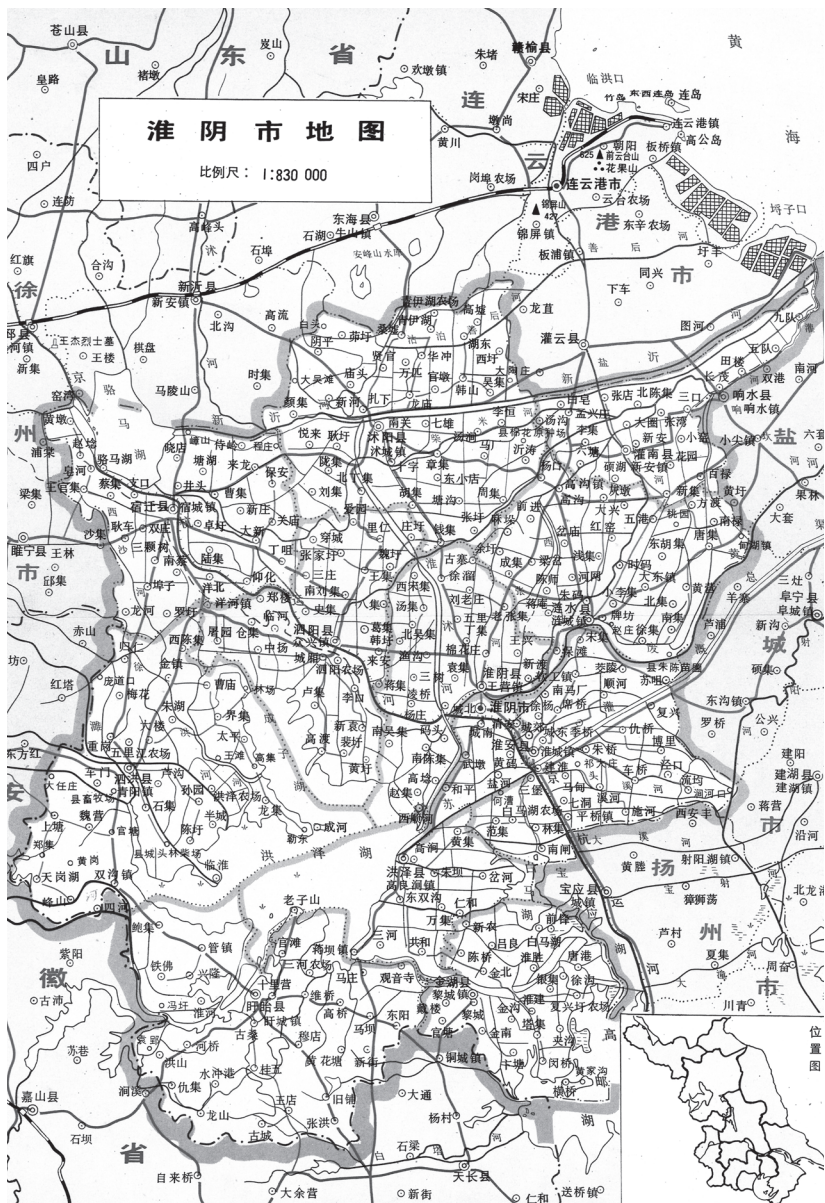
よりも広域な別概念)の淮陰市に昇格する。この結果、一時期、複数の県を管轄する広義の「淮陰市」と、かつての清江浦を指す狭義の「淮陰市」とが存在することになった。本稿の地図や本稿で活用している市志、県志もこの時代の機構が反映されている。但し、県によっては、一九八七年の市制施行を受けて、県から市に昇格した段階で市志を刊行している(宿遷市、及び淮安市)ところもある。今から見れば、これも過渡期の現象であるが、本稿が依拠する新編県志類は、この段階で刊行されている。

さらに、一九九六年には宿遷市が「地級市」(かつての地区に相当)に昇格し、沭陽県、泗陽県、泗洪県と共に(地級市としての)淮陰市から分離し、淮陰市と対等な地級市となった。灌南県も連雲港市の管轄に移った。

二〇〇〇年になると、今度は(地級市としての)淮陰市が淮安市に改称され、併せて区制が施行された。即ち、中心部の市街地化の進展により、淮安市が楚州区に、淮陰県が淮陰区となる。二〇一一年には楚州区が淮安区に改称され、二〇一六年には清河区と清浦区が合併して清江浦区が発足したほか、江澤県が江澤区となった。この結果、最終的に、新生の(地級市としての)淮安市は、淮安區、淮陰区、清江浦区、洪澤区の四区のほか、郊外の漣水県、金湖県、盱眙^{くみ}県の三県を管轄することとなった。結局、淮陰市という名称は淮安市に改称されたものの、「淮陰」の名称は、淮安市内の一つの区として残ったことになる。また、かつて清江市として独立したことのある清江浦も、淮陰や淮安にも属することなく、古名のまま一つの区となった。

【図表1】は一九八〇年代の淮陰市(地区)の地図である。一九八五年の留学中に入手したもので、今となっては古地図となっていた。本稿で用いる「白地図」は、この時代の地図をベースとしている。【図表2】は二〇一六年以降の淮安市(地級市)である。市街地化が進んだ一方、宿遷県、沭陽県、泗陽県、泗洪県、灌南県の五県が分離したため、管轄地域は半分弱に縮小している。

【図表 1】 1980 年代の淮陰市（地区）



本稿では、新編の各県志の記述をみていく前に、『淮陰市志』を通して、淮陰市（地区）の全体像を整理しておきたい。一九九〇年代になって陸続と県志が刊行された当時、淮陰市（地区）の管轄内には、淮陰県・灌南県・沭陽県・宿遷市・泗陽県・漣水県・泗洪県・淮安市・洪澤県・盱眙県・金湖県があり、淮陰市（地区）レベルの他に、それぞれの県（市）も独自に県（市）志を刊行している（このうち新編『沭陽県志』のみ作業開始時には未刊行、その後も未刊行のようである）。後者の方が記述内容はよりローカルなものになるが、記述の総量や構成はやはり『淮陰市志』（地区）の方が秀でてゐる。そこで、先ず『淮陰市志』の記述から見ていきたい。その後、多少の重複はあるが、各県志の記述を紹介する。なお、市や県の行政組

【図表 2】 2016 年以降の淮安市（地級市）



織は、使用する地図も含め、市志や県志が刊行された当時の名称を用いることとする。

二 淮陰市の概況―『淮陰市志』に見える天主教（カトリック）の布教活動

（１）概況

キリスト教のなかで淮陰地区に最も早く伝教に入ったのは、カトリックであった。しかしながら『淮陰市志』（地区）におけるカトリックの記述は、プロテスタントに比べて圧倒的に少ない。江蘇省に限らず、中国人はカトリックを天主教と称し、プロテスタントとを基督教もしくは耶蘇教と称し、両者は別物と考えている。明代のマテオ・リッチ（利瑪竇）にまで遡る天主教の伝教の歴史の古さに加え、ローマ教皇を頂点とするその統率の取れた組織力に、中国の歴代政権は警戒心を解くことはなかった。康熙帝の禁教令公布（一七一七）でもって決着することになる「典礼問題」がその好例である。^{（注6）}しかし、中国国内のカトリック信徒はこれをもって完全に消滅した訳ではなく、伝教活動も、水面下において、その後も細々と継続していた。民国期はともかく、中華人民共和国の時代に入ると、共産党政権は再びカトリックに対して厳しい対応をしていく。『淮陰市志』（地級市）に見える天主教の扱いは、そうした政権の意向を汲み取ったものでもある。以下、『淮陰市志』に見える天主教に関する全文を紹介したい。

（２）『淮陰市志』に見える天主教（カトリック）に関する記述

天主教（カトリック）が淮陰に伝教されたのは、清の順治年間（一六四四～一六六一）のことで、順治元（一六四四）年、既に淮安には天主教の教堂があった。

〔それから二一〇〇年後の〕咸豐元年（一八五二）、フランス人が淮安にやってきて小高皮巷に教堂を建設し、伝教を行った。その後、陸統として清江浦、漣水県、沭陽県、宿遷県などの地で伝教し、淮陰の石碼頭（現市六中院内）、沭陽県の沭城鎮、及び馬廠、高墟、万匹、宿遷県の嶂山、廢黃河西などの地に教堂を設立した。漣水県では胡という姓の地主の家屋（現在、政府の招待所院内）を借り受け、伝教活動を行った。

光緒一六（一八九〇）年、フランス人の艾頼沃が宿遷にやってきて堂を建てたほか、一五の分会を設けた。

光緒二〇年（一八九四）、上海の徐家滙天主堂が総神父と五名の修女を宿遷に派遣し、伝道を行った。先に嶂山に天主堂を建て、その後、嶂山に総堂を建設し、近隣の数県を管轄した。また、耿車、蔡集、皂河などの地に三〇余の分会を設立した。

宿遷にやってきて伝教したのは、他にカナダから一名の神父が、アメリカから葛文生が、およびオランダ、スイスなどからの伝教師がいた。宿遷における天主教徒の数は最大で六六〇〇人に達した。抗日戦争前、清江市（民国期における清江浦の名称）には天主教徒が一〇〇〇余人いた。民国二九（一九三〇）年、フランスの神父が沭城を離れた後、イギリスの神父が交替し、継続して沭陽にて伝教を行った。

淮陰の天主教の神職員のほとんどは外国人であった。民国九（一九二〇）年になってやっと、中国人の陳なにがし、馬なにがし、郭なにがしなどの教徒が前後して神父になった。

天主教が淮陰にて運営した中学、小学の規模はみな小さかった。比較的名声があったのは、石碼頭の「類式学校」で、当初は私塾としてスタートし、後に六クラスからなる小学校になり、民国一九年に初中クラスを増設した。学校は男子部と女子部（現食品公司宿舍、及び六中院内）に分かれ、教堂と一緒にあって、上の階が学校、下の階が教堂となっていた。学生の中では、信徒の子弟が半分以上を占めていた。在校生はミサなどの宗教活動に参加

しなければならなかった。経費は揚州教区が管理し、資金を提供していた。

天主教の政治色は濃厚で、力の限り中国における帝国主義の利権を擁護しようとし、中国人の義憤を引き起こした。清の同治八年（一八六九）、川軍が北上し、（宿遷県の）嶂山を通過した際、嶂山天主堂を一挙にたたき壊した。事件後、外籍宣教師らは在華帝国主義の勢力を抛り所に、県に賠償を求め、教堂を再建させ、併せて県に警備隊を教堂に派遣することと求めた。

光緒二六（一九〇〇）年、義和団事件が勃発すると、宿遷の外籍宣教師らは戦々恐々として上海に逃げ、一年も経ってから宿遷に戻り、教務を回復させた。

民国二八（一九三九）年、宿遷の馬陵麓の天主堂は、日本軍が徐州から南下して抵抗する三万名の炭鉱労働者を山東の棗庄に送り込み、炭鉱の復興、開発に当たらせたとのを、支援した。

民国三五（一九四六）年、宿遷で伝教を行っていたアメリカ籍の神父、葛文生は諜報活動に加わり、民主政府に見破られた後、恐れをなして上海に逃亡した。^{（注7）}

（3）布教活動の歴史地理

清の順治元（一六四四）年、既に淮安には天主教の教堂があったということであるが、これはマテオ・リッチが没した一六一〇年から僅か三四年後のことであった。おそらくイエズス会が送った宣教師であろう。翌一六四五年になると、福建に入ったドミニコ会の宣教師が儒教や祖先祭祀をめぐることで教皇に質問状を送ったことから、典礼問題が発生する。これにはイエズス会と後発組であったドミニコ会やフランシスコとの内部対立という構図も見え隠れするが、最終的に康熙帝によって一七一七年に禁教令が公布され、七〇年以上も続いた典礼問題は終焉を迎える。

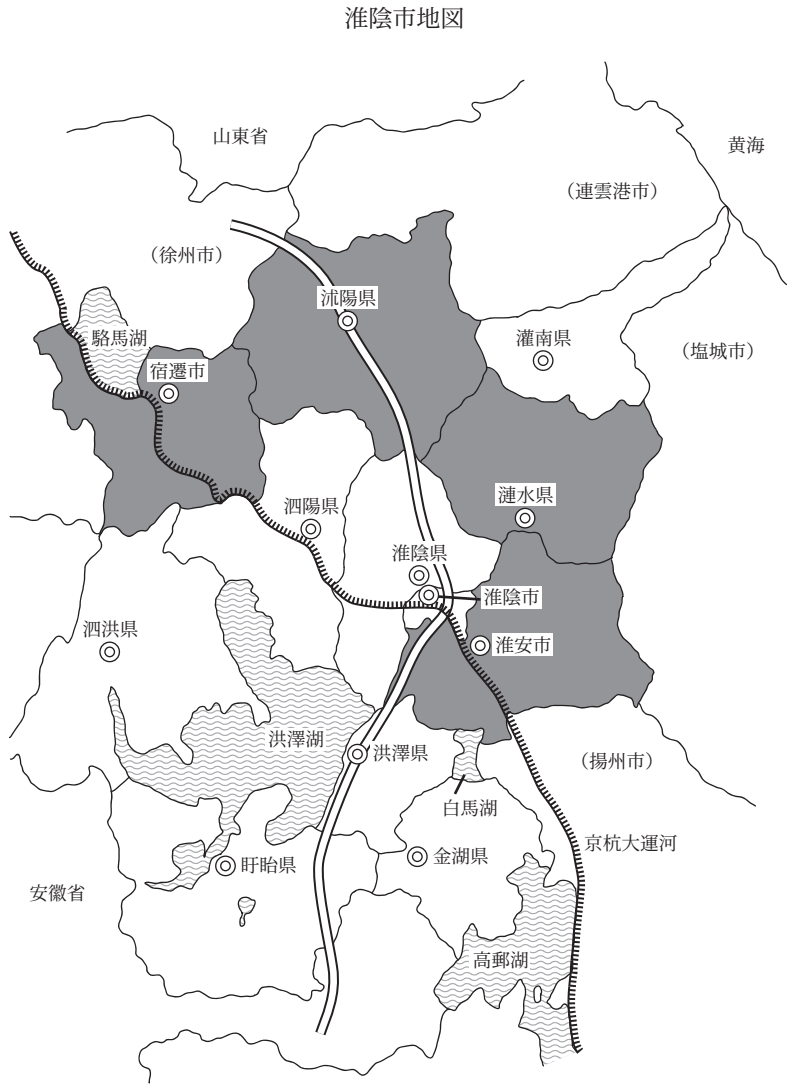
そして一七七三年にはイエズス会が解散を命じられ、典礼問題は歴史的な意義を失う。

さて、咸豊元年（一八五一）になると、フランス人が淮安にやってきて小高皮巷に教堂を建設したとあるが、順治年間から二〇〇年近い年月が経っている。おそらく禁教令によって淮安の天主教も一旦は消滅したということであろう。一八三一年にはローマ布教聖省がイエズス会解散後、初のミッシェンを中国に派遣している。その際、典礼問題を踏まえて、中国の儀礼への参加を禁止している。淮安にやってきたフランス人宣教師も、このミッシェンの流れの一環の可能性がある。宗派は不詳であるが、おそらくイエズス会所属の宣教師と思われる。その後、陸續として清江浦、漣水、流陽、宿遷などの地で伝教し、淮陰の石碼頭、流陽の沭城鎮、及び馬廐、高墟、万匹、宿遷の嶂山、廢黃河西などの地に教堂を設立した、とある。清江浦（淮安）や宿遷は大運河沿いにあるため、宣教師らは揚州から大運河を北上していったものと思われる。淮陰における学校教育の経費が揚州教区から支給されていたこともその傍証となろう。

なお、清の同治八年（一八六九）に川軍が北上し、嶂山を通過した際、嶂山天主堂を破壊したということであるが、これは太平天国軍の北伐と連動して華北において反乱を起こした捻軍を指す。捻軍は咸豊から同治にかけて山東、江蘇、安徽を転戦したが、同治三年（一八六四年）に太平天国が滅亡すると、互いの残党勢力が連合して反乱を続行した。捻軍が宿遷を北上したのはこの時期であった。この前後の情況は、『宿遷市志』の「大事年表」にも記されている。^(注8)清朝は曾国藩に捻軍の討伐を命じ、曾国藩は湘軍・淮軍八万を率いてあたったが、捻軍が包囲を突破して湖北省に入ったため、曾国藩は欽差大臣を解任され、李鴻章に代わった、という事件であった。

淮陰市におけるカトリックの布教地（咸豊元年（一八五一）以降）を地図上で示したのが【図表3】である。漣水県や流陽県は大運河から離れた場所にあり、最終的にこうした地域まで布教活動が拡大していったのが分かる。

【図表3】 淮陰市におけるカトリックの布教地（網かけした四つの市／県）



宿遷県における天主教の教堂の位置を图示したのが【図表4】である。宿遷県の嶂山は県庁所在地である宿城鎮の北側、徐州市の新沂県との境にある鎮である。「廢黄河西」は、地名というよりは、廢黄河の西側にあったということであろう。

また、沭陽県における天主教の教堂の位置を图示したのが【図表5】である。沭陽県の県城鎮である沭城鎮のほか、馬廠（鎮）、高墟（鎮）、万匹（鎮）は現在の地図でも場所を確認することができる。

天主教の淮安伝教から三十九年後の光緒二〇年（一八九四）になると、上海の徐家滙天主堂が総神父と五名の修女を宿遷に派遣し、嶂山に総堂を建設して近隣の教県を管轄した。

【図表4】宿遷県における天主教の教堂



また、（宿遷県内に）耿車、蔡集、皂河などの鎮に三〇余の分会を設立した、とある。嶂山に総堂が建てられたということは、やはり歴史的に嶂山が伝教の中心地であったようだ。また、その後三〇余の分会を設立したという耿車、蔡集、皂河は現在の地図でも場所を確認することができる。駱馬湖に面する皂河は、古代より水運の要として名の通った運河上の古鎮である。これらを含むほぼ全ての鎮は陸路のほか、水路でも往来が可能である。宣教師らも水路を活用した可能性が高い。この三個所は例として挙げただけで、実際には三〇余の鎮に分会が設けられたのであろう。だとすると、嶂山を中心に宿遷県のほぼ全域に分会が設立

【図表 5】 沭陽県における天主教の教堂



されたことになる。それだけでなく、近隣の数県を管轄したとあり、この時期、宿遷県の嶂山がこの地域一帯の伝教の拠点であったことが読み取れる。なお、淮陰における学校教育の経費は揚州教区が管理していたということで、淮陰一帯は揚州教区の管轄下にあった。

(4) 建国後の情況

『淮陰市志』は建国後の天主教の情況も簡潔に記述しているので、それもここで紹介しておきたい。民国期から天主教に対しては厳しい対応が取られるが、建国後、外国人宣教師らは国外に出国し、教堂の数も減少していき、最終的に一九八〇年代になると、天主教の活動は消滅していく。

一九五一年、修女の陳珠珍が群衆聚会の場において、淮陰地区における外国伝教士らの罪行を訴え、外国のミッシヨナリーとの関係を一切絶つことを宣言した。この一年の間、淮陰地区における最後の一人となった天主教の外国人神父、翟光朝（清江市天主教堂）が人民政府の同意のもと、国外に退去した。

建国後、全市の天主教堂は僅かに五箇所残るだけとなり、そのうちの三つは宿遷にあった。一九五〇年、宿城鎮の天主教堂の神父である郭榮璋、北関鎮天主教堂の神父である馬明らが法を犯したため、公安機関によって逮捕された。一九五四年、全区の天主教堂は宿遷に残る一つだけとなり、修女の陳珠珍が教務を担当し、信徒は三〇人であった。陳珠珍は宿遷の第三、四期の政治協商委員に選出された。一九八二年、陳珠珍が原籍である豊県に戻った後、淮陰における天主教の活動は基本的に消滅した。^(註9)

(5) 各県志に見える天主教（カトリック）の記述

なお、『淮陰県志』『灌南県志』『宿遷市志』『泗陽県志』『漣水県志』『泗洪県志』『淮安市志』『洪澤県志』『盱眙県志』『金湖県市』（未入手の『沭陽県志』を除く）のうち、天主教に言及しているのは、『淮安市志』と『宿遷市志』『漣水県志』のみであった。以下、その内容を紹介する。

1 『淮安市志』（かつての県志レベル）の記述

清の康熙年間（一六六一―一七二二）に天主教が淮安に入ってきた。同治年間（一八六二―一八七四）に天主教は淮城鎮の小高皮巷に教堂を建設した。

一九四九年前夜、天主教は淮安に三〇余の部屋を持ち、教堂や住宅の他に、達義小学校が二校あった。建国後、達義小学校は政府に接収され、家屋財産も政府によって転用された。淮安における天主教の影響は終始、大きなものではなく、盛大な時でも教徒の数は数百人で、一九五三年、天主教は活動を停止した。^(注10)

『淮安市志』の記述では、天主教が淮安に入ってきた時期を康熙年間（一六六一―一七二二）としており、『淮陰市志』の順治元（一六四四）年には淮安に天主教の教堂があった、という記述よりも遅いことになる。また、同治年間（一八六二―一八七四）に淮城鎮の小高皮巷に教堂を建設したとしているが、『淮陰市志』が咸豐元年（一八五二）としているのと齟齬が生じている。おそらく『淮陰市志』の方が信憑性は高そうである。

2 『宿遷市志』（かつての県志レベル）の記述

一八九〇年、淮安の天主教堂がフランス国籍の教士を宿遷県に派遣し、嶂山に「玫瑰堂」を建設し、布教にあたったが、信者は甚だ少なかった。

一八九四年、フランス籍の阮神父（主教）と修女五人が上海から宿遷にやってきて、それぞれ北潤、耿車に「始胎堂」（後に「老堂」と呼ばれるようになる）を設立、県の北の扒溝及び嶂山に「天神堂」を設立した。嶂山天神堂は総教堂で、宿遷、邳県、睢寧の三県での教務を兼ねていた。豪紳らは教会に特権があることを見抜き、官府はこれに畏服したため、多くの者が天主教に加入し、外国の教士らの庇護を受けることができたので、信徒の数は日増しに増加した。

〔同治八年（一八六九）〕、「川軍」が嶂山にやってきた時、教会が威厳があつて豊かなのを見て、これに憤慨し、教堂を破壊した。その後、外国の教士が江蘇省公署を脅迫し、宿遷県公署に強制的に損失の賠償をさせた。加えて、県の公署から護衛を教堂に派遣させ、常駐させた。

一八九七年、宿城鎮の北後馬路に天主堂を建設した。男女用に両堂あり、街東側が男堂（現在の市人部跡）、街西側が女堂（現在の人民会堂北側）で、総堂は男堂に設けられた。民国初期、総堂内に「天保小学」が一校開設され、学生に「愛教思想」を教育した。

一九一二年、全県に一六の分会が設けられ、それらは嶂山、耿車、蔡集、皂河などに分布し、教徒の数は六六〇〇余人に増加した。

一九四八年七月、中国共産党泗宿〔泗洪・宿遷〕県委員会と県総隊が宿遷県城の第二次接收を行い、外国籍の教士らは全員、上海に撤退した。宿遷には修女の陳珠珍ら三人だけが残り、その宗教活動は人民政府の保護を受けた。

陳珠珍は前後して県の政治協商委員会の第二期、三期、四期委員を務めた。文化大革命開始後、陳珠珍は強制的に故郷である「徐州市の」豊県の家に送還された。

一九九〇年現在、宿遷境内には依然として二〇余人の天主教徒がいるが、その多くは年老いて体力もなく、宗教的な活動をしていない。^(注11)

宿遷県における天主教に関しては、地元だけあって『宿遷市志』の方が記述量も多い。『淮陰市志』によると、光緒一六（一八九〇）年にフランス人の艾頼沃が宿遷にやってきて教堂を建てたほか、一五の分会を設けたとあるが、これが淮安の天主教堂からの派遣であったこと、教堂を建設した場所が嶂山で「玫瑰堂」と称されたことが分かる。光緒二〇年（一八九四）、上海の徐家匯天主堂が総神父と五名の修女を宿遷に派遣した一件も、『宿遷市志』の方が詳しく記述されている。教堂が建てられた耿車鎮は現在の地図上で確認できるが、北澗や扒溝は見つけることが出来なかった。また総教堂としての嶂山天神堂が管轄していた近隣の県というのが、西側の邳県、睢寧県（現在は徐州市の管轄）であったことが確認できる。興味深いのは、信徒が増加した理由を「豪紳らは教会に特権があることを見抜き、官府（地方の役所や官吏）はこれに畏服したため、多くの者が天主教に加入し、外国の教士らの庇護を受けることができた」ためとしている点である。市志の執筆者は、天主教の普及が純粹な信仰によるものではない、ということと言いたかったようであるが、図らずも中国人の現世的な損得計算を公言することとなった。また、当初は豪紳から「入信」したというのも興味深い。こうした情況は、キリスト教の伝教当初から見られたことであるし、プロテスタントを含め、これ以降も見られたことであった。

ところで、徐家匯天主教堂（徐家匯聖イグナチオ大聖堂）は、上海の徐匯区にあるカトリック上海教区の司教座

聖堂であった。一八四二年、イエズス会は再び中国での布教を試みる。実に、康熙帝の禁教令公布（一七一七）から一二五年後のことであった。そして一八四七年に、上海の西郊にあった法華郷の地に、カトリック江南伝教区の総本部を建設したのが始まりである。名称はイエズス会の創始者である聖イグナチオ・ロヨラからとっている。中国初のコシック様式の聖堂で、明代の著名なカトリック教徒である徐光啓はここに葬られている。イエズス会はこの拠点として、江蘇と安徽の二省において伝教活動を展開した。総本山設立から四七年後の一八九四になって、その波は蘇北の運河沿いに、淮安を経て、宿遷まで辿り着いたことになる。

『宿遷市志』では、「川軍」が嶂山にやってきた時期を「民国初期」としているが、これは同治八年（一八六九）の誤りである。一八九七（光緒二三）年、宿城鎮の北後馬路に天主堂が建設され、民国初期、総堂内に「天保小学」が開設されたというは新情報である。また、宿遷全県に一六の分会が設けられ、教徒の数は六六〇〇余人に増加した」という記述は、『淮陰市志』の記述と一致する。淮陰の一〇〇〇人と比べると、六倍以上となる。宿遷、及び沭陽に伝教にやってきた宣教師らの国籍に関しては、フランス、カナダ、アメリカ、オランダ、イギリスと、『淮陰市志』の方が詳しく記述している。また、『宿遷市志』には義和団事件への言及がないほか、民国二八（一九三九）年に宿遷の馬陵麓の天主堂が、徐州から南下してきた日本軍に協力した一件も出てこない。但し、『宿遷市志』の「大事年表」には、この前年、日本軍が宿城を空爆して占拠し、三九年には、曹集、劉圩、夏莊、大興集などに侵攻したことを記している。^(注2)

3 『漣水県志』の記述

天主教が漣水に入った時期は遅く、しかも伝教の範囲も漣城城内に限られた。民国二七（一九三八）年、フランスの天主教の逢士賓神父が阜寧から漣水に伝教にやってきて、漣城内の「胡三大門」（胡家は漣城では有名な地主で、

房舎は百余間あり、三人の息子がそれぞれ一宅に住んでいて、しかも三つの大門が並んでいたため、「胡三大門」と呼ばれた）のうちの胡壽朋東大門の後ろにある宅房を購入し、天主教堂とした。その後、フランス人が天主教堂内に天主堂小学（一〜六年級）を運営し、六クラスの学生数は二〇〇人近くに達した。そして中国人の天主教徒である孫加英を派遣して校長とした。逢士賓が淮安に転勤となると、同じくフランス人の帥恩理が神父として赴任した。帥恩理も直ぐに上海天主教区（漣水天主教は上海教区の管轄に属していた）に転勤となり、フランス人が上海の傅勝蘭を漣水天主教の神父として派遣し、且つ天主堂小学の校長も兼ねた。三名の神職者らは天主堂小学の教学も担当した。天主堂小学の教育課程は県内のその他の小学と大差ないが、異なる点は、在學生は毎朝晩、必ず教堂の教会の儀式に参加しなければならず、聖書を読み、祈祷を行った。フランス人の神父らは漣水に常駐している訳ではなく、不定期に漣水天主教堂にやってきて伝教を行っていた。

漣水の天主教はある程度、基督教（プロテスタント）と似たところがあり、天主教は「鬼」を信ぜず、「主」（上帝）を信じる。「三位一体」、即ち、父「神」と子「イエス」と聖霊は一体であると説く。天主教は菩薩（像）ではなく神像を崇め、聖母マリアとイエスを崇拜する。朝晩に聖書を唱え、焼香や叩頭をしない。漣水の天主教徒は、天主堂の学生以外は、皆パートタイム的で、日曜に天主堂に集まってミサを行うだけで、教徒が行う奉獻も不定期で、信徒数は百人を超えていなかった。天主教の神職（男は神父、女は修女で、皆修身結婚をしない）の給与は上海天主教区から支給されていた。修女の中には病気の世話をして副収入を得ている者もいた。

民国三五（一九四六）年八月、漣水の民主政府は、漣水の北門にて反動教義を宣伝する二名の修女と一名の信徒を拘束し、死刑を執行した。神父の傅勝蘭はこの知らせを受けて、事前に逃走した。この年の末に天主教は自主解体し、教堂も公共の物となり転用された。^(注13)

天主教が淮安に入ったのが一八五一年ということを考えると、漣水県に入ったのが一九三八年というのは、想像していたよりも遅い。もっとも、淮安に次いで宿遷に入ったのが淮安伝教から三十九年後の一八九〇のことであり、漣水伝教はそれからさらに四八年を経ており、これが淮陰地区における天主教伝教の実際のスピードであった。しかも、淮安や淮安を拠点とした宿遷の伝教活動が上海からの派遣であったのに対し、漣水の場合は、同じフランス人ではあるが、当初は東側の塩城市阜寧県からの伝教であった。しかも伝教の範囲も漣城城内に限られた。その際の「胡三大門」に関する細かな情報は県志ならではのものである。フランス人神父らは漣水に常駐している訳ではなかったということで、本腰をいれた伝教活動ではなかった。一九四六年八月、漣水の民主政府が反動教義を宣伝する二名の修女と一名の信徒に対し死刑を執行した、というのも新たな情報である。ここで言う「民主政府」とは、国民党政府に対する共産党政権という意味であろう。同年、宿遷で宿遷で伝教を行っていたアメリカ籍の神父が「諜報活動」を見破られたのも「民主政府」によってであった。

(6) 年表

ここで、カトリック一般の動向と、淮陰市における天主教（カトリック）の布教活動を年表にまとめてみたい。

【図表6】年表（カトリック）

一六一〇（万曆三八）年	マテオ・リッチ没
一六四四（順治元）年	既に淮安県には「イエズス会の」天主教の教堂があった。「その後、布教活動が続くも、康熙帝による七十七年に禁教令を境に、活動も一旦、停止状態になる」

一六四五（順治二）年 福建に入ったドミニコ会の宣教師が儒教や祖先祭祀をめぐる教皇に質問状を送ったことから、典礼問題が発生

一七一七（康熙五六）年 禁教令公布、イエズス会士以外の宣教師追放

一七七三（乾隆三八）年 （ローマ教皇により）イエズス会が解散を命じらる

一八三一（道光一一）年 ローマ布教聖省がイエズス会解散後、初のミッションを中国に派遣

一八四二（道光二二）年 イエズス会、再び中国での布教を試みる

一八四七（道光二七）年 イエズス会、上海に江蘇や安徽の布教の為の総本山となる徐家滙天主堂を建設する

一八五一（咸豐元）年 フランス人宣教師が淮安県に来て「県城内の」小高皮巷に教堂を建設し伝教を行う。その後、陸統として清江浦（淮陰）、漣水県、沭陽県、宿遷県などの地で伝教し、淮陰県

の石碼頭、沭陽県の沭城鎮、馬廠鎮、高墟鎮、万匹鎮、宿遷県の嶂山、廢黃河西などの地に教堂を設立

一八六九（同治八）年 川軍（捻軍）が北上して宿遷県を通過した際、嶂山天主堂を破壊する。外籍宣教師らは県に賠償を求め、教堂を再建させ、併せて県に警備隊を教堂に派遣することを求める

一八九〇（光緒一六）年 淮安の天主教堂がフランス国籍の教士を宿遷県に派遣し、嶂山に「玫瑰堂」を建設

一八九四（光緒二〇）年 上海の徐家滙天主堂（イエズス会）が総神父と修女を宿遷に派遣し伝道を行う。嶂山に

天主堂を建て、その後、嶂山に総堂を建設し、近隣の数県（西側の邳県、睢寧県）を管轄。

〔宿遷県内の〕耿車、蔡集、皂河などの地に三〇余の分会を設立

一八九七（光緒二三）年 宿城（鎮）の北後馬路に天主堂を建設、総堂は男堂に設けられた。民国初期、総堂内に「天保小学」を開設

一九〇〇（光緒二六）年 義和團事件が勃発すると、宿遷の外籍宣教師らは上海に逃げ、一年後に戻る

一九一二（民国元）年 宿遷全県に一六の分会が設けられ、それらは嶂山、耿車、蔡集、皂河などに分布し、教

徒の数は六六〇〇余人に増加

一九二〇（民国九年）年 淮陰にて中国人の陳某、馬某、郭某などの教徒が前後して神父になる

一九三八（民国二七年）年 フランス人神父が阜寧から漣水にやってきて、漣城内の「胡三大門」に教堂を建設

日本軍が宿城を空爆し、徐州から南下して宿城を占拠

一九三九（民国二八年）年 日本軍、曹集、劉圩、夏莊、大興集などに侵攻。宿遷の馬陵麓の天主堂は、日本軍が炭

鉱労働者を山東の棗庄に送り込むことに協力

一九四〇（民国二九年）年 フランスの神父が流城を離れ、イギリスの神父が交替し、継続して沭陽県にて伝教

一九四六（民国三五年）年 漣水の民主政府が反動教義を宣伝する二名の修女と一名の信徒に死刑執行

宿遷で伝教を行っていたアメリカ籍の神父、葛文生が諜報活動に加わり、民主政府に見破られた後、上海に逃亡

一九四九年 建国後、（淮陰）全市の天主教堂は僅かに五個所残るだけとなり、そのうちの三つは宿遷県にあった

一九五〇年 宿城（鎮）の天主教堂の神父である郭榮璋、北関鎮天主教堂の神父である馬明らが、法を犯したため、公安機関によって逮捕される

一九五一年 修女の陳珠珍が、群衆聚会の場において、淮陰地区における外国伝教士らの罪行を訴え、外国のミッシヨナリーとの関係を一切、経つことを宣言。淮陰地区における最後の一人となった天主教の外国人神父、翟光朝（清江市天主教堂）が人民政府の同意のもと、国外に退去

一九五四年 全区の天主教堂は宿遷に残る一つだけとなり、修女の陳珠珍が教務を担当し、信徒は三〇人

一九八二年 陳珠珍が原籍である（徐州市の）豊県に戻った後、淮陰における天主教の活動は基本的に消滅

こうしてみると、限られた史料からではあるが、淮陰地区におけるカトリックの布教の歴史を垣間見ることが出来る。淮安におけるイエズス会による布教の歴史は清初まで遡ることになるが、康熙帝の禁教令もあって、徐々に信徒の数も減少していく。その後、二〇〇年の時を経て道光年間になり、再びイエズス会は上海を拠点に江蘇や安徽での伝教活動を再開し、大運河沿いに淮安を経由して、一八九四（光緒二〇）年には宿遷県まで到達する。そして嶂山の教堂を総本山として、県内や近隣の諸県への布教を拡大していく。一八六九（同治八）年には捻軍の襲撃を、一九〇〇年には義和団事件、一九三〇年代末には日本軍の侵攻を受けるも、各鎮に三〇余の分会を設立し、信徒の数は最大で六六〇〇名に達した。その数は淮安の六倍で、当時、宿遷が蘇北における中心地となっていたようである。これは、カトリック教会側も、ローマ教皇の統制のもと、組織的な布教活動を粘り強く行った結果でもあったが、信徒の増加は、教会の特権と外国人教士らの庇護を得るという打算的な目的もあった。この点は後に布教にやってくるプロテスタントの場合も同様であったが、カトリックは組織的であっただけに、その威力は個人単位で動きがちなプロテスタントと比べても強力であった。実際、捻軍によって嶂山天主堂が破壊されると、県に賠償を求めて教堂を再建させただけでなく、県から警備隊を教堂に派遣、常駐させるだけの力があつた。侵攻してきた日本軍との対応がどうであったか、その詳細は不詳であるが、信仰を貫くと言うよりは自己の利益を優先しながら組織的に対応したものと思われる。

しかしながら、カトリックと中国文化とはどうも相性がよくなかったようである。マテオ・リッチの没後、七〇年間にわたって典札問題も引き起こし、最後は康熙帝による禁教令まで公布される。ローマ教皇を頂点として、中国側が与り知らないところで「教区」を造り、「司教」を任命していくという布教方法に懐疑的になっていくのも故無しと言えない。特に中国共産党はカトリックに対して敵対的であつた。一九四六年には漣水の「民主政府」

が反動教義を宣伝する二名の修女と一名の信徒に死刑執行している。

建国後、淮陰市（地区）の天主教堂は僅かに五個所残るだけとなり、そのうちの三つは宿遷県にあったが、一九五〇年には宿城鎮の天主教堂の神父らが、公安機関によって逮捕される。一九五一年には残された修女の陳珠珍が、群衆集会の場において淮陰地区における外国伝教士らの罪行を訴え、外国のミッシヨナリーとの関係を経つことを宣言。淮陰地区における最後の一人となった天主教の外国人神父も国外に退去し、イエズス会による長い布教の歴史に幕が閉じられる。一九五四年、全区の天主教堂は宿遷に残る一つだけとなり、修女の陳珠珍が教務を担当し、信徒は三〇人まで減少した。そして一九八二年、陳珠珍が原籍の豊県に強制送還され、淮陰における天主教の活動は基本的に消滅した。

三 淮陰市の概況―『淮陰市志』に見える基督教（プロテスタント）の布教活動

（1）概況

プロテスタントが淮陰地区に伝教に入るのは、カトリックよりも遙かに遅い、清末になってからである。淮陰に最も早く伝教に入ったのは、アメリカの南長老会で光緒一三（一八八七）年のことであった。光緒一九（一八九三）には内地会も布教に入っている。長老派を初めとする各派は淮安、淮陰、宿遷、泗洪、泗陽、漣水、灌南などの地に教堂を建設していき、孤児院や学校、病院の建設など慈善事業も盛んに行った。

民国五（一九一六）年、三六の教会組織が聯合して、「中華長老聯合会」（一九二〇年に「中華基督教会」と改称）が組織されるなど、教会組織の「中国化」が進む。同年には安息日会が布教に入り、一九三〇年以降は小群会、真

耶蘇教会、自立会、神召会など複数の教派が布教活動を行うなど、いわば乱立状態となる。このうち小群会や、真耶蘇教会、自立会は、元長老教会の伝道人や信徒が再加入して淮陰に持ち帰った組織である。しかしながら、一九五八年に全区の基督教堂が整頓された際に、中華基督教会を除き、その多くは活動の停止を命じられたり、自然消滅していった。

『淮陰市志』（地区）におけるプロテスタントの記述は、カトリックに比べて圧倒的に多い。これは淮陰において清末以降、プロテスタントが多くの人々によって受け入れられ、現在も多くの信者がいるという歴史的な背景を反映したものとなっている。建国後も、地方政府によってプロテスタントが受け入れられた最大の要因は、民国期以来の教会組織の「中国化」と、「中華基督教会」が三自愛国方針を実行し、外国教会との関係を絶った、ということが大きい。もともと、文化大革命中は活動の停止を余儀なくされたのは言うまでもないが、改革開放以降、再び信者の数も増加している。以下、『淮陰市志』に見える基督教（プロテスタント）に関する全文を紹介したい。なお、小見出しは筆者による。

（2）『淮陰市志』に見える基督教（プロテスタント）の伝教活動に関する記述

1 現在までの概況

清末になると、基督教（プロテスタント）も淮陰市に入り、淮安、淮陰、宿遷、泗洪、泗陽、漣水、灌南などの地に教堂を建設、教会も発展し、慈善事業も盛んになった。建国後、天主教は徐々に誰も信奉しなくなったが、基督教は三自愛国方針を実行し、外国教会との関係を絶ったため、信徒の数も増加した。文化大革命中、活動は停滞した。

（一九七八年の）中共一一期三中全会以降、党の宗教政策が全面的に貫徹され、基督教を信仰する人数も不断に

増加し、一九八〇年以降、平均毎年二万人以上の速度で増加している。分布も全市の各地（金湖県の一部の郷や鎮だけ、キリスト教徒がいらない）に広がり、一九八七年までに一四万五三九六人に達し、これは江蘇省が管轄している市のなかで、キリスト教徒の数が最も多い市となっている。

明清時、淮安、宿遷、漣水などの地は、僧会司、道会司など専門に宗教を管理する事務が設けられてきた。民国期になると、一部の県や市では、宗教協会の類いの組織も存在した。

新中国成立後、宗教事務は前後して地区共産党委員会の宣伝部や統一戦線部が兼務して管理するようになった。一九八一年、淮陰地区行政公署は、民族宗教事務処を設立、宗教業務を専門に管理することとなった。一九八七年までに、全市の宗教事務に携わる幹部は二七名、各郷鎮にも宗教事務を兼務する幹部が^(注1)いる。

2 教会組織

淮陰の基督教派には、中華基督教会（長老派）（American Southern Presbyterian Mission）、内地会（China Inland Mission）、安息日会、小群会（基督教聚会所）、真耶穌教会（True Jesus Church）、自立会、神召会（Assemblies of God）などがある。以下、各教会組織の概略を『淮陰市志』から紹介する。

①中華基督教会（長老派）〔American Southern Presbyterian Mission〕

最も早いのは、アメリカの南長老会の鮑達理夫婦が光緒一三（一八八七）年に淮陰地区〔の宿遷〕に伝教にやってきた。民国五（一九一六）年、中国の沿海地区における（正統の派に属する）基督教の三六の教会組織が聯合して、「中華長老聯合会」が組織され、後に「中華基督教会」と改称された。江蘇省では相次いで「江南会区」と「江淮

会区」が成立した。江淮大会は淮陰にて「清淮区会」を成立させ、牧師の郭如柏がこの会の責任者となったが、もなくして戴德明牧師に委託された。民国三〇（一九四一）年、太平洋戦争が勃発、戴德明牧師がアメリカに帰国した。戦争終結後、戴德明の子供の戴文輝が淮陰に戻り、会務を受け持った。民国三七（一九四八）年、戴文輝が帰国したため、清淮会区の責任者は錢再天が担当した。一九五一年九月以降は孫廷揚牧師が責任者となっている。

一九五七年三月二〇日〜二四日、中華基督教會清淮区会は清江市の博古巷耶蘇教堂にて代表會議を開催、清淮会区を解消し、淮陰区会を成立させ、常任委員九人を選出した。その中には会長の孫廷揚、副会長の庄猷猷、張權、費蘇らが、執行幹事の吳慕光、幹事の黃振懷らが含まれる。

建国前、淮陰の中華基督教會は全区域の各県、市に分布し、全部で九八個所の教堂や聚會所があり、一〇〇〇余名の信徒があり、そのうち洗礼を受けた者は五七〇人、専任の伝道員は一名であった。

一九五五年の統計では、教堂や聚會所は一一二個所あり、そのうち中心教堂は三四、支堂は五八、祈祷所は二〇あり、信者は五四八七名、そのうち洗礼を受けた者は二四六八名、専任の伝道者は二四名いた。

一九五八年、全区の基督教教堂が整頓され、中華基督教會二六の教堂を解消、五八個所を合併し、三八個所を残した。一九六三年、残された三八個所以外に、私設の聚會所が一六八個所に増加し、教徒も一万二〇七七人に増加した。文化大革命時期、教徒らは自ら解散した。

②内地会 [China Inland Mission]

清の光緒一九（一八九三）年、英国から来た伝道士が、揚州から清江浦の銅元街付近（現在の汽車修配廠院内）に教會を設立した。内地地会は淮陰の中では、僅かに漣水と泗洪などの県に伝教しただけであった。建国後、僅かに教堂が二個所残り、教徒数は二一七名であった。一九五八年、自然消滅した。

③安息日会

民国五（一九一六）年に宿遷に入り、埧子にて三〇余人に發展した。民国一三（一九二四）年、徐州から泗陽に伝入し、長源から衆興鎮に到達し、その太平巷に教会を設立した。後に、泗陽から清江浦に伝道した。民国二〇年八月、十里長街の陸市巷に教堂を建設、「警世堂」と名付けられた。安息日会の淮陰での主要な分布は、泗陽、宿遷、漣水、清江市などで、淮北区会の徐州教区の指導を受けており、房洪甫が淮陰の総責任者となった。

建国前、全部で教堂は一二個所あり、信徒は三四二人、伝道員は八人であった。一九五五年の統計では、教堂は一七個所、教徒は五八三人、伝道員は一〇人であった。一九五八年、教堂の数を整頓し、安息日会は四個所の教堂を解消され、一〇の教堂が合併され、九個所の教堂が残された（計算が合わないが五八年までに総数に変化があった可能性もある）。

一九六三年以降、撤収されたり合併された教堂にて教徒らが私的に聚会を開いていたが、文化大革命が開始されると、全ての活動は停止した。

④小群会（基督教聚会所）

民国一九（一九三〇）年、淮陰長老会の伝道人、邱日鑑が長老会を離脱し、小群会に加入すると、淮安北部、漣水、灌南などの地で伝教を行った。建国前、二〇の聚会所があり、教徒は八二七人、伝道員は二三名いた。一九五五年の統計では、教堂は二個所増え、信徒も一四一三名に増加している。一九五八年の整頓時、教堂の一個所が撤収、六個所が合併、一五個所が残された。

⑤真耶穌教会 [True Jesus Church]

もと長老会の信徒だった劉德栄が、上海にて真耶穌教会に加入した後、民国二二（一九三三）年、淮陰に入り、

教会を設立すると、瞬く間に漣水、泗陽、淮安、沭陽などの地に発展した。淮陰県の丁集郷の何尊堯は、劉徳榮の助手を務めた後、上海の支会に参加した際に支会の責任者と知り合い、淮陰に戻った後、真耶蘇教会の淮陰分会を發起、設立して自ら主任になった。

建国前、真耶蘇教会は全部で三一の教堂があり、そのうち中心堂は二三箇所、支堂が六箇所、祈祷所が二箇所あった。伝道員は三一人で、信徒は二〇八八人、そのうち洗礼を受けたものは一二七九人いた。一九五五年の統計では、教徒は二九一三名に増加している。一九五八年七月、教堂の数が整頓される中で、解散させられた教堂は二八箇所、残されたのは六箇所であったが、八月に真耶蘇教会は全て解散させられた。

⑥自立会

民国二二（一九三三）年、漣水県の石湖教会の孟長老が長老会を離脱、総会が上海に設立した「基督教自立会」に加入し、本地において教会を設立した。その後、孟は上海総会に行き、牧師と認められ、本地に戻ってから、陸統として、漕河兩岸、漣水県五港、灌南県新集などで教会を設立した。自立会が淮陰で伝教した範囲は非常に狭く、信徒も多くなかった。建国後、僅かに一つの教堂があり、教徒数は七二名であった。一九五八年、解散した。

⑦神召会

淮陰人の桑国祥、高奎珍、朱約翰などが上海からこの地に伝道に入り、民国二六（一九三七）年、漣水県の悦来や淮陰県の徐溜にて教会を設立した。その後、瞬く間に一三箇所に教堂を建設していき、主な分布は淮陰、淮安、漣水の三県で、建国前、教徒は七一六人、そのうち洗礼を受けた者は三〇四人、伝道人員は九名であった。一九五五年の統計では、七二六名に増加している。一九五八年の教会数の整頓では、三箇所の教堂が解消され、二箇所が合併され、五つが残されたが、八月になると神召会は解散させられた。

⑧ 耶蘇家庭

民国一八（一九二九）年、山東の濰県人の張学慕が泗洪の双溝にやってきて耶蘇家庭を伝教した。最初は三部屋を借り、後にこれを買取り、信徒五〇人あまりを収容した。民国二四年に解散し、三部屋はその年、売却された。民国三二（一九四三）年、張学慕親子が再び双溝にやってきて、耶蘇家庭を再建した。翌年、続けざまに九部屋を建設した。耶蘇家庭に入ったのは十数人で、三〇畝の土地を買ひ、全ての物は共有し、農作業の収入も集団所有とし、衣服も同じものを作った。「当時、人々の」生活は苦しかったため、訪れて礼拝に来る人間は多かった。建国後、この教会組織は人民政府によって取り締まりを受けた。^(注15)

3 南長老教会の伝教活動と伝教活動の中国化

清の光緒一三年（一八八七年）、アメリカの南長老教会の鮑達理夫婦が最初に宿遷に伝教にやってきた。続いて、南長老教会のト徳生、賽兆祥、任恩庚、及び周と馬の両女子が光緒一七年に前後して宿遷にやってきた。この年、ト徳生は宿遷にて二階建ての住居と教堂を設立し、木船に乗って京江大運河に沿って清江浦、淮安、及び塩城、阜寧一帯を巡回して伝教に回った。

光緒一九（一八九三）年、中国で設立された長老会総部は、陸統と賈雅各、林嘉美（林靄士）、林亮理、未徳安、戴徳明らを淮陰地区に派遣し、伝教活動を行った。この際、内地会のイギリス宣教師もまた揚州から清江浦にやってきて教会を設立、伝道を行った。この年、伝教は漣水にまで達し、漣水東門内（今の漣水中院内）に土地を買ひ、堂を建設、さらに漣水に一二の分点を設立した。

光緒二〇（一八九四）年、アメリカ人の林嘉美、林嘉善が淮安にやってきて、南市橋に部屋を借り、布教を行った。

林嘉美の二人の娘である林樂喜、林愛蓮はもっぱら女性を相手に伝道を行った。

光緒三〇（一九〇四）年、艾德生、孟格美、王慕德、魏礼安などのアメリカ人も手を携えて淮陰地区にやってきて、南市橋に北福音堂を建設した。

宣統二年（一九一〇年）、アメリカ籍の宣教師、朱德安が灌南の新安鎮に伝教に入り、教堂を建設した。

民国五年（一九一六年）、アメリカ人の戴德明が淮安人の盧相甫を泗陽に派遣し、南門の陳氏祠堂を借りて伝教を行ったほか、間もなくして清江浦人の劉素珍を泗陽の何面に派遣し、伝教を行った。

民国九（一九二〇）年、アメリカ人の郭如柏、賈嘉美、戴德明が沭陽城に行き、堂を建設して伝教を始めた。民国一四（一九二五）年、アメリカ人の賈雅各は王宮宅西街に堂を建設、伝教を始めた。民国一五（一九二六）年と一九（一九三〇）年、アメリカ人の孟格美、卜德明が相次いで泗洪の青陽一带に伝教に入ったほか、宿遷に住んでいたアメリカ人の梅克康もまたしばしば金鎮一带に赴き、伝教を行った。

アメリカのミッショナリーの宣教師らは、伝教の便を考えて、自分たちの間で分担を決めていた。彼らは淮流公路を境に、公路の東側の沭陽、蓮水、淮安、洪澤などの県は賈雅各牧師が責任を持ち、公路の西側の泗陽、淮陰、泗洪などの県は戴德明牧師が責任を負った。淮陰地区は面積も広く、人口も多いため、全てに気を配ることができないため、一部の中国人伝道師も起用した。淮陰地区における初期の中国人宣教師としては、趙鴻賓、張諭農、張樂道、吳鶴雲、陳鵬雲、韓玉国、胡鏡心、吳冀堂、趙子貞、高美実などがいた。

民国一九（一九三〇）年、中国人の孫廷揚、庄献稣、張権、費蘇、黄正懷、張馨、張淨貞、宋春田、吳水泉なども伝教を開始した。彼らは皆、西方のミッショナリーに属し、毎月、ミッショナリーから給料を受け取っていた。

西方のミッショナリーは現地の伝道者を軽視していたため、泗陽などの地の伝道人らは民族の自尊から、外来の

ミッションナリーに従属することを良しとせず、陳訪がリーダーを務めていた泗陽県中華基督教教会が泗陽県内の基督教各派を聯合し、民国二二（一九三三）年に「泗陽基督教聯合会」を組織し、後に「泗陽基督教促進会」と改名、教会の自営を主張した。民国二四（一九三五）年には、衆興鎮にて三畝の土地を購入し、五部屋からなる教堂を建設した。極力、西方の教会のコントロールから脱し、自ら布教活動を行った。

陳訪が逝去した後、泗陽教会の責任者であった賈耀南、陳耀鰐、庄献鰐、張権らが発起人となり、民国二八（一九三九）年に泗陽の来安鎮北賈莊村にて、全県の教会代表、及び淮陰、沭陽の一部からなる教会代表会議を開催、「中華基督教淮沭泗自立会」の成立を決定した。会議では、陳耀鰐を会長に選出した。

民国三三（一九四四）年、この会は泗陽の里仁にて第二回代表会議を開催、庄献鰐を会長に、張権を副会長に選出した。「中華基督教淮沭泗自立会」は民国三四（一九四五）年、「米軍の撤退を要求し、内戦を停止するように」という趣旨の伝法をアメリカ国務卿マーシャルに打電した。この電文の全文は民国三四年の『新華日報』上に掲載され、『淮海報』や『阜寧大衆報』などが転載した。当時、中共の淮陰地区委員の責任者が、これを契機として自立会の代表と接見している。^{（注16）}

4 清江浦内の著名な教堂

基督教が淮陰に入って以降、各地に陸続と教堂が建設されたが、規模及び影響力が大きな教堂は三座ある。

① A 字形福音堂

市区の老壩口基隆巷内（現老壩口小学教学楼）に位置し、清の光緒二四年（一八九八）に建設された。教堂の額の額には「帰榮耀於上帝」の六文字が刻まれている。

②同慶街教堂

民国一二（一九二三）年、基督教会の外籍宣教師が現地の信徒の寄付に資金的支援を行い、同慶街北段の地に礼拜堂を建設した。教堂は「十字架」の形をしており、一二部屋あり、五〇〇人を収容することができた。教堂の出口には三階建ての「鐘楼」があり、門の上の横木には「以便以謝」の四文字が今もなお残っている。鐘楼の上には、大きな鋼鉄の鐘があり、叩くと周囲一〇数里にいる人までその音を聞くことができた。抗日戦争時期、一度だけ、警報器として使われたことがあった。この鐘は、文化大革命中に落ちて無くなってしまった。一九八七年、鐘楼の西側の地から「建堂志」が掘り出された。記載された建堂者には、賈雅各・戴德明・田克迪・衛約翰・林嘉美・鐘仁溥（鐘愛華）・高美実・高益山・崔宝寺・庄世澄・陳宝族・高美具・楊文後・孫寿連・孫廷揚・吳永泉・陳道生・王大衛など一一五名の名前があった。

解放前後、外国籍の宣教師が帰国し、この堂は清淮区の所在地となり、会長の孫廷揚が管理した。その後、陳宝禎、陳道生、劉瑞卿、王大衛、張淨貞、黄振懷らが相次いで管理を引き継いだ。一九五八年、この堂は、工場として提供することを迫られた。いくつかの工場が交代したのち、「五金一廠」が占用することとなった。一九八二年三月、教会が産権を回収したが、その後も「五金一廠」に賃貸している。

③博古路基督教堂

淮海南路博古路一号に位置し、民国二〇（一九三一）年に同慶街の教堂の分堂として建設された。解放当時、吳永泉が管理、後に張淨貞が、一九五四年に黄振懷が責任者として管理した。この教堂はかつて、清淮区「抗美援朝」、及び三自革新運動促進会の所在地であった。一九五八年、淮陰県綜務係が占有することとなった。その後、淮海路が拡張するため、八部屋を壊し、残りの三部屋は新華書店に売却された。

現在、市区には正常に開放、使用されている教堂としては、「平和路福音堂」がある。^(注7)

ここで「維基百科」の記述をもとに、上述の補足をしておきたい。南長老教会にとって清江浦における最初の中心教堂は「基隆巷福音堂」で、一九世紀末に賽兆祥牧師（賽珍珠、即ちパール・バックの父）によって建設された。これが「A字形福音堂」に相当する。

同慶街教堂は同慶堂とも呼ばれ、第二番目の中心教堂である。場所は城外の同慶街一四号にあり、一九二三年に建設された。専有面積は四畝で、建物は十字形をしていて、一二の部屋からなる。堂内は一度に五〇〇人を収容できる。教堂の鐘楼の高さは八メートル、門楣の上には「以便以謝」と書かれている。（一九五七年の教堂の整頓により）一九五八年から聯合礼拜を行うようになるが、同慶堂は全市に五つあった各教派の教堂のうち、唯一存続できた教堂である。一九六六年の文化大革命時期、教堂は閉鎖され、五金廠に占用された。文革終結後、和平路にあった元の牧師楼（家雅各の住宅）を臨時に「和平路福音堂」として聚会を行った。同慶堂は長期間、教会に返還されることなく、教堂の大部分は崩れ、鐘楼だけが原形を留めるだけであった。二〇年後、信者の急速な増加にともない、一九九九年になって上海西路に面積三六八五平方メートルの「淮安市基督教教堂」を建設し、収容人数は四〇〇〇名に拡大された。二〇〇九年になって、鐘楼は淮安市の文物保護單位に指定された。但し、同慶堂があった同慶街、十里東長街、越河街は再開発区域となり、二〇一〇年に協議の結果、鐘楼は元の場所に保存し、越河路の向かいの里運文化長廊内に教堂を再建した。しかしこの教堂は現在に至るまで使われていない。

神恩堂は淮安市にある大型のキリスト教の教堂で、清浦区の延安西路の南側にある。神恩堂の前身は南長老教会が建設した「博古路礼拜堂」で、これは城内の博古巷一号（今の淮海南路東大街南側）にあり、一九三一年に城外

の同慶街礼拜堂の分堂として建設された。一九五〇年代に博古路を拡張する際に、教堂の大部分が壊され、一間のうち、三間しか残らず、それも他の用途に使われた。

一九九〇年代になって清浦区の董振山牧師が所属する教会が急速に発展したため、二〇〇六年に清浦区政府が二二畝の土地を用意し、二年後に九階建ての高さ六五メートル、建築面積一〇一〇〇平方メートルの教堂を建設した。費用は三〇〇〇万元で、二〇〇九年五月二日に開堂式典が執り行われた。現在のところ、アジア最大規模のキリスト教の教堂といふことである。^(注18)

(3) 布教活動の歴史地理

淮陰地区に最も早く伝教に入つたのは、アメリカの南長老会の宣教師で、光緒一三（一八八七）年のことであつた。南長老教会として中国にて布教活動を開始するのは一八六七年のことであり、それから二〇年の時を経て、淮陰まで辿り着いたことになる。長老教会による布教活動は組織的で、長期間、継続し、教会組織の中国化も進んだ結果、最終的に淮陰地区のほぼ全県に及んだ。信者の数も、建国前で一〇〇〇人、一九五五年で五四八七人、一九六三年には一二〇七七人と、他の教派と比べ圧倒的である。

南長老教会の伝教から僅か六年後の一八九三年に、内地会が淮陰に入っている。但し、内地会の布教地域は淮陰のほか、漣水と泗洪に限定され、信者数も数百人と多くはなかった。それから二三年後の一九一六年、民国期に入つて安息日会が徐州から宿遷、泗陽、漣水に伝入したが、やはり信者数は数百人規模に留まつた。

一九三〇年代以降になると、小群会、真耶穌教会、自立会、神召会、耶蘇家庭などが陸続と伝入する。小群会は、淮陰長老会の伝道人が長老会を離脱、小群会に加入して、淮安北部、漣水、灌南などの地で伝教を行ったものであ

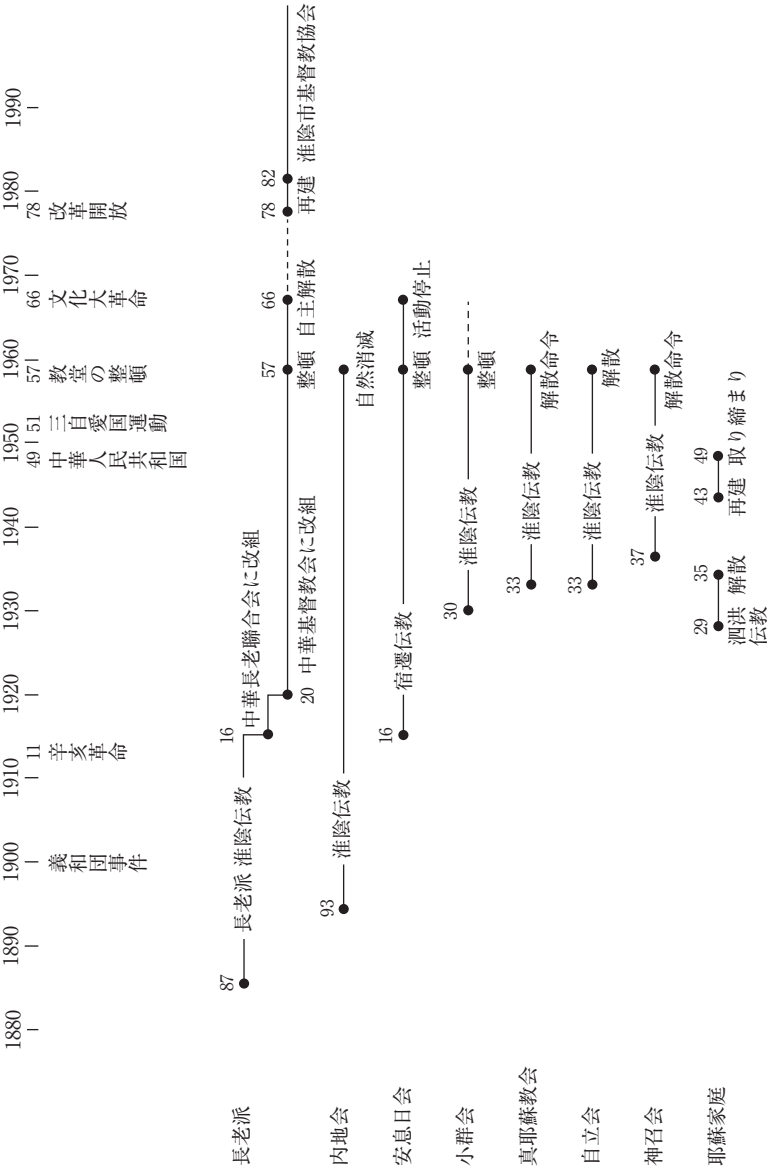
るが、やはり信者数は一〇〇〇人に達しなかった。真耶蘇教会も長老会の信徒が上海にて真耶蘇教会に加入、淮陰にて教会を設立したものである。信徒数は二〇〇〇人を超えた。自立会も漣水県の孟長老が長老会を離脱、上海で設立された「基督教自立会」に加入し、淮陰において教会を設立したものであるが、信徒数は一〇〇〇名に達しなかった。神召会は淮陰人が上海から淮陰に伝道に入り、漣水県などで伝教を行ったが、信者数は一〇〇〇人に達しなかった。耶蘇家庭は山東からの伝教であるが、場所も泗洪県双溝に限定され、信者数も数十名に過ぎなかった。耶蘇家庭は一九四九年の建国時に当局の取り締まりを受けている。

これらの教派のうち、長老派を除く全ての教派は、一九五七年に行われた「教堂の整頓」を期に、自然消滅（内地会）や解散命令を受けて活動を停止している。長老派の信者らも文化大革命期には活動を自粛したが、改革開放以降、再建され、淮陰地区で唯一存続している教派となっている。

各教派の伝教の開始と停止時期などを年表にまとめたのが【図表7】である。こうして見ると、長老派による伝教の歴史の古さと、文革時の中断はあったにせよ、その永続性が際だっていることが改めて分かる。もっとも、それが可能となったのは、民国期から始まる教会運営の中国化があったからでもあった。そんななか、内地会も健闘したとはいえ、場所も信者数も極めて限られたものであった。他の教派となると、だいたい一九三〇年代に陸続と伝教が行われたが、全て一九五七年の「教堂の整頓」を期に、活動の停止に追い込まれている。

また、伝教開始から一九五〇年代までの教派別の伝道地、伝道師数、信者数を表にまとめたのが【図表8】である。

【図表7】教派別の年表



【図表8】教派別の伝道地、伝道師数、信者数

会派（期間）	伝教経路	伝道師	最初の布教場所	主な布教場所	教堂数	伝道師数	信者数
長老派（中華基督教会）（1887～）	米国南長老会の鮑達理	淮陰地区	ほぼ全城		【建国前】		
					98	1	1000
					【1955】		
					112	24	5487
					（うち中心教堂34）（うち洗礼者2468）		
内地会（1893～1957）	揚州	英国人	清江浦銅元街付近	漣水・泗洪	【1958】教堂整頓		
					38（26解消、58合併を経て）		
					【1963】		
					38+私設聚会所	168	12077
					【建国時】		
安息日会（1916～1966）	—	—	宿遷埠子	泗陽・宿遷・漣水・清江市	2	—	217
					【建国前】		
					12	8	342
					【1955】		
					17	10	583
小群会（基督教聚会所）（1930～1957）	—	邱日鑑	淮安北部	漣水・灌南	【1958】教堂整頓		
					9（4解消、10合併を経て）		
					【建国前】		
					20	23	827
					【1955】		
真耶穌教会（1933～1957）	—	劉德榮	淮陰	漣水・泗陽・淮安・流溝	22	—	1413
					【1958】教堂整頓		
					15（1撤収、6合併を経て）		—
					【建国前】		
					31	31	2088
自立会（1933～1957）	孟長老	漕河兩岸、漣水五港、灌南縣新集			心教堂23、支堂6、祈祷所2	洗礼者1279	
					【1955】		
					—	—	2913
					【1958】教堂整頓		
					0（解散28の後、全解散）		
神召会（1937～1957）	上海	桑国祥・高奎珍・朱約翰（いずれも淮陰人）	漣水県悦来・淮陰県徐溜	淮陰・淮安・漣水	【建国後】		
					1	—	72
					【建国前】		
					9	—	617
					（うち洗礼者304）		
耶穌家庭（1929～1949）	山東濰县人張學慕	泗洪県双溝			【1955】		
					—	—	726
					【1958】教堂整頓		
					0（合併の後、全解散）		
					【1929】		
耶蘇家庭（1929～1949）					1	—	50
					【1949】		
					0（取り締まりの結果）		

ここで中国の事例から一旦離れて、キリスト教史における各教派の歴史を簡単に整理しておきたい。

長老派教会 (Presbyterian Church) は一六世紀におけるスイスの宗教改革にまで遡る長い歴史を誇るカルヴァン派の教派である。Presbyterian (プレスビテリアン) を名乗るようになるのはスコットランドにおいて、一五六七年にスコットランドの国教となる。その後も教義の解釈をめぐる分派を繰り返す、北米においてもアメリカ合衆国の独立後、「アメリカ合衆国長老教会」(Presbyterian Church in the United States of America, PCUSA) が組織され、一七八九年にフィラデルフィアで最初の大会が開催された。教会組織は北米においても分派を繰り返すが、一八六一年に米国南部の州の長老教会は、奴隷制度の存続をめぐる「アメリカ合衆国長老教会」から離れ、「合衆国長老教会」(Presbyterian Church in the United States, PCUS) を組織した。北部の「アメリカ合衆国長老教会」に対し、「南長老教会」(The Southern Presbyterian Church) と呼ばれる。「アメリカ合衆国長老教会」は一八三八年から中国に宣教師を派遣しており、その途中で本国において組織が南北に分裂してしまったことになる。南長老教会として中国にて布教活動を開始するのは一八六七年のことであり、長老教会の伝道開始から二九年後のことであった。

なお、その後の展開を紹介しておく、「アメリカ合衆国長老教会」から分離した保守派が一九三〇年代に「正統長老教会」を組織し、一九五八年には本体を吸収合併し、一九八三年に現在の「USA 長老教会」(Presbyterian Church (U.S.A.)) を組織した。従って、一七八九年に成立した「アメリカ合衆国長老教会」(PCUSA) の名称は、一九五八年をもって消滅することになった。一方、南部の「合衆国長老教会」(PCUS) であるが、公民権運動の際に三派に分裂し、一九七三年には保守派が「合衆国長老教会」から分離し、Presbyterian Church in America を設立する。その後、「合衆国長老教会」は、一九八三年になって、「USA 長老教会」(Presbyterian Church (U.S.A.)) に合流する。この結果、「合衆国長老教会」(PCUS) や通称の「南長老教会」(The Southern Presbyterian Church)

という名称も一九八三年をもって消滅することとなった。アメリカにおいても、長老派は分裂を繰り返しながらも、最終的に一九八三年に大同団結する結果となった。

内地会は China Inland Mission の中国語名。内地会はイギリス人宣教師のハドソン・テラー（中国名、戴德生、敬称は戴公）によって一八六七年に中国で設立された組織である。テラーは一八五三年に来華するも、一八五七年に自分を派遣した教団から離脱し、「寧波差会」を設立、独力で浙江省にて布教活動を行う。結婚後、一八六〇年にイギリスに帰国するが、一八六六年に中国に戻り、「寧波差会」(mission society) を「中国内地会」と改称した。一八七〇年、夫人の病死にともない一時帰国、再婚後、再び一八七二年に入華し、一八九〇年に内地会の本部を当初の杭州から上海に移した。

内地会の特徴としては、本部を中国に置いて本国の指示を受けないこと、内地会所属の宣教師らは欧米各国に跨がること、伝導方針としてできる限り迅速にキリスト教を中国全土に普及させること、そのためには抵抗の少ない地方から布教を行い、一度布教をした所でこれを引き受ける他の教団があれば、これを譲渡してさらに内地へ入って伝道を行う、などが挙げられる。

当時、五つの開港地以外における外国人の居住権が問題となっていたが、テラーはこれを武力でもって押し切る。即ち、一八六七年、五開港地以外の一カ所での伝教活動を開始する。その一つである揚州にて教案事件が起こると、砲艦四隻で南京に乗り込み、曾國藩に強行談判し、揚州知府らを処分させる。この結果、内地会所属の宣教師らの内地進出の基礎が築かれることとなった。このようにしてテラーは中国滞在中の五〇余年の間に、合計、八二八人もの宣教師を招集した。しかしこうした強行姿勢は中国人の反キリスト教感情を助長し、一九〇〇年の義和団事件へと至る。犠牲となった宣教師には内地会所属の者が多かった。内地会は一九五〇年代に中国大陸から撤

収し、一九六四年には名称を「The Overseas Missionary Fellowship (中国語名称は海外基督使団)と改称。現在、日本を含む東南アジア各国で約一〇〇〇名の宣教師を擁し、伝教活動を行っている。

安息日会の正式名称は「基督復臨安息日会」で、「The Seventh-day Adventist Church (SDA) の中国語名称である。セブンスデー・アドベンチスト教会は一八四〇年代に北米で起こった再臨待望運動を源とする。即ち、ウィリアム・ミラーが聖書の予言からイエス・キリストの再臨の日を予告し、各地で再臨待望集会が開かれるも、再臨は起こらなかった。そこでミラーの支持者らが「第七日安息日の遵守と、キリストの再臨とは深く結びついている」と再解釈し、一八六三年になってセブンスデー・アドベンチスト教会を立ち上げた。セブンスデーは週の第七日(現在の土曜日)の安息日とすること、アドベンチストはキリストの再臨を待ち望む者を意味する。現在、二〇九の国で活動し、信者は二〇〇〇万人に達する。自身はプロテスタントの一派と自認しているが、設立当初は異端視されることもあった。小群会(別名「基督教聚会所」)の詳細は不詳であるが、中国で発生した地方的な教派のようでもある。後述する『淮陰県志』によると、淮陰の小群会は上海から来た一教徒に起源をもつとしている。^(注20) また『漣水県志』は、民国一七(一九二八)年、アメリカの長老会によって、阜寧や蘇咀(淮安市の蘇咀鎮のことか)などの地で創設された、とある。^(注21) 長老会自身が分派を作るとは思えないので、おそらく長老会を離脱した人物が蘇北にて創設したものである。その人物が上海から来た可能性もある。

真耶蘇教会は「True Jesus Church」の中国語名。真イエス教会は一九一七年に北京にて、啓示を受けた魏恩波(1879-1919^{*} Paul Wei)によって設立された宗教組織で、その後、日本を含め東アジアや世界に広がっていった。現在、三七ヶ国に約一五〇万人の信者を擁す。真イエス教会に対しては、教義上・信仰の実践上、プロテスタントの一派と見なすことが難しいとする見解もある。

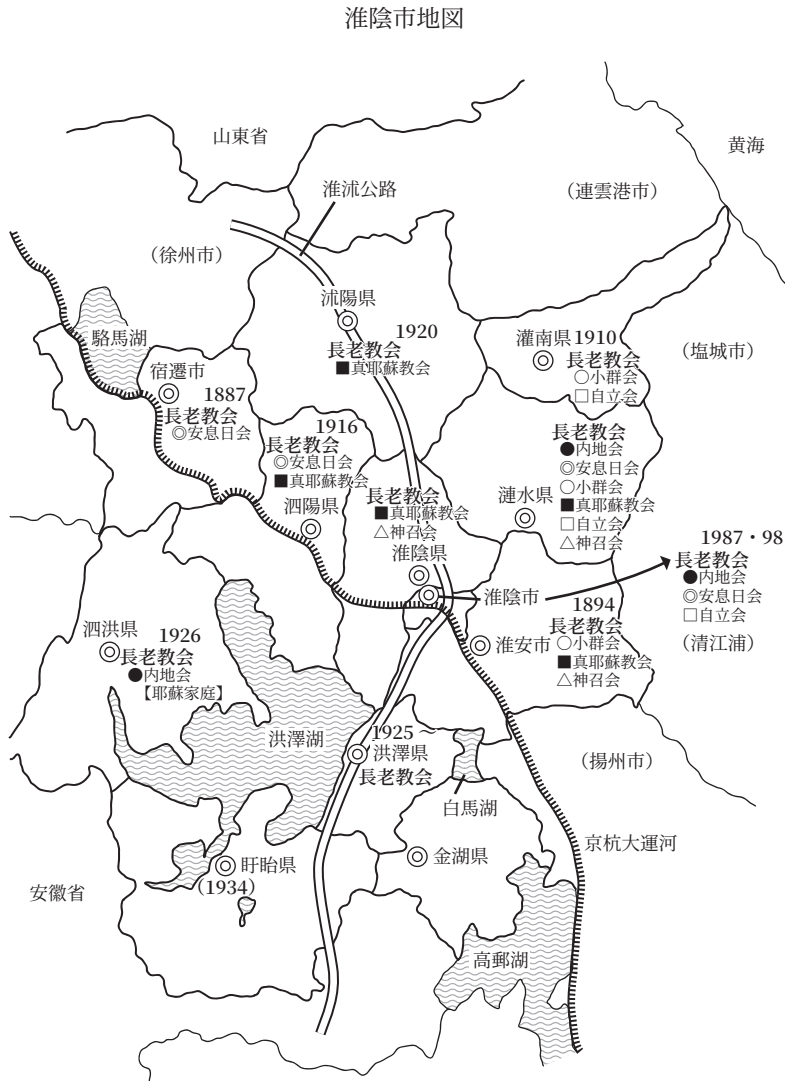
自立会は上海で設立された「基督教自立会」が起源のようである。名称からして、プロテスタント教派の中国化の過程で生まれた組織のようである。

神召会は Assemblies of God の中国語名。アッセンブリーズ・オブ・ゴッドはプロテスタントのペンテコステ派の中で世界最大の一派で、本部はアメリカのミズーリ州スプリングフィールドにある。アメリカ福音同盟に加盟し、現在、日本を含む世界一九〇カ国に三十七万以上の教会を擁し、約七千万人の信者がいる。

耶蘇家庭は中国で発生したカルト的な集団のようである。『徐州市志』によると、全国の耶蘇家庭の本部は山東の泰安馬莊にある。民国三五（一九四六）年に徐州に入った後、徐州の「家長」は韓化普がなった。耶蘇家庭は、封建的な家長制を採用し、家長が全家庭の全てを統括する。耶蘇家庭に入る者は、もとの家庭から出て、家長に従い、共同老堂、共同生活を行ない、肉体労働によって最低限の生活費用を捻出する。その後、社会の形勢発展に適応できず、耶蘇家庭は自動的に解体した。信徒らは各地の聯合礼拝に参加することとなった。^(注2) 淮陰地区には、民国一八（一九二九）年、山東濰県人の張学慕が泗洪の双溝にやってきて耶蘇家庭を伝教したということであるから、徐州経由ではなく、山東から直接伝教に來たようである。

これらのうち、海外の宣教師らによって伝教された会派は、南長老教会（The Southern Presbyterian Church）、中国内地会（China Inland Mission）、但し成立は中国の浙江）、基督復臨安息日会（The Seventh-day Adventist Church）、神召会（Assemblies of God）の四つで、残りの小群会（基督教聚会所）、真耶穌教会（魏恩波によって一九一七年に北京で組織）、自立会（上海で設立された「基督教自立会」）、耶蘇家庭（山東で発生）は、中国内で生まれた会派ということになる。各会派の伝教地域を淮陰市の地図に示したのが【図表9】「県別の伝教情況」である。

【図表 9】 県別の伝教情況



こうして見ると、長老派がほぼ全県に伝教活動を拡大して教会を設立していったのに対し、他の会派の伝教地には地域的な偏りが見られる。なお、清江浦の管轄は何度かの変遷を経ているが、狭義の淮陰県とほぼ同じと考えてさしつかえなからう。なので両者を合体して捉えてもよい。長老派に次いで伝教に入った内地会の場合、清江浦の他は、大運河を挟む形で漣水と泗洪にて伝教している。おそらく淮陰市の全域をカバーするよりは、ここを足がかりにさらに中国の内地へと移動していったものと思われる。安息日会の場合、徐州から伝教し、大運河沿いに南下していったという経緯を反映して、宿遷、泗陽、宿遷、淮陰市（清江浦）、漣水に広がっている。小群会の場合、淮安北部、漣水、灌南と、淮安から北上した地域に限定される。真耶穌教会の場合、淮安とその北の漣水、淮陰、泗陽とその北の沭陽にて伝教している。自立会の場合、淮陰市（清江浦）の他、その北の漣水と灌南にて伝教している。神召会の場合、淮安、淮陰及びその北の漣水にて伝教している。耶穌家庭の場合、泗洪県双溝に限定される〔後述の如く、洪澤県もこれに加わる〕。

伝教のルートでいうと、徐州からの安息日会、山東からの耶穌家庭を除くと、全ての教派が上海（内地会の場合）は揚州經由、南長老教会は鎮江經由）からの伝教となっている。いずれの場合も、大運河が重要な交通手段となっていたことは間違いないからう。また、長老派と耶穌家庭を除くと、いずれも大運河の東側にて伝教活動を行っている。とりわけ漣水では七つもの教派が伝教を行っている。その理由が何であるのかは興味深い問題である。反対に、大運河の西側は、長老派を除いて手が付けられていない。唯一、耶穌家庭がそうした空白地帯に入り込んだ、ということが言えよう。

『淮陰市志』は、淮陰地区におけるプロテスタントの伝教活動とその中国化について、やや詳しく記述しているが、

実際には南長老教会の伝教活動に焦点を当てている。記述によると、南長老教会の鮑達理夫婦が光緒一三年（一八八七年）に、先ず宿遷にやってきて、ここを拠点とした。続いて光緒一七（一八九一）年に前後して南長老教会のト徳生、賽兆祥、任恩庚、及び周と馬の両女子も宿遷に来たとある。ト徳生は宿遷にて二階建ての住居と教堂を設立し、木船に乗って京江大運河に沿って清江浦、淮安及び塩城、阜寧一帯を巡回して布教に回ったという。

ここで出て来る「賽兆祥」が、パール・バックの父であるアブサラム・サイデンステッカーその人である。アブサラム・サイデンステッカーの伝記に依れば、一八八六年に山東の芝罘から鎮江に移動すると、早々に蘇北を訪問し、清江浦が拠点に最適であると判断、二階建ての煉瓦造りの家を借り引っ越しの準備をする。そして一八八七年、委員会への承諾を得て他の家族とともに清江浦へ移動している。しかし一八八九年に子供を亡くし、埋葬のために上海に戻り、九〇年に一時帰国する。九二年に中国に戻り、再び清江浦に戻る。その後、九三年の春に宿遷にて拠点を開設、しかし適当な家を見つけないで、二年間は清江浦から通った。その後、かやぶき屋根の家を借り、そこに住んだ。しかし三年後の一八九六年、一家は家財道具を船に積み込み、鎮江に戻った。以降、彼の伝教活動の中心は鎮江となる。^(注23)

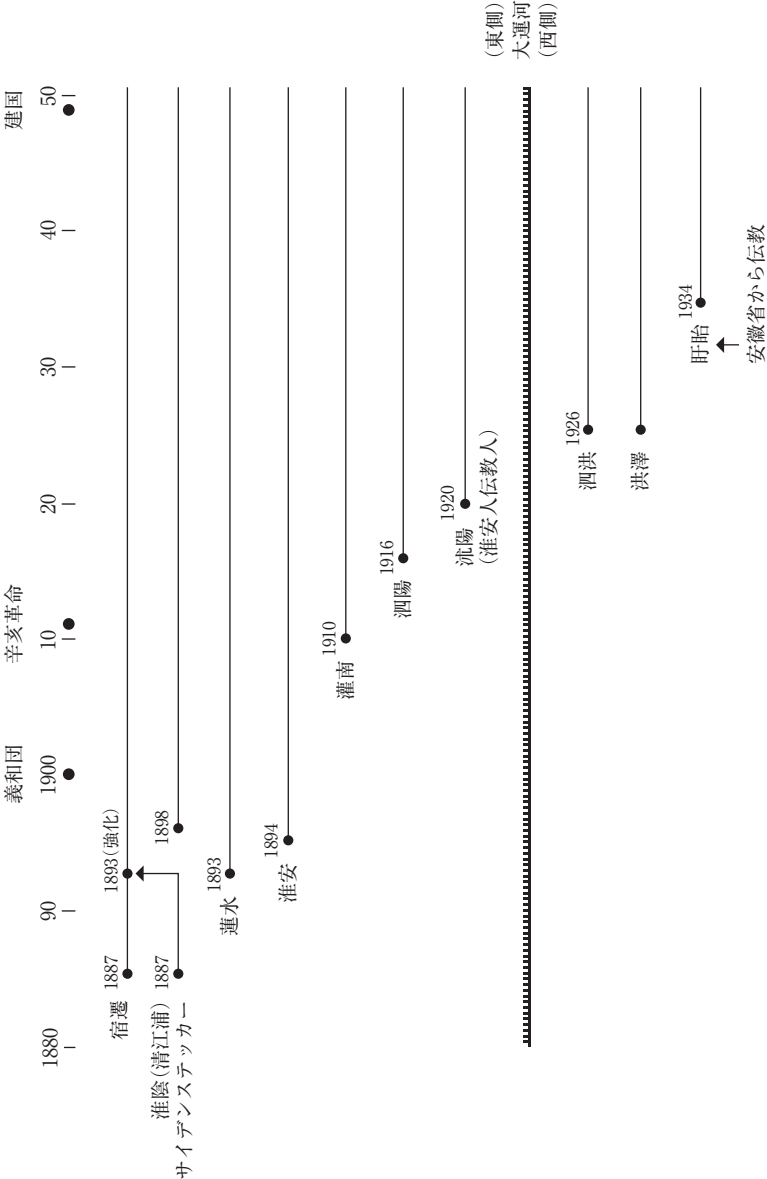
『淮陰市志』は、清江浦の情況に触れていないが、南長老教会の鮑達理夫婦が宿遷にやってきた一八八七年、アブサラム・サイデンステッカーからも清江浦に家を借りて住んでおり、南長老教会にとって宿遷が最初の布教地という訳ではなかった。但し、清江浦での生活は厳しく、サイデンステッカー一家は子供を亡くした後、一時アメリカに帰国し、清江浦に戻ったのは一八九二年のことであった。一八九三年になると、伝教拠点としての宿遷が強化され、長老会総部も陸統と宣教士を宿遷に送り込む。アブサラム・サイデンステッカーも清江浦から宿遷に通うようになり、その後、家を借りて移り住んだ。この年、内地会のイギリス人宣教師も揚州から清江浦にやってきて教会を設

立しており、一八九三年は布教活動が本悪的に始動した年となったようである。しかし、アブサラム・サイデンステッカー一家は家の事情で、一八九六年に鎮江に戻っており、アブサラム・サイデンステッカーが宿遷を拠点としたのは僅か三年間ということになる。

同じ南長老教会でも、伝教の拠点として鮑達理夫婦が宿遷を、アブサラム・サイデンストリッカーらが清江浦を選んだ理由はよく分らない。淮陰地区の地理的な中心は清江浦であるが、さらに奥の宿遷を選んだことには何か理由がありそうである。環境がよかったことも考えられるが、遅れて中国での布教活動に入った南長老教会としては、既に山東での伝教活動に成果を出していた北長老教会に対する対抗意識があつて、徐州に近い宿遷を選らんのも知れない。またアブサラム・サイデンステッカーらが清江浦を選んだのは、他の宣教師がいない処女地であったことも考えられる。

さて、南長老教会に話を戻すと、南長老教会は宿遷を拠点に、淮陰地区での伝教活動を拡大していく。即ち、光緒二〇（一八九四）年、アメリカ人宣教師が淮安にやってきて、南市橋に部屋を借り、布教を行った。光緒三〇（一九〇四）年、さらに多くのアメリカ人宣教師がやってきて、南市橋に北福音堂を建設した。宣統二年（一九一〇年）になると、アメリカ人宣教師が灌南の新安鎮に伝教に入り、教堂を建設した。民国に入ってもこの動きは止まらず、民国五年（一九一六年）、アメリカ人宣教師が淮安人の伝道人を泗陽に派遣し、南門の陳氏祠堂を借りて伝教を行ったほか、清江浦人の伝道人を泗陽の何面に派遣し、伝教を行った。民国九（一九二〇）年には、アメリカ人の宣教師が沭陽城に行き、堂を建設して伝教を始めた。民国一五（一九二六）年と一九（一九三〇）年、アメリカ人の宣教師らが相次いで泗洪の青陽一帯に伝教に入った。

【図表 10】 南長老教会の淮陰地区での伝教地の拡大



この過程を図示したものが【図表10】「南長老教会の淮陰地区での伝教地の拡大」である。一八八〇年に宿遷と清江浦とに宣教師が入るが、一八九三年に宿遷に集約され、アブサラム・サイデンステッカーもこれに加わる。この年、内地会も清江浦に入っている。一八九三年には蓮水に、翌九四年には淮安に拡大している。一八九八年には清江浦に再び南長老会の宣教師が入っている。^(注2)その後、一九〇〇年の義和団事件で伝教活動は一時停止になるが、一九一〇年以降はほぼ五年おきに、伝教地が拡大していく。即ち、灌南が一九一〇、泗陽が一九一六年、沭陽が一九二〇年、そして泗洪が一九二六年となっている。これ以外の洪澤県、盱眙県の場合は、新編県志で状況を把握することができる。詳しくは後述するが、『洪澤県志』によると、洪澤に最初の教堂が設立されたのは民国一四（一九二五）年前後のことであった。また、『盱眙県志』によると、基督教は民国二三（一九三四）年、西側の安徽省から盱眙に入ってきたという^(注3)ことで、教派も南長老教会とは限らないようである。なお、『金湖県志』によると、一九七〇年代初、淮陰から本県に移住してきた者の中に、少数の信徒がおり、これによって本県の基督教活動が始まった^(注4)ということである。時代も新しいため、教派は南長老教会ということではない。

注目すべきは、伝教が一九二〇年以降と遅れた泗洪、洪澤の両県は大運河の西側に位置する県で、伝教活動は先ず、大運河の東側から進められたことである。一八八七年に宿遷に宣教師が入ってから、実に四十六年後にやっと大運河の西側の県にも伝教範囲が広がったことになる。その間、沭陽へは中国人の伝道人が派遣されるなど、中国化が進展していくが、長年に渡る継続的な伝教活動が地道に行われたことが分かる。但し、盱眙までは届かず、盱眙の場合は安徽省からの伝教であった。

さて、南長老教会の宣教師らが伝教の便を考えて淮沭公路を境に東西に分けて分担していたということであるが、

洪澤県も東側に含まれることから淮流公路は洪澤から淮安を経て沭陽に通じる幹線道路であった。つまり大運河沿いの道路ではなく、それよりも東側にあった道路で、淮陰で大運河と交叉していた（【図表9】「県別の伝教情況」の「淮流公路」参照）。言及してはいないが、道路の東側には灌南が、西側には、宿遷も入ることになる。大運河を境に分けなかったのは、そもそも運河の西側は伝教活動が遅れた地域であり、分ける意味はあまりなく、伝教の進んでいる東側地域を東西で分けたと行うことであろう。従って、清江浦を含む淮陰県内も東西で分けられていたことになる。

淮陰地区の広さもあり、中国人伝道師も多く起用されたが、民国一九（一九三〇）年になると、さらに拡大していく。長老派は一九一六年、一九二〇年と改組を繰り返し、一九三〇年には中華基督教会が成立してから既に一〇年の年月が経っていた。しかし伝道師の報酬は教会から出ていた。こうしたなか、泗陽などの地の伝道人らが外来の宣教師に従属することを良しとせず、泗陽県中華基督教会が泗陽県内の基督教各派を聯合し、民国二二（一九三三）年に「泗陽基督教聯合会」を組織し、後に「泗陽基督教促進会」と改名、教会の自営を主張していく。その二年後には、自力で衆興鎮に教堂を建設し、自ら伝教活動を行った。そして民国二八（一九三九）年に泗陽の来安鎮にて、全县の教会代表、及び淮陰、沭陽の一部からなる教会代表会議を開催、「中華基督教淮流泗自立会」を成立させた。民国三四（一九四五）年には自立会が米軍の撤退と内戦停止を訴え、中共の淮陰地区委員の責任者が自立会の代表と接見するに至る。

(4)『淮陰市志』に見える基督教(プロテスタント)の慈善事業に関する記述

1 慈善事業

孤兒堂

光緒三二(一九〇五)年、イギリスの伝道師、穆女子が清江浦にやってきて、基隆東巷五号院内の南首両幢小樓里(今の清河区糧食局大樓所在地)に孤兒堂を建設し、社会で見捨てられた子供らを收容した。宣統二(一九一〇)年、穆女子が帰国したため、孤兒堂の運営も停止した。五年間で收容した孤兒は二〇〇余名になった。

救済

光緒三二(一九〇六)年、淮北地区で大水害(洪水)が発生、海州、贛榆、連雲港一帯の避難民は次から次へと淮陰地区に避難してきた。この時、華洋義賑会江北分会の劉少甫、王闢符、王叔相などが募ってやってきて若干の寄付を行っていた。六月一二日から店を設け、粥を配りだし、倪嘉福が粥店の經理となった。難民は一人あたり一日二勺の粥を受け取ることができた。難民らは噂からたなびくように集まり、八月末には、六〇万人ほど集まった。難民が清江浦に着くと、まず「芦席站」に行き、数枚の「芦席」を受け取り、簡単な雨よけ小屋を作った。その結果、東は鉄心壩から西は八面仏まで、南は土圩根から北は楊庄まで、長さは約二〇里にも渡って難民の小屋でびっしりと埋まった。アメリカ籍の教会医師であり牧師である林嘉美はこの状況を写真に撮り、華洋義賑会、及び各国の慈善機構に送り、救済を求めた。そして二〇余万円の資金と物資や糧食が集まった。その後、土木工事による救済も行われ、清江浦一帯の河や水路は「河底をさらい、支河を数本開いた。また大きな路を数十築き、掘った土を路に盛り、路と路の間に溝を作って、水を流した」。このような状況のもと、その年の年末から翌年の春にかけて、凍

死や餓死した難民は約三万人に達した。三月末、当局が離散した難民らを家に帰らせ、あわせて救済事業も行ったため、新麦が収穫できるようになった後、(難民の動き)もぴたりと止まった。

これ以外にも、アメリカ籍の教会医師、呉徳珠が賈雅各の住宅、及び仁慈医院内にミシン教室を組織した。住宅、医院にそれぞれ二〇余台のミシンを設置し、被災民のために無報酬で衣服を縫った。また、布を寄付してもらい、衣服を作って被災民に届けた。民国三八(一九四九)年、仁慈医院が火災で消滅するまで、この活動は続けられた。

2 学校運営

基督教会在淮陰地区にて学校運営を開始したのは二〇世紀初めである。大多数は小学校で、主に淮安、泗陽、宿遷、及び清江浦に集中した。淮安には、高格美が校長を務める崇実小学があった。この学校は民国元年、高皮巷から童家巷に移転し、南京人の徐耀山が校長を引き継いだ。淮安にはこのほか、林愛道、林樂喜が校長を務める福榮女子学校があった。この学校は大香渠にあった。河下鎮にも福音堂が設立した女子小学校があったほか、欽工沙土敦教堂の中にも、付設の小学校が一校あった。

泗陽県には南門大街に慕道女子学校が、八集に務本小学が、里仁には崇文小学が、司板橋には板橋小学があった。宿遷県には崇実中学があった。

これらの学校では、いずれも正規の課目以外に宗教課目があり、宗教科目において宗教思想の注入が行われただけでなく、宗教儀式にも参加しなければならなかった。毎朝三〇分の礼拝は必ず参加しなければならなかった。学校の規模は一般に大きくなく、小さいのは十数人、多くて一、二百人であった。また開学している期間もみな短く、一般に日本軍が侵入してきた際に、みな散り散りになってしまった。市区には比較的評判の高い学校が三つあった。

即ち、袁江小学、婦女学道院及び基隆小学、敬業中学である。

①袁江小学

光緒三二（一九〇五）年、戴德明が基隆東巷五号院内に六部屋からなる二階建ての建物を建て、袁江小学を開設した。戴德明と賈雅各を校長とし、後に学生が増えた時には孤児堂を利用して教室としたこともあった。この学校は、当時、信徒の子弟のみしか入学できなかった。学制は六年制で、毎年、学生数は四〇前後を維持していた。後半になると、淮陰人の高美具、陳道生が管理と教育を行なった。学習過程は、語文、算術、社会学、自然学、聖經課であった。北伐戦争時、軍隊が校舎を占拠したため、一時期、運営を停止した。後に回復するも、抗日戦争の時に高美具が死亡したため、学校運営も停止した。

②婦女学道院、及び基隆小学

婦女学道院の前身は愛徳女学で、アメリカ人が開設したものである。元の校舎は方家房東首の王公館（今の娃娃井東）にあり、校長は賈雅各であった。アメリカ籍の信徒、唐哲士、馬美麗の二人の女士が一時期、この女学にて仕事をしていたことがある。民国二（一九一三）年、愛徳女校は基隆東巷六号の二階建ての建物に移転し、婦女学道院と改名した。馬美麗が校長を務めた。また、今の老壩口小学校内の基隆港側に、上下それぞれ九部屋からなる建物を建て、教室と宿舍とした。婦女学道院は婦女のみを受け入れた。学生の大部分は淮陰の農村からやってきた。毎年、学生は五〇名前後を保持していた。過程は、聖經課が中心で、卒業すると伝教活動に携わった。現在の江蘇省基督教協会会長の蔣佩芬は、淮陰が陥落した時に、この学校に来て一年間、教師を務めたが、後にこの学校は日本軍に占用され運営を停止した。

民国三四（一九四五）年、淮陰が第一次解放されてまもなく、教会はこの校舎と別な建物を加えて、「基隆小学」

と改名した。淮陰が第二次解放されると、王乾元が校長に任じた。この学校は以前の婦女学道院が拡大したもので、男性の入学を開始した。学生の多くは、市内や農村の信徒の子弟であったが、非信徒の子弟もいた。学校では聖經課のほか、語文、算術、英語などの課程を開設した。英語課は仁慈医院の医師でアメリカ人の聞徳勇の妻が担当した。建国後、この学校は接収されて国有となり、娃娃井小学と合併して老壩口小学と改名された。

③ 敬業中学

宣統二年（一九一〇）年、戴德明と賈雅各は三門楼にて数部屋ある建物を購入し、袁江の中学部を設立し、敬業中学と命名した。民国二（一九一三）年、この中学は仁慈医院が新しく建築した三階建ての建物の中に移転し、賈雅各と戴德明がそれぞれ校長を務めた。教師らは皆、齐鲁大学の卒業生であった。その中には孫維恩、楊習伍、張行山などがいた。この中学は数学、幾何、代数、地理、歴史、ドイツ語、聖歌などの課程を開いた。学制は四年であった。学生の大多数は信徒の子弟で、毎年在校生は四〇人前後いた。賈雅各と戴德明が去った後、アメリカ人の田克迪が校長を引き継いだ。

民国一六（一九二七）年の北伐の際、学校は軍隊が駐留したため、運営を停止した。北伐後、継続して運営を行い、アメリカ人の衛約翰が校長を務め、校名も袁江中学と改名した。民国一九年に始まって、淮陰一帯で「黒熱病」（昆虫のプユによって寄生虫が媒介される伝染病の一種、フィラリア）が流行、教会は学校を「黒熱病」のための病院とした。民国二四（一九三五）年、「黒熱病」のピークが過ぎたため、教会はまた袁江中学を回復させた。但し、建物の上階を学校とし、階下を病院とした。泗陽人の胡鏡心が校長を務めた。淮陰が陥落する前夜、学校の運営を停止した。

3 医院の開設

① 仁慈医院

光緒一六（一八九〇）年、アメリカの南長老教会の林嘉美が鎮江から小船に乗り、清江浦にやってきて布教を始めた。翌年、老壩口基隆巷内に福音堂を建設、伝教と同時に、堂内にて西洋医学の診療所を開設、淮陰市にて初の西洋医院の開設となった。後に、土地も狭く低地なために病室には向いていないので、民国元（一九一）年、十里長街の最東端に数十畝の土地を購入、三階建ての西洋式の建物を五棟を建てたほか、平屋には一〇〇余部屋があった。民国二年、診療部門が新しい建て物に移転した。同時に、正式名称を「仁慈医院」とした。同年、林嘉美は淮安の西長街にも仁慈医院を建設した。

民国三年、アメリカ人の基督教信徒、李如蘭が清江にやってきて仁慈医院の看護婦長を勤め、付属の看護学校を開設し、校長も兼ねた。民国四年、アメリカ人の基督教信徒、鐘愛華夫婦が医院にやってきて、主任医師となった。民国一七年、林嘉美が老齢のため耳が遠くなったので、鐘愛華が院長を引き継いだ。

仁慈医院内は三つの病棟に分かれていて、北院は外国人の住宅、南院は手術室と男女の病棟で、病床は三二二床あった。東院は「黒熱病」区で、簡易ベッドが一〇〇余床あった。これは後に三〇〇余床に増加した。医院内には、外科、内科、五官科、産婦人科、伝背園病室、X線室、化学実験室などがあった。一九三〇年代になると、中国や外国籍の医療人員及び事務員らは合わせて約一〇〇人に達した。これは淮安塩城地区で最大の医院であった。

医院を開設した当初、病人の多くは敢えて訪ねてこようとはしなかった。主要な理由は（西洋医学に対する）恐れからで、とりわけ産婦は難産になっても、病院に行くぐらいなら死んだ方がまし、と考えていた。その後、日増しに多くの完治した患者らが自らの経験を説いたため、ついに門前には誰もやってこないという状況に終止符がうた

れた。

光緒三二（一九〇六）年の大災害後、疫病（急性の感染症）が流行、難民のうち、八〇〇余人が発疹チフスに感染した。医院の責任者である林嘉美は地方人士の支援のもと、鉄心壩に隔離病院を開設、この疫病の流行を食い止めた。林嘉美氏もまた患者の治療中にチフスに感染してしまい、病気が回復しても聴覚不良の後遺症が残ってしまった。

一九二〇～三〇年代、淮安塩城地区の「黒熱病」患者の数は非常に多く、塩城、阜寧、淮陰、淮安、漣水、泗陽、沭陽、宿遷などの市区や農村部の患者らの大部分はこの病院にきて治療を受けた。「黒熱病」の流行がピークに達した時、医院は毎日五〇〇余名の患者を診察した。医院の付近には一〇あまりの旧式の旅館があり、治療にやってきた大部分の患者らを収容した。民国二〇（一九三一）年、この医院が収容し、治療した「黒熱病」患者の総数は三〇〇〇余人に達した。

民国二八（一九三九）年春、清江（浦）が陥落。仁慈医院は日本の管理下に置かれ、進駐した日本軍は医院に勤めるアメリカ人を嚴重に処罰し、太平洋戦争が勃発すると、アメリカ人の医師や看護婦らは、民国三一（一九四二）年四月に帰国を余儀なくされた。医院内の外国人住宅と「黒熱病」病棟は日本軍に占拠された。アメリカ人が去った後、仁慈医院は「淮陰医院」と改称し、中国人の医師、曹寄僧（別名、済生）が責任者となった。

民国三四（一九四五）年九月、淮陰が解放される前夜、医院全体の人員と新四軍三師衛生部医師看護人員らが合併され、「新四軍第三師野戦医院」が編成された。数日以内に、簡易病床、一〇〇〇余床が設置された。九月六日午後、城内への攻撃の開始されると、医院の病床は全て満杯となった。日本軍が発電機を持って逃げたため、手術は全て、石油ランプ、カンテラ、蠟燭の明かりの下で行われた。元の仁慈医院の医師らは、日夜、手術台の前に立ち、

時には連続して十数時間にもなることがあった。錢景山医師は重い心臓病を患っており、手術台の前で何度も倒れた。数ヶ月後、大部分の負傷兵が健康を恢復したため、(兵士) 以外の患者の受け入れを開始した。また、「仁慈医院」の名称も回復した。同年冬、この病院は蘇皖辺区政府の委託を受け、「蘇皖辺区幹部療養所」を併設した。

民国三五(一九四六)年二月、蘇皖辺区政府は仁慈医院に、部隊及び民間の医師看護要員を養成するため、「華中医科学校」を開設、三つのクラスを設け、学生は三〇九人、研究生は一六人であった。曹寄僧、谷懿之、吳博泉、錢景山、馮懷甫、劉道光らが教師となり、江上峰が校長となった。

民国三五(一九四六)年九月、淮陰が国民党軍に占領される。翌年の末、一部のアメリカ人医師が清江(浦)に戻ってきた。民国三七年、人民解放軍が攻勢に転じると、医院は七月上旬に鎮江の伯先路の基督教内地会の住所内に移転、この際に一部の物資を運び出した。秋になると淮陰一帯は平静を取り戻し、医院の人員も戻ってきた。アメリカ人医師の李如蘭、吳徳珠はこの地に定住したいと願ったが、国民党の威嚇を受け、一月になって南の方に移動せざるを得なかった。国民党は撤退する二日前、放火、略奪を行い、大火は一昼夜燃え続け、医院の大部分の部屋と設備が消失してしまった。後に、アメリカ人が交渉を買って出て、略奪した一部の物資を仁慈医院に返却させた。

一九四九年春、仁慈医院は鎮江の伯先路にて新たに開業し、高治平が責任者となった。

一九五〇年、鎮江に滞在していた仁慈医院のアメリカ人は、許可を経て帰国した。一九五一年、淮陰地区の行政專員公署が鎮江の仁慈医院の全ての人員と物資を接収し、淮陰地区の中心衛生院(今の淮陰市第二人民医院)に交付し、使用させた。仁慈医院はこれによって、完全に消失した。

② 仁済医院

光緒三二（一九〇五）年、アメリカの南長老教会の鮑達理、ト徳生、任恩庚が宿遷市に「仁済医院」を開設し、鮑達理が院長を務めた。民国初年、鮑達理が逝去したため、ト有存（ト徳生の子）が院長を引き継いだ。仁済医院は、太平洋戦争時期、日本軍によって接収され、「宿遷県病院」と改名され、蔡本元が院長を務めた。民国三四年、病院は戦火によって破壊され、跡形もなく消え去ってしまった。

仁済医院と仁済医院は共に、基督教を信仰する医療人員を受け入れて仕事をさせていた。一人一人が宗教的な生活を送らなければならなかったばかりでなく、病人に対しても福音を伝える義務があった。仁済医院では、王寅など三名が、医院内の宗教生活に対して専門に責任を負った。医院で働く者は、毎朝、医院内の福音堂で三〇分の礼拝に参加しなければならず、午後も仕事を始める前に、福音堂で聖書を読み、祈祷しなければならなかった。さらに、土曜日夜の勉強会と日曜日の礼拝にも参加しなければならなかった。^(注26)

光緒三二（一九〇六）年、淮北地区で洪水と飢饉が発生したことはよく語り継がれていることである。前稿の「蘇北におけるプロテスタント宣教師の布教活動」でも触れた通り、この飢饉に対しては、宣教師の間で北部江蘇・安徽飢饉救済委員会が組織され、組織的な救済が行われた。この委員会を代表して T.F. McCrea が *The Chinese Recorder* の編集部に「North Kiangsu-Anhui Famine」と題して、救済の呼びかけを投稿している。これによると、委員会は北部メソジスト宣教師団の W.C. Longden、南長老教会宣教師団の A. Sydenstricker、内地会 S. J.E. Williams、スコッチ聖書協会の M.J. Walker、南部バプティスト宣教師団の T.F. McCrea らによって構成されている。McCrea は現地入りした宣教師の、冬になれば数百万の人々が飢えに直面するであろう、という報告をひき、膨大な資金が必要

であると呼びかけている。また、中国人信者の間にも基金を設立すべきこと、上海や杭州、天津などの開港都市にも募金を募ること、飢饉救済の経験者からのアドバイス（現地の官僚とどの程度まで協力すべきか、孤児の扱いなど）も歓迎すること、飢餓地区で働いている宣教師らへの組織化の呼びかけ、などを訴えている。委員には南長老教会のアブサラム・サイデンステッカーの名前も見えるが、この時、彼は清江浦から鎮江に拠点を移していたが、アメリカからの寄付金を手に、北方の最も悲惨な地方（清江浦か）へ行つて救済に当たつた。^(注27)なお、鎮江にて北から押し寄せる難民の惨状を目にしたパール・バックは、『母の肖像』の中で詳しくこの時の飢饉について記している。^(注28)

『淮陰市志』における仁慈医院に関する記述においても、大水害がもとで疫病が流行し、難民のうち八〇〇余人が発疹チフスに感染したこと、林嘉美が地方人士の支援のもと、鉄心壩に隔離病院を開設したことなど、当時の生々しい情況が語られている。

以下、基督教（プロテスタント）教会が運営した孤児堂、学校、病院などの状況を表に整理しておく。なお、淮北を襲った大洪水は一九〇五年とする記述もあり、同年に清江浦で開設された孤児堂は、この飢饉が契機となっている可能性が高い。

蘇北におけるキリスト教宣教師の布教活動の展開—中華民国期から改革開放の現在まで 西澤 治彦

【図表 11】 基督教（プロテスタント）教会が運営した福祉施設、学校、病院

福祉施設	開設年・年表	開設者	場所	
孤児堂	光緒 31（1905）	英国伝道師、穆女子	清江浦（基隆東巷五号院内）	
	宣統 2（1910）穆女子の帰国で運営停止。五年間で収容した孤児は 200 余名			
学校名	開設年・年表	開設者	校長	場所
袁江小学	光緒 31（1905）	戴德明	戴德明・賈雅各	清江浦（基隆東巷五号）
	後半		高美具・陳道生（淮陰人）	
婦女学道院	抗日戦争時、高美具の死去により学校運営停止			
	前身は愛徳女学	米国人	賈雅各	清江浦（方家房東首の王公館）
	民国 2（1913）婦女学道院と改名	馬美麗		清江浦（基隆東巷六号に移転）
	抗日戦争時、日本軍に占用され運営停止			
	民国 34（1945）「基隆小学」と改名	王乾元		
敬業中学	建国後、接収されて国有化、娃娃井小学と合併して、老壩口小学と改名			
	宣統 2（1910）	戴德明・賈雅各	—	清江浦（三門樓）
	民国 2（1913）、仁慈医院が新しく建築した三階建ての建物の中に移転			
	—	戴德明・賈雅各・田克迪		
	民国 16（1927）北伐の際、軍隊が駐留したため運営停止			
	北伐後、運営再開	袁江中学と改名	衛約翰	
	民国 19（1930）「黒熱病」流行、教会は学校を「黒熱病」のための病院に			
崇実小学	民国 24（1935）袁江中学を回復、建物の上階を学校、階下を病院に	胡鏡心（泗陽人）		
	淮陰陥落前夜、学校の運営停止			
		高格美	淮安（高皮巷）	
	民国元年に移転	徐耀山	淮安（童家巷）	
	福榮女子学校	—	林愛道・林樂喜	淮安（大香渠）
	女子小学校	—	—	淮安（河下鎮）
	小学校	—	—	淮安（欽工沙土敦教堂内）
	慕道女子学校	—	—	泗陽県（南門大街）
	務本小学	—	—	泗陽県（八集）
	崇文小学	—	—	泗陽県（里仁）
板橋小学	—	—	泗陽県（司板橋）	
崇実中学	—	—	宿遷県	
病院名	開設年・年表	開設者・責任者	場所	
仁慈医院	光緒 16（1890）	林嘉美（南長老教会）が布教に来る	清江浦	
	翌年	福音堂内に西洋医学の診療所を開設		（基隆巷内）
	光緒 32（1906）年の大水害後、難民のうち 800 余人が発疹チフスに感染、林嘉美は地方人士の支援のもと、鉄心壩に隔離病院を開設			
	民国元（1912）	三階建ての西洋式の建物五棟を建設		（十里長街）
	民国 2	診療部門が新しい建て物に移転、正式名称を「仁慈医院」とした		

同年 林嘉美は淮安にも仁慈医院を建設 淮安（西長街）

民国3 李如蘭（米国人）が清江にきて看護婦長を勤め、付属の看護学校を開設

民国4 鐘愛華夫婦（米国人）が医院にやってきて、主任医師に

民国17、林嘉美が老齢のため鐘愛華が院長を引き継ぐ

1920～30年代、「黒熱病」が流行、淮安塩城地区の患者の大部分はこの病院にて治療を受けた。

1931年、医院が治療した「黒熱病」患者の総数は3000余人に

1930年代 中国や外国籍の医療人員及び事務員らは合わせて約100人に達し、淮安塩城地区で最大の医院になる

民国28（1939）春、清江（浦）が陥落、仁慈医院は日本軍の管理下に。

民国31（1942）太平洋戦争が勃発、米国人の医師や看護婦らは帰国を余儀なくされる。「淮陰医院」と改称し、中国人の医師、曹寄僧が責任者に

民国34（1945）年9月、淮陰解放の前夜、医院全体の人員と新四軍三師衛生部医師看護人員らが合併され、「新四軍第三師野戦医院」が編成される

同年冬、蘇皖辺区政府の委託を受け、「蘇皖辺区幹部療養所」を併設

民国35（1946）蘇皖辺区政府は仁慈医院に「華中医科学校」を開設

民国35（1946）年9月、淮陰が国民党軍に占領される

翌年末、一部の米国人医師が清江（浦）に戻ってくる

民国37（1948）年、人民解放軍が攻勢に転じると、医院は七月上旬に鎮江の伯先路の基督教内地会の住所内に移転。国民党は撤退する二日前、放火、略奪を行い、医院の大部分の部屋と設備が消失

1949年春、仁慈医院は鎮江の伯先路にて新たに開業、高治平が責任者に

1950年、鎮江に滞在していた仁慈医院の米国人が帰国

1951年、淮陰地区の行政専員公署が鎮江の仁慈医院の全ての人員と物資を接収、淮陰地区の中心衛生院（今の淮陰市第二人民医院）に交付し、仁慈医院は完全に消失

仁濟医院 光緒31（1905）鮑達理・ト徳生・任恩庚（南長老教会）が開設 宿遷市

民国初年、鮑達理が逝去したため、ト有存（ト徳生の子）が院長を引き継ぐ

太平洋戦争時期、日本軍によって接収され、「宿遷県病院」と改名 蔡本元が院長に

民国34（1945）年、病院は戦火によって破壊され、跡形もなく消え去る

『淮陰市志』は、南長老教会が運営した学校、病院などに対してはかなりの紙面を割いて、詳細に記述している。学校に関しては、キリスト教学の必修や礼拝の強制などを批判的に書いてはいるものの、これはある種の「おきまり」の台詞であり、全体としては南長老教会が果たした役割に対して好意的である。とりわけ、仁慈医院が光緒三二（一九〇六）年の水害とその後発生した疫病や、一九二〇～三〇年代に流行した「黒熱病」（マラリア）に対して全力で立ち向かったことについては、謝意も込められている。そうした病院を管理下に置いたのが日本軍であり、その後の新四軍の接收や国共内戦など、南長老教会が光緒一六（一八九〇）年に設立した仁慈医院は、否応なく時代の波に飲み込まれていった。そして建国から二年後の一九五一年になって、仁慈医院は六〇年にも及ぶ歴史に幕を閉じた。

（５）『淮陰市志』に見える建国後の基督教（プロテスタント）の情況

１ 建国後の教会の組織

建国後の教会の組織としては、淮陰市基督教三自愛国運動委員会と淮陰市基督教協会との二つがある。

① 淮陰市基督教三自愛国運動委員会

この会は、基督教の信徒らが組織した大衆の愛国、愛教の団体であり清淮区基督教「抗美援朝」、三自革新運動促進会が改名したものである。

一九五一年三月二九日、淮陰の中華基督教会・神召会・安息日会・真耶穌教会が集まって連合し、清淮区基督教「抗美援朝」、三自革新運動促進委員会を組織、責任者は庄猷猷・張権・費蘇がなった。

一九五三年四月、この会は清江市同慶街穌堂にて第二回代表会議を開催、会議には中華基督教会・神召会・安息

日会・真耶蘇教会・小群会などの教派から一九六名の代表が集まり、委員を三七名、常任委員を一五名選出、孫廷楊を主席に、何尊堯・胡鏡心・庄献稣らを副主席に、黄振懷を総幹事長に、張権を副総幹事長に、吳慕光を秘書に選んだ。

一九五四年春、清淮区基督教「抗美援朝」、三自革新運動促進委員会は清江市にて会議を開催、組織名を「淮陰地区基督教三自愛国運動委員会」と改名し、第一回代表会議を開催した。第二次代表会議は一九五八年に開催した。一九八一年に開かれた第三次代表会議で、吳慕光が主席に選ばれた。一九八七年五月二九日～三一日、基督教淮陰市三自愛国運動委員会は第四回代表会議を開き、常任委員を二〇名、委員を四九名、吳慕光が再度、主席に選ばれ、副主席に高保羅・庄献稣・費蘇・張権・董振山（秘書長を兼務）が選ばれた。一九八二年から一九八六年まで、全区内の各県や各市にて基督教三自愛国運動委員会が相次いで成立していった。

② 淮陰市基督教協会

この協会は、基督教の教会教務に対して責任を負う大衆組織で、一九八二年二月二日に市区にて成立、牧師の庄献稣が会長に、徐学義・卞玉宝らが副会長に、費蘇が総幹事に選ばれた。一九八七年五月に開かれた第二回一次会議にて、庄献稣が継続して会長に選ばれ、副会長に徐学義・賈以仁が、総幹事に高保羅が選ばれた。^(注29)

2 三自愛国運動

一九五一年五月二三日、清淮区の「抗美援朝」と三自革新運動促進委員会が、泗陽にて成立した。これ以降、外国ミッシヨナリーおよび外国籍の伝教士のコントロールから脱し、経済上も外国のミッシヨナリーとの関係を絶ち、「自治、自養、自伝」によって、自分たちで教会を運営する新しい路線を歩むことになった。この会は積極的に全

国の三自革新運動の促進委員会の呼びかけに応じ、全地区のキリスト教徒に、三自の署名運動と「抗美援朝」の募金活動に参加するように動員した。結果、三八三八人の署名を得たほか、人民元（旧幣）で九〇〇万円の募金を集めた。

一九五三年四月、清江市の同慶街の耶蘇堂で開かれた第二次代表会議上で、各教派の名称や儀式、習慣は保留するものの、全て三自促進会の指導に従うことが決定された。全国の三自革新促進会の責任者であった蔡志澄、南京市代表の曾浣林・楊德澤・雷志伯らも会に参加した。会議では、毛沢東、金日成、彭德懷、及び中国人民志願軍の全員に対して、敬電を送った。

一九五四年春、青淮区の基督教「抗美援朝」及び三自革新運動促進会は、名称を「淮陰区基督教三自愛国運動委員会」に変更し、第一次の代表会議を開催した。この会の指導のもと、全区の基督教各派は積極的に教堂を回復させたり建立し、教徒の発展に努めた。自治方面では、中心堂と支堂を建立し、教会の責任者らの仕事の分担を決めて責任をもって引き受けさせ、組織としての指導を強化した。自養方面では、主に教徒による寄付金をもって、教会の出費や伝道人の生活費用をまかになった。自伝方面では、各堂が中心となって伝道を組織し、教会は期日ごとにメンバーを選抜して神学院に送り、聖經を学ばせた。また、牧師や長老などの神職職員の擁立も自分で行った。

一九五七年、全区の基督教教堂と集会所は二〇八箇所に発展、伝道員も一八八人に増えた。そのうち、牧師は一人、伝道に専念する職員が六七人、ボランティアの伝道員が一一〇人であった。教徒の総数は一七六〇〇人であった。

一九五八年六月一七日～七月一日、清江市にて淮陰区基督教三自愛国運動委員会の第二回代表会議が開かれ、会議では、教会で出現した金銭や財産を騙し取ったり、祈祷で病を治したり、墮胎したり、婦女暴行などといった

現象が議論され、教堂の数を整頓する決議がなされた。整頓により、全区の教堂と集会所は大幅に圧縮され、教徒の数も五〇%ほどに減少した。

文化大革命期間、教堂は閉鎖され、集会所も取り消された。教会関係者は闘争にかけられ、全ての教会活動が完全に停止した。

中共一期三中全会以降、淮陰の基督教の三自愛国運動は順次、展開されるようになった。一九八〇年一〇月、呉慕光牧師が淮陰教会を代表して南京で開催された全国基督教第二回代表会議に参加、十一月には呉慕光・張権ら八名の代表が江蘇省の基督教第三回代表会議に参加し、呉慕光が江蘇省基督教第三次代表愛国運動委員会常任委員、及び江蘇省基督教協会副会長に選出された。

一九八一年一〇月、淮陰地区基督教第三次代表会議が清江市で開催され、会議では三自愛国の原則、及び愛国と愛教の一致性が改めて説明され、各教派の名称を解消し、全教派が統合され一つの道を歩むことになった。

一九九二年一二月、淮陰地区基督教協会が成立。韓彼得・呉慕光・庄猷稣の三名が牧師に、賈以仁・趙豊漢・陳立生・張随光・石文章らが長老に擁立された。各県の三自愛国運動委員会が準備され、成立するに従って、全市の基督教教会の活動は徐々に正常に戻り、日曜日の礼拝以外にも、毎年の「受難節」「復活節」「生誕節」といった三大節日も、みな記念活動が行われるようになった。

一九八七年までに、全市では漣水・沭陽・宿遷・泗陽・泗洪・盱眙・洪澤などに基督教中心教堂が新たに建設されたほか、四座の教堂を修繕して回復させたことにより、合わせて一一の教堂になった。集会所も一〇〇〇近くに合った。また、新たに張権・費蘇・高保羅・張馨・徐学義など五名を牧師に、九名を長老に、三名を執事に擁立した。さらに、七期に渡るボランティア研修班を運営し、二八〇名のボランティア伝道師を養成した。この結果、全市に

は伝道員が一〇〇〇名近くになった。その中で、專業の伝道に携わるものは二〇名、残りは全てボランティア伝道員である。教徒は一五万人近くに達し、そのうち一〇余万名が洗礼を受けている。

広大な教牧人員と信徒らは、宗教生活を送ると同時に、積極的に社会主義現代化の建設に参加している。一九八六年に開催された淮陰市基督教勤勞致富經驗交流会にて、一一名の基督教徒が表彰された。一九八一—一九八七年、全市で省、市、県（市・区）の人民代表、および政治協商委員に選ばれた基督教人士は合わせて四〇名おり、その中で人民代表は五名いる。

3 宗教事務管理

① 機構

解放前、淮陰地区委員会宣伝部が宗教事務を兼務していて、具体的な仕事は一人の秘書が責任を負っていた。各県市区の委員会宣伝部、あるいは県委員会の事務所内に、宗教事務を担当する秘書を一名配置し、清江市の宗教事務は市の統一戦線部が責任をもつて管理していた。

一九五六年春、地区から各県に至る宗教事務は、全て統一戦線部の管轄に移行したが、依然として一名の秘書を置いていただけであった。同年五月一日、及び六月一二日、江蘇省人民委員会宗教事務局は、淮陰地区委員会からの報告を受けて「蘇宗字（五六）第一八六号、及び二三七号」の二つの文件によって回答し、淮陰専委公署に対し宗教事務局の成立に同意し、幹部三名（そのうち科長が一名、科員が一名、事務員が一名）を配置させた。七月、宗教事務局の成立後、地区委員会の統一戦線部の指導下に入った。文化大革命期間中、全区の宗教活動は停止を余儀なくされ、管理機構も消滅した。

一九七九年、淮陰地区の宗教活動は比較的速やかに回復し、宗教信徒の比較的多い漣水・灌南・泗陽・沭陽・宿遷の五県から率先して民族宗教事務科が成立した。一九八一年、淮陰地区の行政公署は民族宗教事務処を成立させた。一九八三年春、機構の改革中に、市県の宗教事務管理は一度、統一戦線部に移行した。その後、取り消されたが、間もなくして再び元に戻された。一九八四年までに、市に属する全ての県(区)にて民族宗教事務科が成立し、政府の機構の中に組み込まれた。

一九八五年二月一二日、淮陰市委員会は「淮発(一九八五)第〇〇七号文件」にて下部組織からの報告に回答し、市の民族宗教事務処を市政府の機構の中に編入することを決定し、事務処の下に民族科と宗教科を配置し、宗教科は二名(その内、科長一名、秘書一名)で編成されることになった。県レベルでは、専職の宗教幹部を計二五名を配置した。最も幹部の多い県は三名、少ない県は一名である。

郷レベルの宗教事務は、一般に党委員会副書記か、あるいは郷政府の副郷長が兼務し、宣伝は統一戦線委員が具体的な管理の業務を担当した。

②管理

〈宗教活動管理〉

建国初期、宗教活動の管理はちよとした調査、統計の仕事であり、全区の宗教活動は基本的に「自由放任」の状態であった。そのため、信徒数も急速に増加した。入教した大多数は婦女や病人であった。淮陰県の中華基督教会五九三名の信徒中、婦女は四三七名で七三・七%を占めていた。沭陽県の真耶穌教会の塘溝教堂には教徒が一〇八人いたが、病気が理由で入教した者は九六名で八八・九%を占めていた。一部の人間は、宗教組織を利用し、私設

の教堂を設け、祈祷で病を治すと称して、金銭や財産を騙し取った。基督教真耶穌教会が信徒に対して求めている「奉献」や「捐獻」は二〇種類にも達していた。即ち、「主日奉献」「辞年奉献」「暑熱奉献」「建堂奉献」「月捐」「季捐」「入教捐」「感恩捐」「樂意捐」「受洗捐」「按手捐」「見証捐」「土產捐」「招待捐」「自認捐」「去假捐」「住堂捐」「路費捐」「恩上加恩捐」「聖餐捐」などがあつた。宗教活動は一時期、非常な混乱状態に陥つた。

一九五八年、全区の範圍内で基督教の整頓作業が行われ、二一五の教堂を解散、九一の教堂を合併し、二つの不法教会を取り締まった。一九五九年元旦、沭陽は「無教県」になったことを宣言した。全区内の八八〇〇人の教徒は教堂に行かず、礼拝をしなくなった。

一九六三年、中共淮陰地区委員会統一戦線部は宗教活動の管理に対して、以下の七項目の規定を設けた。

一、集団による宗教活動は一律、教堂内で行うにとどめ、しかも公開で行う事。

二、教会は病人を入教させてはならないし、治療のための祈祷をしてはならない。

三、一九五八年の時点で解散されたり、合併された教会は一律、再建することを許さない。

四、全ての宗教活動は自ら望んで参加することが原則であり、いかなる人も強迫してはならず、また形を変えて他人に信仰を強要したり、宗教活動に参加するように強迫してはならない。

五、宗教活動を利用して違法行為を行う者に対しては容赦なく打撃を加える。

六、全ての宗教活動は生産活動に影響を与えてはならない。

七、教会の全ての大きな活動は当地の政府に事前に報告し指示を得ること。

一九六六年、文化大革命が始まると、全ての宗教活動が停止した。

一九七八年、中共第一期三中全会後、党は宗教問題に対する正確な方針と政策を徐々に回復していった。長期

にわたって抑圧を受けていた老信徒らは非常に活発になったとみえ、至る所で聚会所を設け、人に信仰を勧めていた。一部には不法人員がいて、宗教の旗を掲げる機に乗じて、非法活動をするものも現われた。一九八二年以前、一部の地方レベルにおける宗教活動の状況は混乱していて、ある者は自由に聚会所を設け、ある者は区の境を超えて伝教に行き、ある者は祈祷で病を治し、ある者は聖書から離れて伝道を行ない、ある者はお金や財産を騙し取り、甚だしきに至っては、伝教の名を借りて婦女暴行をする者までいた。こうした状況に対し、各地では真っ先に、中央の「我が国の社会主義時期宗教問題の基本観点と基本政策に關して」を真剣に学習し、宣伝し、貫徹し、広範囲に認識を高めることに力を入れた。そして宗教活動の場所に対する行政指導を強化し、それまで存在した混乱現象に対し、「場所を定め」、「人を定め」、「地区を定め」て整頓を行った。「場所を定め」とは、自発的に形成された宗教活動の拠点をターゲットにし、「信徒群衆の生産、生活の便を考える」を原則に、合理的な按配を行ない、県レベルの政府の宗教部門と当地の郷鎮とで共同して合法的な活動拠点を確定していき、確定されない活動拠点については近くの合法的な拠点と合併させる方法がとられ、信徒群衆が指定された拠点にて宗教生活を送るようにさせた。「人を定め」とは、すでに確定された拠点における伝道人に対し、訓練を行うもので、県の宗教愛国組織が委員の派遣を行った。

「地区を定め」とは、各県がそれぞれ県内を四〇六の地区に分け、各地区ごとに宗教活動の場所に責任を持たせ、二〇三名の責任者を任命して管理に当たらせた。

こうした「三つを定める」政策によって、一九八三年、全市で自発的に形成された六四四個所の活動拠点は、二七二個所に統廃合された。翌年、再調整が行われ、二九八個所に、一九八五年には三四七個所に増加した。こうして、混乱した曲面は安定してきた。一九八五年以降、全市の宗教活動拠点は県政府の批准を経なければ活動が行

えないようになったが、同時に合法的な地位を獲得した。

一九八七年の統計によると、全市で政府の批准を経た宗教活動場所は四八五箇所になった。宗教活動場所の増加に伴い、政府による宗教活動場所の管理はますます難しくなった。一九八七年一〇月七日、市委員、市政府の批准を経て、市の民族宗教事務所と市委員会統一戦線部の合同で、淮陰県にて全市基督教管理経験交流会が開かれ、各県（市・区）の委員会統一戦線部長と民族宗教局長、及び関係する郷・鎮の責任者三二人が会議に出席した。淮陰、漣水、泗陽、宿遷などの県、及び岔河、欽工などの郷鎮が会議において経験を紹介した。管理をより有効に実施するため、正常の宗教活動を保証すると同時に、宗教の衣を着て不法活動を行う犯罪分子に対しては、容赦ない打撃を加え、一九八七年までに全市で六名が死刑判決を言い渡された。

〈宗教職業人員の管理〉

淮陰の解放から一九五七年まで、全区の宗教職業人員（専職、兼職を含め）は一九七名いた。この期間、宗教職業人員の管理は主に、基督教三自愛国運動委員会、及びイスラム教の教務を主持するアーホンによって行われていた。一九五八年の整頓工作中、四三名の宗教職業人員が教会組織によってその職務を解除された。

一九六三年、中共淮陰地区委員会統一戦線部は宗教職業人員の管理に関して、三つの規定を作成した。

一、「保留堂」（合法と認められた教堂に所属する）伝教人員のみが、伝教活動に従事することができる。すでに転業したり、解除された人員は一律、伝教活動を行ってはならない。

二、過去に「右派」分子と摘発された者、あるいは刑期満了で釈放された者は、一般に再度、伝教活動を行ってはならない。特殊な情況で（許可されることのあるが、それは）市や県の批准を経なければならぬ。

三、全ての「自由伝道人」は、伝教活動を行ってはならない。

一九七九年以降、政府の宗教事務管理部門は全区の宗教職業人員に広範囲にわたる調査を行い、冤罪や誤審の事案、七件を正し、七名の人員の名譽を回復し、彼らの戸籍と未払いの賃金の問題を解決した。宗教界の上層人士に對しては、生活上の便宜を図り、政治的な保証を与えた。全市の宗教職業人員の大多数が老弱、病弱となっている情況に對し、前後して、一名の信徒を南京の金陵神学院に派遣し、學習させた。同時に、數回にわたって、基督教のボランティア伝道員の養成クラスを編成し、教会のために引き継ぐ者を養成した。

〈教堂・寺廟の管理〉

建国初期、全区で、機關や学校、団体が占用していた教堂は一一箇所、寺廟は一二七箇所あり、住民の住居として分け与えられていた教堂が四箇所、寺廟が五四箇所あった。一九五三年以降、基督教三自愛國運動委員會、および一部の寺廟の僧尼、アーホンらが政府に對し、數回にわたって返還を求めた。一九五七年四月一日、淮陰專員公署は江蘇人民委員會に報告し、教会財産の返還に関する意見書を提出した。一九六三年、中共淮陰地區委員會統一戰線部は、教堂及び寺廟の管理に関する六条の規定を設けた。

一、現在ある「保留堂」（合法として残された教堂）は基本的に今後、再統合されることはないし、他機關によって占用されることはない。もし教堂の分布が不合理であれば、（上級の）指導のもと、段取りを経て縮小や調整を行うが、必ず專区に報告し、批准を経なければならない。

二、政府の同意を経た教堂以外、何人も私設の教堂や寺廟を建ててはならない。

三、（新たな）教堂の建設は一律に認めない。

四、教堂や寺廟を管理する者は、保管、維持修繕する責任と使用する権利を有するが、これを売買したり、建物を取り壊したり、私物化してはならない。

五、一九五八年以前に「統廃合のために」政府に差し出された教堂や寺廟は一切、返還しない。

六、一九五八年以降に借用、占用された教堂、寺廟は、現在使用している単位と教会や寺廟とで賃貸関係を結び、適当な賃貸料を払う。

文化大革命の間、全ての教会や寺廟は没収され、閉鎖された。

一九七九年以降、全区の宗教不動産に対し徹底的な整理が行われ、返すべきは返し、返せない物件は産権を明確にして賃貸関係の手續きをとり、賠償すべきは賠償した。一九八七年までに、返還した教堂の部屋は二〇八三四平方メートル、未払いの賃貸料の支払い、及び賠償額は三〇余万元に達した。全市の教堂に対しては、基本的に三自愛国運動委員会及び基督教協会を通して管理することとし、清真寺に対しては、管理委員会を成立させ、各清真寺のアーホン^(注30)を会長に任命した。現存する寺廟に対しては、寺に住んでいる僧や尼が管理することとした。このように、実践の過程で、よりよい各種の管理規定を制定し、管理水準を上げてきた。

淮陰市における建国後の基督教（プロテスタント）の状況は、「建国後の教会の組織」、「三自愛国運動」、「宗教事務管理」の記述を統合すると、ある程度明確に再現することができる。

その前に民国期の状況を整理しておきたい。先述の通り、淮陰地区では面積の広さもあり、中国人伝道師も多く起用されたが、民国一九（一九三〇）年になると、さらに拡大していく。長老派は一九一六年、一九二〇年と改組を繰り返して、中華基督教会を成立させて一層の中国化を進めてきたが、伝道師の報酬は教会から出ていた。こうし

たなか、泗陽などの地の伝道人らが外来の宣教師に従属することを良しとせず、泗陽県中華基督教会が泗陽県内の基督教各派を聯合し、民国二二（一九三三）年に「泗陽基督教聯合会」（後に「泗陽基督教促進会」と改名）を組織し、教会の自営を主張していく。そして民国二八（一九三九）年、泗陽にて全県の教会代表、及び淮陰、沭陽の一部からなる教会代表会議を開催、「中華基督教淮沭泗自立会」を成立させた。民国三四（一九四五）年には同自立会が米軍の撤退と内戦停止を訴え、中共の淮陰地区委員の責任者が自立会の代表と接見するに至る。

このように、教会組織の中国化と、保身を意図した政治情勢へのコミットは、民国期から発生していたが、その動きは建国後になると、さらに加速される。その柱となるのが、「三自愛国運動」である。淮陰地区で先頭を切ったのは、またしも泗陽県であった。即ち、一九五一年、泗陽にて地区内の中華基督教会をはじめ、神召会・安息日会・真耶穌教会が集まって連合し、清淮区の「三自革新運動促進委員会」が成立する。これ以降、外国、及び外国籍の伝教士のコントロールから脱し、経済上も外国の教会との関係を絶ち、「自治、自養、自伝」によって、自ら教会を運営する新しい路線を歩むことになった。この会は積極的に全国の三自革新運動促進委員会の呼びかけに応じ、全地区のキリスト教徒に、三自の署名運動と「抗美援朝」の募金活動に参加するように動員した。一九五三年、清江市の同慶街の教堂で開かれた第二次代表会議上で、各教派の名称や儀式、習慣は保留するものの、全て三自促進会の指導に従うことが決定される。

翌一九五四年には名称を「淮陰区基督教三自愛国運動委員会」に変更し、この会の指導のもと、全区の基督教各派は積極的に教堂を回復させたり建立し、教徒の発展に努めた。自治方面では、中心堂と支堂を建立し、教会組織としての指導を強化した。自養方面では、教徒による寄付金で教会の消費や伝道人の生活費用をまかになった。自伝方面では、各堂が中心となって伝道を組織し、教会は人員を選抜して神学院に送り、聖經を学ばせた。この結果、一九五七年には、全区の基督教教堂と集会所は二〇八箇所に発展し、伝道員も一八八人に増え、教徒の総数は一七六〇〇人に達した。

こうしてみると、この時点までの三自愛国運動は（発端は上級からの指導があったにせよ）、教会側から自主的に外国教会との関係を断つことにより、教会組織や信者数を拡大することができた。しかしながら、それは長くは続かなかった。一九五八年にはじまる教会組織の整頓運動が起るからである。「宗教改革」とも呼ばれるこの運動は全国的なもので、キリスト教に限らず、国内のイスラム教徒に対しても行われた。清江市でも一九五八年、淮陰区基督教三自愛国運動委員会の代表会議が開かれ、教会で出現した金銭や財産を騙し取ったり、祈祷で病を治したり、堕胎したり、婦女暴行などといった現象が議論され、教堂の数を整頓する決議がなされる。整頓により、全区の教堂と集会所は大幅に圧縮され、教徒の数も五〇％ほどに減少した。さらに、文化大革命期間、教堂は閉鎖され、集会所も取り消され、教会関係者は闘争にかけられ、全ての教会活動が完全に停止した。

文革で壊滅的な打撃を受けた教会組織であるが、一九七八年の中共一一期三中全会以降、淮陰の基督教の三自愛国運動は順次、回復していく。一九八一年、淮陰地区基督教代表会議が清江市で開催され、三自愛国の原則が確認される。注目すべきは、この会議において、各教派の名称を解消し、全教派が統合されたことである。長老派の中国化は民国期からあったが、これこそが民国期から続くキリスト教の中国化の到達点と言えよう。一八八七年の長老派による淮陰伝教から数えて、九四年後のことであった。

翌一九八二年には淮陰地区基督教協会が成立し、全市の基督教教会の活動は徐々に正常に戻り、日曜日の礼拝以外にも、毎年の「受難節」（レント）、「復活節」（イースター）「生誕節」（クリスマス）といった三大節日も、記念活動が行われるようになった。

一九八七年までに、全市では漣水・沭陽・宿遷・泗陽・泗洪・盱眙・洪澤などに基督教中心教堂が新たに建設されたほか、四座の教堂を修繕して回復させたことにより、合わせて一一の教堂になった。集会所も一〇〇〇近くに

なった。この結果、全市には伝道員が一〇〇〇名近くになった。教徒は一五万人近くに達し、そのうち一〇余万名が洗礼を受けている。

以上が、『淮陰市志』が執筆された一九九五年当時までの状況である。以下、【図表12】「年表 民国期～建国後のプロテスタントの状況」にて、この流れを整理しておく。

【図表12】年表 民国期～建国後のプロテスタントの状況

- 一九一二 中華民国成立
- 一九一六 長老派、中華長老聯合会に改組
- 一九二〇 中華基督教會に改組 一層の中國化を進める
- 一九三三 泗陽基督教聯合会（後に「泗陽基督教促進会」と改名）を組織し、教會の自營を主張
- 一九三九 泗陽にて全県の教會代表、及び淮陰、流陽の一部からなる教會代表會議を開催、中華基督教淮流泗自立會を成立
- 一九四五 同自立會が米軍の撤退と内戰停止を訴え、中共の淮陰地區委員の責任者が自立會の代表と接見
- 一九四九 中華人民共和國建国
- 一九五一 泗陽にて地区内の中華基督教會をはじめ、神召會・安息日會・真耶穌教會が集まって連合し、清淮區の「三自革新運動促進委員會」が成立
- 一九五三 清江市の同慶街の教堂で開かれた第二次代表會議上で、各教派の名称や儀式、習慣は保留するものの、全て三自促進會の指導に従うことが決定
- 一九五四 淮陰區基督教三自愛國運動委員會に改称、と、全区の基督教各派は積極的に教堂を回復させ、教徒の發展に努める

一九五七 全区の基督教教堂と集会所は二〇八箇所に発展し、伝道員も一八八人に増え、教徒の総数は一七六〇〇人に達する

一九五八 教会組織の整頓運動、全区の教堂と集会所は大幅に圧縮され、教徒の数も五〇％ほどに減少

一九六六 文化大革命期間、教堂は閉鎖され、教会関係者は闘争にかけられ、全ての教会活動が完全に停止

一九七八 中共十一期三中全会、改革開放路線へ

各地で老信徒らによる活動が活発化、聚会所も増え、不法活動も増え、宗教活動は混乱状態に

一九八一 淮陰地区基督教代表会議が清江市で開催、三自愛国の原則が確認され、各教派の名称を解消し、全教派が統合され一つの道を歩むことに

一九八二 淮陰地区基督教協会が成立し、全市の基督教教会の活動は徐々に正常に戻る

政府は再び、宗教活動に対する行政指導を強化

一九八三 全市で自発的に形成された六四四個所の活動拠点は、二七二箇所に統廃合

一九八五 統廃合された活動拠点は三四七箇所に

一九八七 再度の信者の増加により政府の批准を経た宗教活動場所が再び増加、全市では漣水・沭陽・宿遷・泗陽・泗洪・盱眙・洪澤などに中心教堂が新たに建設されるなど、合わせて一一の教堂に、集会所も一〇〇〇

近くに。全市の伝道員は一〇〇〇名近くになり、教徒は一五万人近くに達した

淮陰県にて全市基督教管理経験交流会が開かれ、管理をより有効に実施する方針が出される

ところで、「宗教事務管理」の記述も興味深い内容となっている。建国前、宗教事務は淮陰地区委員会宣伝部が兼務していたが、一九五六年、地区から各県に至る宗教事務は、全て統一戦線部の管轄に移行し、その下に宗教事務科が創設された。文化大革命中は管理機構も消滅したが、一九七九年、淮陰地区の宗教活動は比較的速やかに回復し、信徒の多い漣水・灌南・泗陽・沭陽・宿遷の五県から率先して民族宗教事務科が成立し、一九八四年までに、

全ての県にて民族宗教事務科が成立する。翌八五年には民族科と宗教科とからなる民族宗教事務処として、政府機構の中に組み込まれた。郷レベルの宗教事務は、党委員会副書記か郷政府の副郷長が兼務し、宣伝は統一戦線委員が担当した。

以上が管理機構の変遷であるが、建国初期、宗教活動の管理は調査、統計の仕事であり、全区の宗教活動は基本的に「自由放任」の状態であった。そのため、信徒数も急速に増加した。とはいえ、入教した大多数は婦女や病人であつたという記述は興味深い。さらに、一部の人間は、宗教組織を利用し、私設の教堂を設け、祈祷で病を治すと称して、金銭や財産を騙し取つた。真耶穌教会が信徒に対して求めていた「奉獻」や「捐獻」は二〇種類にも達しするなど、宗教活動は一時期、非常な混乱状態に陥つた。

一九五八年になって全区内で教会の整頓作業が行われたのは、当然の帰着といえよう。この時、二一五の教堂を解散、九一の教堂を合併し、二つの不法教会を取り締まったというから、相当の荒治療ではあつた。その結果、真耶穌教会の拠点の一つであつた流陽県は「無教県」になったことを宣言した。全区内の八八〇〇人の教徒は教堂に行かず、礼拝をしなくなった。前年の信者数が一七六〇〇人だから、確かに半分が信仰を放棄したことになる。半ば強制的とはいえ、これでは本当の信者であつたのかと言われても仕方がなからう。

それでも、一九六三年に中共淮陰地区委員会統一戦線部が宗教活動に対し、集団による宗教活動は教堂内で行うにとどめる、教会は病人を入教させてはならないし、治療のための祈祷をしてはならない、宗教活動を利用して違法行為を行う者に対しては容赦なく打撃を加える、教会の全ての大きな活動は当地の政府に事前に報告すること、などの七項目の規定を設けたということは、教会の整頓後も、「違法」な活動が継続していたことを窺わせる。しかしこれも文革で全て活動停止となる。

その反動もあってか、改革開放路線へ舵を切った一九七八年以降、長期にわたって抑圧された老信徒らの活動は非常に活発になり、至る所で聚会所を設け、人に信仰を勧めるようになる。一部の地方レベルにおける宗教活動の状況は混乱し、ある者は自由に聚会所を設け、ある者は区の境を超えて伝教に行き、ある者は祈祷で病を治し、ある者は聖書から離れて伝道を行ない、ある者はお金や財産を騙し取り、甚だしきに至っては、伝教の名を借りて婦女暴行をする者まで現れる始末であった。

そこで一九八二年、政府は再び、宗教活動に対する行政指導を強化し、それまで存在した混乱現象に対し、「場所を定め」、「人を定め」、「地区を定め」て整頓を行う。これにより、一九八三年、全市で自発的に形成された六四四個所の活動拠点は、二七二個所に統廃合され、毎年の再調整の結果、一九八五年には統廃合された活動拠点は三四七個所になった。建国後、いわば第二次の教会の整頓運動により、再び活動拠点は半減する。これ以降、全市の宗教活動拠点は県政府の批准を経なければ活動できなくなると同時に、合法的な地位を獲得することになる。

しかしながら、信者の増加は続き、一九八七年には全市で政府の批准を経た宗教活動場所は四八五箇所になった。宗教活動場所の増加に伴い、政府による宗教活動の管理が行き届かなくなる。そこで、一九八七年一〇月、市の民族宗教事務所と市委員会統一戦線部の合同で、淮陰県にて全市基督教管理経験交流会が開かれ、管理をより有効に実施するため、正常の宗教活動を保証すると同時に、宗教の衣を着て不法活動を行う犯罪分子に対しては、容赦ない打撃を加えることになった。一九八七年までに全市で六名が死刑判決を言い渡されたというのは驚きである。

こうしてみると、中国における宗教管理、とりわけキリスト教の管理は、信者が増えるに従って不法活動などの混乱が生じ、その対策として整頓運動が発動される、ということの繰り返しであった。即ち、一九五七年に信者増加のピークを迎えると、翌五八年に整頓運動が起こり、教会や信者の数も半減する。文革中は活動停止となるが、

改革以降はその反動から再び信者の数が増加し、一九八一年に二回目のピークを迎えるが、その翌八二年から再び行政指導の強化が計られ、八五年までに活動拠点も半減する。ところがその後、再び信者の数が増加し、八七年には中心教堂が一個所、活動拠点が一〇〇〇個所、信徒の数は一五万人にまで膨れあがる、という状況となっている。これは過去のピークと比べ、爆発的な増加と言える。急激な信者数の増加は、政府によって再び対抗措置がとられるであろうことは、歴史を振り返っても明らかである。

なお、教会を含む宗教施設は、建国前から他の機関によって占有される情況が続いており、宗教団体の指導者からも返還要求が出されてきた。建国初期、全区で、機関や学校、団体が占用していた教堂は一一箇所、寺廟は一二七箇所あり、住民の住居として分け与えられていた教堂が四箇所、寺廟が五四箇所あった。基数が多いせい、なかでも寺廟の占有が目立つ。一九五三年以降、基督教三自愛国運動委員会、および一部の寺廟の僧尼、清真寺のアーホンらが政府に対し、数回にわたって返還を求めた。これに対して、一九六三年、中共淮陰地区委員会統一戦線部が提示した、教堂及び寺廟の管理に関する六条の規定が紹介されている。即ち、現在ある「保留堂」（合法として残された教堂）は基本的に今後、再統合されることはないし、他機関によって占用されることはないこと、政府の同意を経た教堂以外、何人も私設の教堂や寺廟を建ててはならないこと、教堂や寺廟を管理する者は、保管、維持修繕する責任と使用する権利を有するが、これを売買したり、建物を取り壊したり、私物化してはならないこと、一九五八年以前に（統廃合のために）政府に差し出された教堂や寺廟は一切、返還しないこと、一九五八年以降（即ち文革時）に借用、占用された教堂、寺廟は、現在使用している単位と教会や寺廟とで賃貸関係を結び、適当な賃料を払うこと、などがそれである。

一九七九年以降、全区の宗教不動産に対し徹底的な整理が行われ、返すべきは返し、返せない物件は産権を明確にして賃貸関係の手続きをとり、賠償すべきは賠償した。一九八七年までに、返還した教堂の部屋は二〇八三四平方メートル、未払いの賃貸料の支払い、及び賠償額は三〇余万元に達した。改革開放以降、長年の不条理な状態は一応の解決をみたようであるが、返還されない施設もまだ数多く残っているようである。

四 各県志に見える基督教（プロテスタント）の記述

『淮陰市志』の記述だけでも、かなり当時の淮陰地区における伝教の様子を再現することができたが、ここから先は各県志の記述をもとに、さらにローカルな世界に降りていってみたい。『淮陰市志』との多少の重複もあるが、例によって先ず各県志の記述を紹介した上で、考察を加えていきたい。県志の中で一番、記述が多いのはやはり『淮安市志』（かつての県志に相当）である。以下、記述の多い大運河の東側の県からみていきたい。

（１）『淮安市志』の記述

① 概況

一九世紀末、基督教が淮安に入ってきた。清の光緒二一（一八九五）年、アメリカの南長老教会の賽兆祥牧師が徐州から京杭大運河を南下し、宿遷、淮陰を経由して、淮安にて巡回の伝道を行った後、彼によってアメリカ籍の牧師、林亨理と医学博士の林嘉美が淮安に派遣され、伝道を行った。林亨理と林嘉美の後は、アメリカ籍の宣教師らが継続してやってきて、二〇世紀の三〇年代になると、伝道活動は徐々に郷村に向かって発展し、多くの土地で

教堂や部屋を借りてチャペルを設けた。併せて、中国人〔牧師〕を招聘し、チャペルに駐在させ、伝道事業に従事させた。

抗日戦争勃発後、外国人宣教師らは日本軍によって一個所に集められたため、各郷村の教会は、基本的に教徒が自分たちで組織を運営した。民国一九（一九三〇）年、淮安に「堂会」が成立し、選挙によって長老と執事が選ばれ、淮安籍の最初の牧師が誕生することになった。淮安堂会は、先に南長老教会の「華東区会」に入ったが、後に分離し、「江北区会」に入った。抗日戦争時期には、清淮区会に入った。一九三〇年代初期、各地の教会には自立を唱える人々がいたため、淮安と宝応の伝道師らが「淮宝布道会」（淮安宝応伝道会）を組織し、黄口（今は宝応県に属する）に部屋を借りてチャペルを開設した。会長は孫廷颺牧師がなった。しかし、この時「淮宝布道会」（淮安宝応伝道会）は依然として外国教会が提供する経費を受け取っていたため、完全に独立した組織になり得なかった。後に「淮宝布道会」（淮安宝応伝道会）は、会長が外国人宣教師らと共に日本軍に収容されたため、自然に解体してしまった。一九五八年九月、民主協商によって、教会は多くの「不規則な」（違法な）活動拠点を撤収し、基督教活動にみられた混乱現象を整頓した。文革時期、基督教は活動を停止した。

一九八二年一〇月、淮安基督教三自愛国会準備小組が組織され、一九八五年四月五日、三自愛国会が正式に成立した。一九八五年以来、教会は期日を決めて、義工（無報酬の奉仕的な、の意味か）の養成班を組織し、各チャペルの伝道人に対して党の宗教政策の宣伝を行ったり、聖教知識の学習などを行ってきた。さらに毎年一度、基督教徒による「四化建設」（四つの現代化）に従事した経験者らの交流会を開き、「四化建設」で突出した貢献をなした基督教徒を表彰している。

一九八四年、アメリカ基督教教会牧師の「馬好留偕夫人」（孟格美の娘）が、一九八六年にはカナダ籍の華人で基

基督教中国カナダ連絡組織長の朱梅芬修女が、それぞれ淮安の福音堂を訪問した。教会側は熱烈に歓迎し、互いの理解と友誼を増進させた。市の三自愛国会は、さらに「基督教管理を強化するための一五条の措置」「基督教の集会点の経済管理に関する六条の暫定法」などを制定した。通常の礼拝活動において、伝道人は皆、新しい角度から聖書に対して解釈を行なうことができ、新時代にふさわしい内容を賦与している。一九九一年、淮安市には基督教徒が一八〇〇人いる。

淮安において、基督教には四種の主要な儀礼がある。即ち洗礼、聖餐、婚礼、殯葬である。洗礼は、入信する者が必ず受けなければならない最初の儀礼である。受洗者は一般に洗礼前に一定期間、教義の訓練を受け、口述試験（即ち「考信徳」信仰や徳を試験する）を経て、合格したら洗礼を受けることができる。洗礼方法は、一般に「点水」と「浸礼」の二種に分かれる。「点水礼」は、牧師が清水で濡らした手を受洗者の額の上に押さえ、同時に「奉聖父、聖子、聖霊的名為称施洗」と唱える。「浸礼」は、多くの場合、各チャペル付近にある清水をたたえた河や池で行われる。牧師と受洗者は水中に立ち、牧師が受洗者の体を支えながら素早く受洗者の全身を水中に沈め、同時に「奉聖父、聖子、聖霊的名為称施洗」と唱える。洗礼を経て、受洗者は初めて正式な信者となる。

聖餐は、基督教徒であればしばしば受けなければならない。一般に、どのぐらいの期間の間に一回受けなければならない、という規定はない。これを行う時は、牧師がまず、「面餅」（小麦粉製の平らに焼いた食品）を小さくちぎって受洗者に食べさせ、続いて葡萄酒を小杯に注いで受洗者に飲ませる。もし教徒が教規に違反したら、牧師はこの教徒に一定期間、聖餐を受けることを禁止し、処罰する。

淮安では、基督教徒が婚礼や葬礼（主に葬礼の場合）の儀礼を行う場合、多くは当事者の家で行ない、教堂で行うことはない。これらの数種類の儀礼以外に、最もしばしば行われるのが礼拝活動である。淮安では、都市と農村

の差異を考慮し、都市部では週二回、礼拝を行っている。一回目が日曜日、二回目が火曜日である（というのも工場によっては火曜日を定休日になっているから）。各郷鎮では、通常、礼拝は日曜の一回だけである。礼拝は、一般に牧師が主導する。牧師は『聖書』のある章の一節を引用し、教義を説き、時には牧師が主導して信徒らが祈禱したり、賛美歌を歌い、最後に全員で礼拝し、一斉に「アーメン」と唱える。礼拝の際には、教堂の入り口に「奉献箱」が設けられ、礼拝者は自らの意思でお金を寄付していく。

基督教の主要な節日は、復活祭と聖誕節である。復活祭はイエスが復活した日を記念するもので、期日は毎年、春分後、最初の満月の後の日曜日で、一般に三月、四月になる。聖誕説はイエスの生まれた日を記念するもので、期日は毎年、一二月の二五日である。この日、教徒らは一個所（教堂）に集まり、イエスの生誕を祝う。

②教堂・集会点

林亨理と林嘉美が淮安に來た当初、まず南市橋（今の西長街）に家を借りて伝道した。その後、この家屋敷を売却し、この場に一〇部屋の平屋を建築して診療所を設け、老西門大街三三二号にあった肖家の二階建てを購入し、内外を西洋式の教堂に改築して、伝道にあたった。艾得士夫婦が淮安に來てから以降、南市橋にさらに土地を購入し、二階建てをの教堂を建築した。建築面積は二〇〇余平米あった（現在、複数の経営管理局の辦公処となっている）。孟格美夫婦は、現在の市の政協辦公処の建物（現在は市の政協辦公処に貸し出している）にいた。王慕德夫婦は、北門の章馬橋に六〇〇〇余平米の土地を購入し、北門福音堂を建設した。三〇年代初め、北側にある郷では馬厰、欽工、沙墩、蘇嘴、河下、順河に、西側にある郷では範集、岔河に、東側にある郷では車橋に、南側にある郷では頭涵洞に、相次いで教堂が立てられた。建築規模は大小あって同じではなかったが、中国人の伝道者が招聘されて常駐し、伝道にあたった。

その後、基督教の内部における各宗派間の紛糾により、欽工の馬堡、席橋の朱口、徐楊の葛庄、菱陵の章注など、一一の場所で、前後して信者の部屋や家を借りて、集会所が設けられた。城東の沈営には「神召会」が設立され、礼拝堂を建設して、伝道にあたった。

文革時期、各地の教堂は全て、「代管」が実行され、あるものは自然消滅し、あるものは壊され、またあるものは転売されてしまった。中共第一一期三中全会以降、党の宗教政策が改めて貫徹されることになった。一九八二年六月、淮安にて正式に教会活動が再開された。省政府宗教局が資金を提供してかつての西門大街にあった教堂を再建し、その名称もかつて同様、淮安福音堂とした。一九八七年までの時点で、淮陰県人民政府は、各郷鎮にある四〇の集会所を合法のものであると批准している。これらの集会所は、多くの場合、信徒が自ら資金を寄付して運営しており、大小異なる教堂を建設している。中には、少数であるが信徒の家を集会所にしているところもある。

③公益事業

林亨理と林嘉美が淮安に来て以降、南市橋に一〇部屋の平屋を建築して診療所を設けた。その後、林嘉美が清江水渡口に行き、そこで仁慈医院を設立した。彼らは比較的早く、淮安に西洋医学を持ち込んだ。病人が診察を受けている間、基督教の簡単な教文を聞くことができた。教会の影響力を強めるため、彼らは病状が比較的軽い患者に對し、無料で診察した。光緒三一（一九〇五）年、淮安が大規模な水害にあったとき、教会は淮城東門の外田公祠にて四ヶ月間、山陽県義賑扶持所を開設、被災民の救済を通して、教会の影響力を拡大し、伝道活動を行った。

教会は淮安にていくつもの学校を運営した。一九二〇年代初頭、教会は高皮港に男子用の崇実小学を設立、後に童家巷二号に移転した。続いて章馬橋に高小〔高級小学校〕と初中〔初級中学〕を設立した。これが崇実中学で、校長は王慕徳になった。他にも大香渠巷に福榮女子学校を設立し、林愛蓮が校長を務めた。河下には福音女子小学

を設けた。欽工、沙墩の教堂にも学校が付設された。これらの教会が運営する学校は、一般的な文化科目の他に、宗教科目も教え、青少年に向けて宗教知識を教えた。全ての学生は日曜日の大礼拝に参加しなければならなかった。学校の教師は皆、伝道師がなった。

民国一六（一九二七）年以降、教会が運営する学校は次々と活動を停止した。民国二八年、大運河の西側が水害に遭い、王慕徳が協会を組織し、岔河一帯で被災民の救済活動にあたった。民国三四年八月二五日、淮安、泗陽、沭陽の三県、四〇余の教堂は、自立会の名義でもって連合して電報を打ち、蒋介石に内戦の停止とアメリカ軍の撤退を求めた。この時の電文は、その日の『新華日報』の華中版に掲載された。その後、この電文は『塩阜大衆報』『淮海報』などの新聞に転載された。

新中国建設後、全国基督教界では、呉耀宗をリーダーとする愛国人士が自治、自養、自伝の「三自」革新宣言を行ない、淮安教会も即座に書名し、これに加わった。抗美援朝（朝鮮戦争）が始まると、教会は信徒に募金を呼びかけ、集まった一四万四四七七元で「飛機大砲」（対空砲火のことか）を購入し、抗美援朝の前線を支援した。一九八三年七月、教会は活動を再開してまもなく、信徒らに全国兒童福利基金会への募金を呼びかけ、二、二四萬元を集めた。一九八四年六月二四日、江蘇省の三自愛国会の副主席である韓彼得が主催し、淮安福音堂の復堂の儀式が執り行われた。^{（注24）}

『淮安市志』は、清の光緒二一（一八九五）年、南長老教会の賽兆祥が徐州から京杭大運河を南下し、宿遷、淮陰を経由して、淮安にて巡回の伝道を行ったとしているが、これには補足説明が必要であろう。賽兆祥ことアブサラム・サイデンストリッカーは、一八八六年に山東の芝罘（烟台）から鎮江に移動し、蘇北での伝教を開始する。

一八八七年秋に一家で清江浦（淮陰）へ移動し、ここを拠点とする。その間、定期的に徐州府を訪問し、ここから大運河を南下して、清江浦の南にある淮安府への訪問を行った、というのがより正確な記述である。但し、彼によってアメリカ籍の牧師、林亨理と医学博士の林嘉美が淮安に派遣され伝道を行った、というのは私にとっても新しい情報である。また、伝道活動は徐々に郷村に向かって発展し、多くの土地で教堂や部屋を借りてチャペルを設けた。併せて、中国人（牧師）を招聘し、チャペルに駐在させ、伝道事業に従事させた、という記述は、アブサラム・サイデンストリッカーの伝教方針を正確に反映した記述となっている。彼は山東滞在時期に先輩のネビウスから学び、中国における教会組織の経済的な自立や、伝教活動もやがては中国人の伝教師に任せるべきである、という考えをもっていた。これには、少数の外国人宣教師だけでは広大な地域をとてカバードできない、という現実的な理由もあった。そうした状況下で、抗日戦争勃発後、外国人宣教師らが日本軍によって一個所に集められたため、各郷村の教会は基本的に教徒が自分たちで組織を運営するようになった、と言う記述は、日本軍の管理が期せずして伝教活動の自立化を促す結果になったことを示していて、日本人としても無関係ではいられない。とはいえ、淮安に「堂会」が成立し、選挙によって長老と執事が選ばれ、淮安籍の最初の牧師が誕生することになるのは、民国一九（一九三〇）年になってからのことであった。なお、淮安堂会が、南長老教会の「華東区会」から後に分離し「江北区会」に入ったとあるが、これはアブサラム・サイデンストリッカーの記述に見える North Kiangsu Mission に相当しよう。

建国後の一九五八年九月から始まった教会の整頓運動が、民主協商（政治協商会議）によって敢行された、というのも新しい情報である。

一九八五年以降、教会は期日を決めて義工の養成班を組織したとあるが、これは文革中の強制的な宗教活動の停

止により不足した聖職者を養成するため、短期間、期間限定の養成講座が開かれたものと思われる。同様のことは、文革後、清真寺におけるアーホンの不足に対応するため、イスラーム界においても行われた。

一九八四年、一九八六年とアメリカやカナダの修女が淮安の福音堂を訪問したということであるが、これは改革以降、パール・バックに対する再評価の動きとも連動したものである。

キリスト教徒にとつての四種の主要な儀礼の記述も興味深い。聖餐において「面餅」が用いられるというのも、ある種の中国化ではある。また、婚礼、特に葬礼の儀礼が教堂で行われることはない、というのも中国ならではの制約といえよう。また、礼拝は都市部では週二回、各郷鎮では日曜の一回だけとある。この場合に考慮された「都市と農村の差異」というのは、交通の便を指そう。教会への往復に費やす時間が長すぎると、生産に支障をきたすということであろう。

淮安における教堂や集会点を図示したものが、【図表13】である。

県城である淮城鎮内では、南市橋、老西門大街、北門の章馬橋などに教堂や医院が建設された。また、城東の沈営には「神召会」が設立された。

農村部の郷では、北側にある馬廠、欽工、沙墩、蘇嘴、河下、順河、西側にある範集、岔河、東側にある車橋、南側にある頭涵洞などに相次いで教堂が立てられた。その後、基督教の内部における各宗派間の紛糾により、欽工、席橋、徐楊、茭陵などの場所で、信者の部屋や家を借りて集会所が設けられた。

これらの郷のうち、県城の北側にある馬廠、欽工、蘇嘴、順河、席橋、徐楊、茭陵、西側の範集、東側の車橋は現在の地図で場所を確認することができた。こうしてみると、農村部では県城の北側、より範囲を限定するなら大運河の東側、及び現在の蘇北灌溉総渠の北側の地域に教堂や集会所が集中していることが分かる。内部における各

宗派間の紛糾により、信者の家などが集会所となった欽工、席橋、徐楊、茭陵もこの地域内であり、分派活動に象徴されるように、この一帯は宗教活動が活発に行われた地域であったことが分かる。これは伝教活動が大運河の東側の諸県にて積極的に行われたことの反映でもある。なお、車橋鎮は、私が南京大学留学中、最初に調査を行った鎮である。一九八五年のことであった。

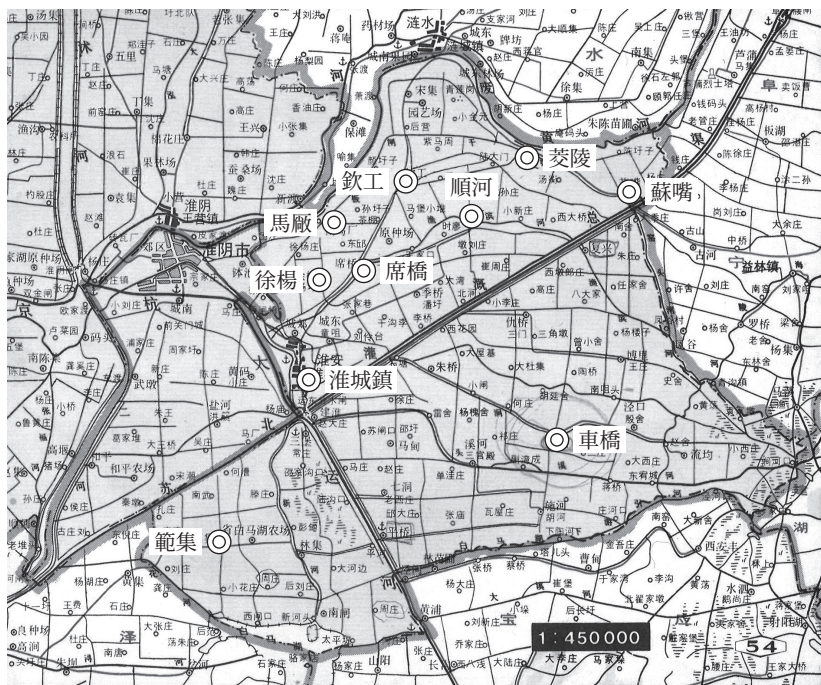
（2）『漣水県志』の記述

基督教は通常、キリスト教のプロテスタントを指し、別に耶蘇教とも称する。清末から民国年間、漣水境内には長老会、内地会、神召会、中華基督教会、真耶蘇教会、自立会、小群会、安息会の八つの会派があった。

①長老会

光緒一五年から二四年（一八八九～

【図表 13】 淮安における教堂や集会点（1930年代）



一八九八)年の間、アメリカの長老会派の雅家各が清江浦の後碼頭(淮陰市鶏籠東巷五号)に小礼堂を設立、山陽(淮安)、安東(漣水)一帯にて、基督教の教義を宣伝し、教徒を増やしていった。光緒一十六年、アメリカの長老会が〔塩城市の〕濱海県や阜寧県を経て、正式に漣水県に伝教を開始し、佃湖に教堂を建設した。その房舎は一七間あり、〔現漣雲港市の〕漣雲県の鄒邵成牧師が伝教活動を行った。その後、華北神学院の秦林(専任牧師)と交替した。当時、集まっていた教徒は一〇〇余人であった。抗日戦争時期、長老会は唐集、南禄、石湖などの地に集会所を増やしていった。

②内地会

光緒一九(一八九三)年、アメリカの内地会が漣水の城便益門東(今の県委党校西)に藍頂教堂〔藍色のドーム型天井〕を建設し、同時に朱碼の碼家湾にて正式に伝教を開始した。光緒二十一年、浅集でも内地会が成立し、高玉昆が長老となり、信者は一五〇人に達した。アメリカ人宣教師の郭其賢がこの地で常に活動していた。光緒二十四年、アメリカの巴教士と金姑娘(女士)が伝教が前進した桑莊にて教堂を建設し、集まっていた信者は三〇〇余人に達した。民国年間、アメリカの内地会は漣城、朱碼、麻垛、陳師などの地にて発展していった。一九五二年、アメリカの内地会の教務は周春玉長老に引き継がれた。一九五五年の時点で信者は二一七名いた。

光緒一五年から一六年(一八八九―一八九〇)の間、イギリスの内地会は漣水城内に大規模な土木工事を行い、紅色をした丸天井の豪華な教会を建設(現在の漣水中学院内)した。三宅ある樓房は合わせて一〇〇余間もあった。内地会は教堂小学(一クラスのみ)を開設し、中国の小学生に宿舍と救済を施した。日曜日には、これらの小学生らを礼拝させた。イギリス人は張新甫、方漢珍、畢三先生らを派遣して伝教に当たらせ、祈祷や礼拝は彼らが自ら主催した。イギリス内地会の三名の牧師は漣水県内に陸続と教会を建設していった。即ち、前後して高溝鎮、保灘

の喩集、牌坊の西蔣、麻踑の姜哨と石湖、大東などの地に一二座の教堂を建設していった。

③ 小群会（基督教聚會処とも称する）

民国一七（一九二八）年、小群会はアメリカの長老会によって、阜寧や蘇咀などの地で創設された。直ちに漣水の南集、徐集、牌坊、灰墩、岔廟などの地に伝わった。小群会の組織には執事が五人おり、程元吉が小群会の責任者となり、中国小群会の責任者である倪析の指導を受けた。一九四九年前後、小群会の教徒数は五二二人で、一九五五年末には七〇三人に達し、『田家半月刊』を創刊した。

④ 安息会

民国一九年ごろに形成された会派で、浅集や岔廟一帯で活動した。後に小群会の邱月鑒によって分裂、瓦解され、最終的に小群会に合併吸収された。建国前の信者は四〇人で、一九五五年の信者数は一二人であった。

⑤ 神召会

民国二二年に高宝羅一家が上海から漣水境内に伝教にやってきた。先ず、蔣庵の尹蕩に集会所を開設し、崔文彬の指導で七、八年伝教し、建国前までに信者数は四八二人に達した。後に朱約翰が一九五五年まで責任者となり、蔣庵の悦来集に場所を移し、牧師の数は三六人、教徒数は七九三人に達した。神召会は毎年一回、奮興会を開催し、上海の張興徳牧師を漣水に招いて伝教を行った。神召会の発展は早く、相前後して徐集の張莊、大東の何老莊、蔣庵の灯塔、陳師の沙河、小李集の黄巷などの地に教堂を一〇座、建設したほか、多くの場所に臨時の集会所を設けた。建国前、漣水には以上の他に、中華基督教会、真耶穌教会、自立会の三つの教派が伝教を行い、一九五五年末までに、三六八人の信者がいた。

漣水のキリスト教徒は『旧約聖書』と『新約聖書』を聖經とし、毎週日曜日を大礼拜日、水曜日を小礼拜（小聚会）

日としている。牧師は教徒に全ては「主」〔即ち上帝〕に服するという教義を宣伝し、教徒に好事を行い、悪事をせぬように求める。教会は不定期で教徒に奉獻を求める。

一九五八年、淮陰地区にて第二回基督教大会が開催され、漣水におけるキリスト教組織に対する整頓が行われ、漣水では七座の教会のみ存続することが確定した。即ち、麻塚の姜哨、陳師の国民（内地会）と沙河、小李集の秦莊（神召会）、灰墩の天鵝、徐集の上営（基督教聚会処）、南祿の薛集（長老会）の七座である。会議では、反帝愛国の旗を高く掲げ、教会組織の自治、自養、自伝の自主方針を堅持することが決定された。

文化大革命の期間、教堂は封鎖され、一部の牧師は闘争にかけられ、個々の伝教人には刑罰の判決が下された。經典に関する著作や聖書は焼かれた。キリスト教の活動は公開から秘密活動に転じ、「礼拝場所も」固定点から流動点に変わった。しかし各派は地下において自らの信者を発展させていった。（東側に隣接する塩場市の）濱海（県）の陳井杭は三六人の執事（自ら職務を設定）を組織し、秘密裏に漣水の唐集、石湖、五港、南祿などの地でキリスト教の教務に当たらせた。

一九七六年以降、宗教政策が施行され、漣水におけるキリスト教は迅速に発展し、一九七八年末で漣水のキリスト教信者の数は一二〇〇〇余人〔後述では二三〇〇〇人〕に達した。

一九八二年一〇月二十九日、漣水にて第一回キリスト教代表会議が開催され、教徒の分布状況を考慮して、全県のキリスト教を五つの教区に分けた。即ち、西南教区は高保羅が、西北教区は周春玉、東南教区は朱文彬が、東北教区は石文章、城中教区は李鳳鸞が、それぞれの教区の教務の責任を負うことになり、淮陰市のキリスト教三自愛国委員会の批准を経て、周春玉と石文章を漣水キリスト教の長老とした。一九八五年一月七日、漣水にて第二回キリスト教代表会議が開催され、「漣水県基督教三自愛国委員会」が成立し、正副主任を四名、常務委員を九名、委

員を四五名選出した。会議では一歩進んで、現在におけるキリスト教の信教の宗旨を明確にした。

宗教政策をさらに実行に移し、群衆の信仰の権利を保護するため、一九八七年に県民族宗教事務科は漣城鎮内に三畝の土地を購入し、県政府と省の宗教局が二六、四五万元を捻出し、県の中心教堂と補助教堂を建設した。教堂は一七〇〇人を収容して礼拝を行うことができる。郷や鎮レベルでも既に規模が異なる教堂が二三座建設され、前後して養成したキリスト教の教牧〔牧師などの聖職者〕人員は一一一人に達した。県の民族宗教事務科は全県のキリスト教の管理を強化し、県、教区、堂の三層の管理網を構築し、キリスト教の活動が正常の軌道に収まるようにしている。

キリスト教は漣水境内にて最大の宗教組織である。一九八五年末までに、県政府は六二個所の聚会所を批准し、信者数は二〇九〇七名に達した。これは全県の人口の二・五%に相当し、信徒は全県の三九の郷や鎮、〔農・林〕場、圃〔果樹／苗園のことか〕に分布している。一九八七年末、全県でキリスト教を信仰している信徒数は二三〇〇〇人に達した。

一九八五年における漣水キリスト教の聚会所リスト

徐集郷 張莊村張莊組・上宮村・許官宮村・集東村嚴莊組

南集郷 長浦村石碑組・三堡村堆上組

北集郷 沈蕩村

黃宮郷 洪莊村・霍莊村・張莊村

大東郷 鎮南村・皇圩村・楊園村楊園組・石湖果園苹果六組

南祿郷 徐圩村六組・高陳村二組・張顧村圩外組

五港郷 万碼村

成集郷 朱莊村朱莊組

紅窯郷 三村村徐莊組・朱圩村五組

淺集郷 李莊村馬万組・河湾村

岔廟郷 孫橋村五組

河網郷 王集村王圩組

義興郷 苗載村・施庵村圩南組

梁岔郷 卜圩村・薛園村・左圩村劉莊組

方渡郷 后宮村一組・埕口村西湾組・前圩村一組

東湖集郷 大莊村后莊組・胡別村河北組

唐集郷 豐華村六組・佃南村河口組・丁梁村

漣城中心教堂

牌坊郷 西蔣村魏莊組・傅羅村七組

小李集郷 薛行村東陳組・蔡河村

時碼郷 欽工村

城東林場 劉場村秦莊組

朱碼鄉 張楊莊村・梁莊村黃莊組

蔣庵鄉 悅來村郭莊組

保灘鄉 喻集村

灰墩鄉 大胡村孫莊組・南園村北陳組・天鵝村

麻垛鄉 河西村后東組

余圩鄉 余何村黃蕩組

高溝鄉 塩店村外口組・鎮高秀村一組

前進鄉 載碼村九組・同興村

楊口鄉 徐屋基村七組

陳師鄉 高莊村開莊組^(注2)

『漣水県志』も県内にキリスト教徒が多いこともあり、『淮安市志』に次ぐ量の記載となっている。最も早くに伝教に入ったのは、やはり長老派であるが、漣水の場合、東側に隣接する濱海県や阜寧県を経て、本格的な伝教が開始されたのが注目される。東西両方から伝教されたことが、漣水に多くの信者がいることの理由の一つかも知れない。信者の総数だけでなく、会派も長老派をはじめ、内地会、小群会、安息会、神召会、中華基督教会、真耶穌教会、自立会など多くの会派が伝教に入っていることも特徴である。

小群会（基督教聚會処）が民国一七（一九二八）年、アメリカの長老会〔を離脱した信者〕によって、阜寧や蘇

咀〔淮安市の鎮名〕などの地で創設された、という情報も貴重である。さらに、浅集や岔廟一帯で活動した安息会が、後に小群会の邱月鑒によって分裂、瓦解され、最終的に小群会に合併吸収された、という記述も驚きである。会派どうして信者の取り合いを行っていた、ということであろう。

一九五八年の教堂の整頓に関しても、具体的に記述されている。残された七座のうち、四座の会派が明記されている。即ち、長老会、内地会、神召会、小群会の四派で、整頓は会派ごとに行われたことを窺わせる。

文化大革命期間の記述も、他の県志では遠慮して書かれていないような事実が記されている。即ち、教堂は封鎖されて牧師は闘争にかけられ、伝教人には刑罰の判決が下されたほか、聖書も焼かれた。とはいえ、活動停止した訳ではなく、地下に潜り、場所を転々としながら礼拝を続けた。そんな状況下でも各派は自らの信者を発展させていった。さらには、隣の濱海県から執事を組織し、秘密裏に複数の郷で教務に当たさせた、というから驚きである。これが全ての県に当てはまるかは分からないが、漣水のような信者の多いところでは、これが文革期の実情であったと推測される。改革以降の信者の急増も、これで説明がつこう。漣水では県内を五つの教区に分けるほど、信者の数も増加の一途を辿った。一九七八年末で二三〇〇〇人という数字は、淮安市の一八〇〇人（一九九一年）の倍近くで、淮陰地区で最大を誇る。全県の人口の二・五%を超え、宗教組織としては最大のものとなった。一九八七年には一七〇〇人を収容できる中心教堂が県城鎮に完成している。しかも、信者数の多さは、県内の分布の広さに反映され、県内の三九の郷や鎮などに分布している。

清末から民国期、さらに一九八五年当時までの、漣水県内のキリスト教の聚会所を地図上に示したのが、【図表14】である。

漣水に最も早く伝教に入ったのは、長老会で、光緒一六（一八九〇）年、漣水県の東側に隣接する濱海県や阜寧県を経て、最東部の佃湖鎮に教堂を建設した。そこから民国期になり、その西側の唐集や南緑、南側の石湖（現在の石港果園）などの地に集会所を増やしていった。次いで早く入ったのが内地会（英国人）で、光緒一五（一八八九）年、漣水城内のほか、南は保灘鎮、東は牌坊鎮、そこからさらに大東鎮、麻塚を経て西北の高溝鎮にまで達した。光緒一九（一八九三）年には内地会（米国人）が漣城内に監頂教堂を建設したほか、朱碼鎮で伝教を開始し、光緒二十一年には浅集鎮を経て桑莊まで拡大する。民国期に入るとさらに陳

【図表 14】 漣水県内のキリスト教の各教派の聚会所（清末～民国期～1985年）



師鎮を経て麻塚鎮にまで発展していく。つまり、清末に伝教に入ったのは、佃湖鎮を拠点とした長老会、漣城鎮を拠点とした内地会（英国人）、及び朱碼を拠点とした内地会（米国人）の三個所があり、そこから民国期にかけて、その周辺へと活動領域が拡大していったことになる（【図表14】参照。起点となった三個所を太字で囲い、伝教経路を矢印で示してある）。

それ以外の会派は、いずれも民国期になって伝教が行われた。小群会は東南部の徐集鎮や南集鎮、灰坊鎮を拠点としているほか、北部の灰墩にも飛び地がある。神召会も南側の李小鎮と蔣庵鎮が中心となっている。これらの後発組は、長老会や内地会が布教に入っていない空白エリアを埋めていったということであろう。

以上までが、清末から民国期にかけての状況であるが、改革以降はさらに活動拠点が拡大していく。『漣水県志』は一九八五年の時点での教堂や聚会所がある郷や鎮をリストアップしているが、三九の郷や鎮は全て、現在の地図上でその場所を確認することができる。こうして図示してみると、県内のほぼ全ての地域にまんべんなく分布していることが確認できる（但し、会派名は一九五八年時点までのもの）。伝教のルートは水利というよりは、全て郷鎮なので、整備された陸路を経由しているようである。

このうち、一つの郷や鎮内に複数の教堂や聚会所がある場合、【図表14】にて●印でその数を表示しておいた。漣城の中心教堂を除くと、教堂や聚会所がある郷や鎮は三一に登る。そのうち、複数の教堂や聚会所があるのは半分近い一八にも達する。このうち、郷内に三つの教堂もしくは聚会所があるのは黄營、南緑、梁岔、方渡、唐集、灰墩の六郷、四つあるのは徐集と大東の二郷ある。概して、県の東側半分に多くの教堂や聚会所が分布しているように見受けられる。これもやはり、布教活動が漣城側と濱海県側の両方から、しかもそれが清末から行われたことが関係しているよう。

なお、二本線で囲んだ郷は、一九五八年の教堂の整頓で残された七座の教堂（陳師郷には二座ある）を示している。こうしてみると、七座は地理的にも県内に分散するように配置されているほか、内地会は陳師、神召会是小李集、小群会は徐集、長老会は南緑の如く、各会派への配慮も見られる。もともと、存続がかなわなかった地域の信者がこれらの教堂に礼拝に行くのは、距離的に事実上は不可能であった。そのうえ、これらの諸会派も、この時の整頓を機に事実上、活動停止や自然消滅していき、長老派の流れを汲む中国化した中華基督教会に統合されていく。

（3）『淮陰県志』の記述

①基督教の発展情況

光緒二十四年（一八九八年）、アメリカの南長老教会派の「雅各」がやってきて、清江浦の石碼頭（現在の平和路西頭）に、小礼拝堂を建て、布教を開始し、この時よりキリスト教が本県に入ってきた。一九五七年四月の統計によると、全県のキリスト教堂は三〇座、信徒は六〇〇〇人、教牧二十四人、教派には真耶穌教、中華基督教、長老会、神召会がある。三樹郷の仲延松は、長老会の会長で、影響力のある伝道者であった。

一九六六年、「社会主義教育」運動の間、淮陰県は無宗教県を宣布したため、教徒の活動は地下に潜ることとなった。一九七八年以降、国家が改めて宗教信仰の自由政策を打ち出したため、教徒らは統々と公の場で活動をするようになった。一時、あちこちに拠点ができ、教徒の数が激増した。一九八二年には集会拠点が七〇余となり、教徒の数は一人近くなった。この年、県政府の民族宗教事務科が、基督教三自愛国会が「三定」（決められた場所でのみの集会、決められた教徒が決められた場所でのみ宗教生活をする、決められた人のみが伝教をする）方針を採択することを支持したため、混乱状態は改善された。一九八七年、全県には二八の集会所があるが、これはほぼ

各郷鎮に一つある計算になる。教徒の数は約一万人で、教牧の数は二八人である。

②教派の概況

真耶穌教―教徒の主要分布は、漁溝、集丁、棉花庄、五里、老張集などの郷鎮で、影響力のある伝道人は卞玉宝、王新喜。一九八七年の時点で教徒の数は約四〇〇〇人。

中華基督教―教徒の主要分布は、南陳集、趙集、南呉集、高堰などの郷で、影響力のある伝道人は錢金栄、庄洪玉。一九八七年の時点で教徒の数は約二〇〇〇人。

長老会―教徒の主要分布は、三樹、楊庄、凌集などの郷で、影響力のある伝道人は仲延松。一九八七年の時点で教徒の数は約二〇〇〇人。

神召会―教徒の主要分布は、徐溜、西宋集、湯集、古寨などの郷で、影響力のある伝道人は朱育華、張士礼。一九八七年の時点で教徒の数は約二〇〇〇人。

小群派―一九五一年、政府より反革命組織と宣告されたが、後に名誉回復した。上海から来した一教徒に起源をもち、果林場に住んでいるが、教徒に発展はない。^(金沢)

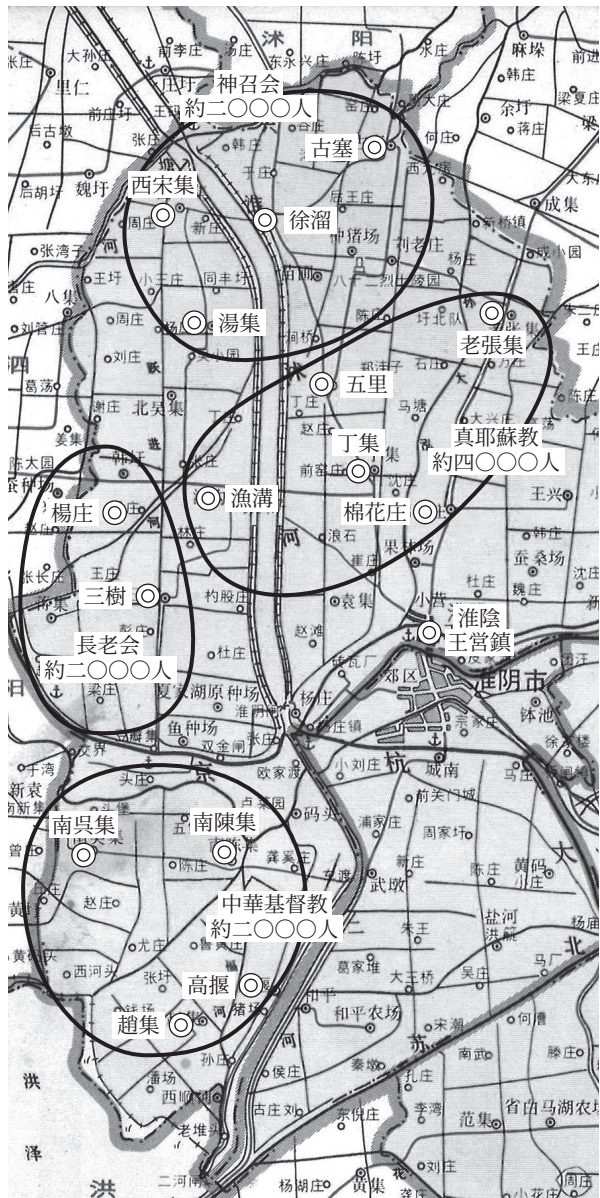
『淮陰県志』には、淮陰県のほか、清江浦も含まれているようである。短い記述ながらも貴重な情報がある。一つは、一九六二年に「社会主義教育運動」〔別に「四清運動」とも〕が開始されるが、運動の最終年である一九六六年になって淮陰県は無宗教県を宣布したため、教徒の活動は地下に潜ることとなった、という記述である（無宗教県の宣布は、沭陽県もこれよりも早い一九五八年の教堂の整頓時に宣言している）。『連水県志』の記述と同じく、やはり信者らは消滅したのではなく、単に地下に潜っただけであった。改革以降、信者数が急増したのは、彼らが

表にでてきただけであった。しかも、一九八七年当時にあつて、真耶蘇教、中華基督教、長老会、神召会、小群会などの会派の存在を明記している。『淮陰市志』の記述によれば、一九八一年、淮陰地区基督教代表会議が清江市で開催され、この会議において各教派の名称を解消し、全教派が統合されたことになっている。矛盾する内容であるが、『淮陰県志』の記述が正しいなら、各会派は再び復活したことになる。とりわけ、真耶蘇教会や神召会は一九五七年の教会の整頓時に解散命令を受けている会派であり、これが復活したとすると、驚きである。しかも、真耶蘇教の信徒数は最大の四〇〇〇人で、残りは中華基督教、長老会、神召会がそれぞれ二〇〇〇人となっている。

また、中華基督教と長老会とを分けて記述しており、両者は別組織として扱われている。『淮陰市志』の記述では、「長老会」が改組され、中国化されていったのが「中華基督教」ということになっており、この点も齟齬がある。もしかしたら、本家としての「長老会」は細々と存続し続け、復活を遂げたのかも知れない。また、全県には二八の集会所があり、これはほぼ各郷鎮に一つある計算になるという情況は、連水県と同じである。実際、教徒の数は約一万人（一九八七年）に達する。

しかも、各会派ごとの信者数と、信者の主要な分布まで紹介されている。これを図示したのが、【図表15】「淮陰県における各会派の分布状況」である。

【図表 15】 淮陰県における各会派の分布状況（1987年）



がり、それに伴って信者が拡大していった結果と思われる。似たような傾向は、漣水県の場合にも見られるが、淮陰県の方は地理的な狭さもあり、それがより明確に現れたと言えよう。

(4) 『宿遷市志』の記述

① 耶蘇教

光緒十三年（一八八七年）、基督教長老教会のアメリカ国籍の伝教士ト徳生らが宿遷の県城に至り、福音堂（診療所）を設立して伝教の手段とした。一九〇五年、耶蘇教の伝教士鮑達理が城南の郊外（現在の人民医院跡）に仁濟医院を設立したほか、崇実中学、培賢女子小学を設立し、診察に訪れた人やこれらの学校の学生らが入教するようになって信者は徐々に増加していった。

一九一二年、「中華基督教會」（「宿遷教堂」とも言う）が成立する。一九一七年、全県に教堂は五八箇所、信徒数は三〇〇〇余人であった。一九二五年、信徒らが資金を出し合って、県城の南門内に「耶蘇堂」（「礼拝堂」とも称した。現在の宿城鎮人民政府院内）を設立し、毎日曜日、教徒らが集まって礼拝を行った。一九三七年、運河の東側に「宿東会堂」が設立された。一九四一年、太平洋戦争が勃発、アメリカ国籍の宣教師らが皆帰国した。その後、の礼拝活動は呉登堂が主催した。

文化大革命が始まると、宗教活動は中断を余儀なくされるが、一九七九年に活動を再開する。一九八五年、宿城鎮黄河農場に耶蘇堂が新たに建設された。牧師を勤める呉登堂、長老の陳立生らは、それぞれ、文化大革命以前は、県（現在は市）の政治協商会議の常任委員であった。一九九〇年、全市の耶蘇堂は三〇余箇所にあり、信者は一二〇〇人余いる。

②東正教

東正教は別に「安息教」とも称され、基督教の一派である。一九一六年に境内に入り、埴子集郷内に教堂を設立し、信徒は一〇余人であった。一九二四年、教堂が埴子集に移転し、信徒の数は三〇余人になった。この教派は土曜日を安息日としている。一九三八年一月、日本軍が宿遷を占領後、教堂は破壊され、教務は中断した。一九四八年七月、中国共産党泗宿（泗洪・宿遷）県委員会と県総隊が宿遷県城の第二次接収を行った後、宗教活動を再開、併せて淮陰や上海などの同派の教堂と聯繫をとった。文化大革命開始後、活動を停止した。^(注34)

『宿遷市志』のキリスト教に関する記述はその伝教の歴史からみると、そつけないぐらいに少なく、精度にも欠ける。『淮陰市志』によれば、光緒一三年、宿遷に最初に伝教に入つたのは南長老教会の鮑達理夫婦で、光緒一七年前後になって、卜德生、賽兆祥（アブサラム・サイデンストリッカー）らがこれに続いたとしており、こちらの方が正しい。崇実中学や仁済医院に関しても、名称を挙げただけとなっている。

また、「東正教」という名称は『宿遷市志』にて初めて登場するが、別に「安息教」とも称されるとしていることから、これは「（基督復臨）安息日会」を指しているよう。『淮陰市志』でも、安息日会が民国五（一九一六）年に宿遷の埴子にて伝教活動を始めたとしており、安息日会で間違いなからう。「東正教」という名称は東方正教会（ギリシャ正教）を連想させるが、その可能性はなく、これは市志編集者の勘違いであろう。

『宿遷市志』の記述がなぜこのようになっていのかは不祥であるが、政治的な遠慮というよりは、単に執筆者が非キリスト教徒で、あまり関心もなかったことが考えられる。

(5) 『灌南県志』の記述

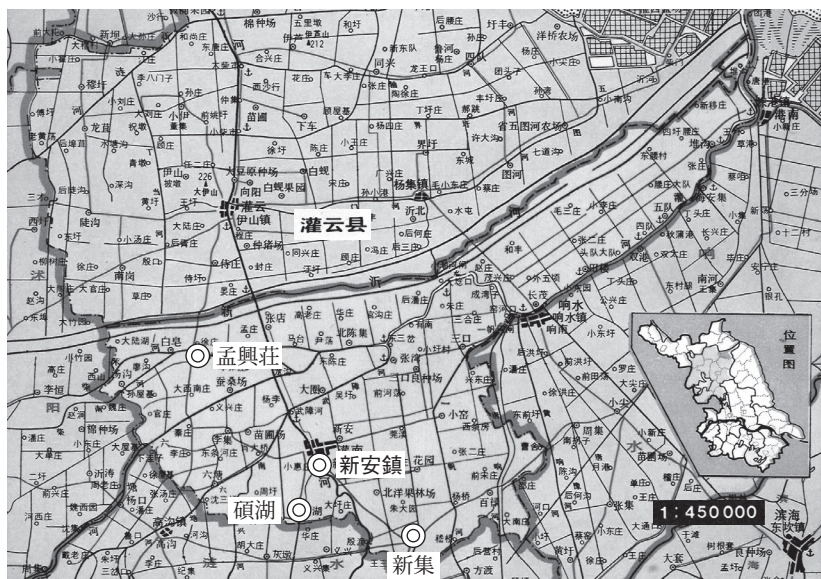
民国初に基督教が県内に入ってきた。教徒の数は少なく、新安鎮、孟興莊、碩湖などに活動拠点があったが、教堂はなかった。一九四九年、県内の基督教徒は二七九名で、毎週日曜日になると信徒らが活動拠点に集まり礼拝を行い、集団で聖書を読み、祈りをささげた。新中国成立後、基督教は自治、自養、自伝の三自愛国運動を展開、愛国愛教を堅持し、正常な宗教活動を展開した。

一九六四年、全県の活動拠点は八箇所あり、基督教徒は一二五四名であった。文化大革命の間、活動は中断を余儀なくされた。

一九七八年以降、基督教の活動は陸続として恢復し、一九八〇年、全県の二〇の郷鎮に二八の活動拠点があり、基督教徒は五四二六人であった。

一九八四年十一月、灌南県は基督教第一次代表会議を開催、灌南県基督教三自愛国委員会を成立させた。主席を一名、副主席を五名、委員を一八名選出した。

【図表 16】灌南県における伝教地（民国初）



【図表 17】 灌南県における教堂・活動拠点数、信者数の変遷

時期	教堂数・活動拠点数		信者数
1910	なし	数カ所	
1949			279
1964	8		1254
1980		28 (20 の郷鎮)	5426
1987	3	92	17860

一九八七年、県政府の批准を受け、全県で教堂が三箇所、活動拠点が九二箇所設けられ、^(注5) 基督教徒は一七八六〇名になった。

『灌南県志』の記述も簡潔であるが、一九八七年現在でのキリスト教の信徒数は一七八六〇名で、漣水県の二三〇〇〇人に次ぐ人数である。しかも最初の伝教は民国初『淮陰市志』では一九一〇年と他県に比べて遅いが、増加率は非常に高い。『淮陰市志』の記述によれば、灌南県に最初に伝教に入ったのは、長老会の他、小群会と自立会（新集鎮）となっている。一方、『灌南県志』によれば、伝教が行われた地域は、県城鎮である新安鎮のほか、孟興莊鎮、碩湖鎮となっている。これらを図示したのが【図表16】「灌南県における伝教地（民国初）」である。

こうしてみると、灌南県への伝教は南側に隣接する漣水県側から行われていったのが分かる。当初はこれら数カ所の活動拠点しかなく、教堂はなかったが、一九六四年には八座の教堂が建設された。その後、教堂が三座に減ったのは文革期の転用が理由であろう。一九八〇年には、活動拠点は二八箇所が増え、県内にある二〇の郷鎮全てに設けられたことになる。活動拠点は七年後の一九八七年には九二箇所と、三倍近くに急増し、信者数も同様に三倍以上に急増している。これを表にしたのが、【図表17】灌南県における教堂数・活動拠点数、信者数の変遷である。

信者数でいうと、一九四九年から実に六四倍の増加である。教堂の数は少なくても、活動拠点（聚会所）があれば事足りるということである。逆に言うところ、底辺である農村部での信者の急増が、郷鎮レベルにおける活動拠点（聚会所）の急増を促した、ともいえる。

（6）『泗陽県志』の記述

民国五（一九一六）年、基督教は淮陰から入ってきた。アメリカ人の戴德明牧師が時々、泗陽にきては伝教し、老泗陽城（即ち城廂）南門内の陳〔氏の〕祠堂に、伝教の会合処を設けた（後に、西門大街の魏という家に移転）。その後、戴は淮陰に戻り、清江の劉素珍女士を派遣したほか、浙江省紹興の金引真女士も泗陽にやってきて、老泗陽城南門大街に「弘道女学」を創設し、女性の基督教徒を収容した。

民国九年までに、全県で伝教が行われたのは四箇所になり、中国人職員四名、受餐信徒〔洗礼を受けた者の意味か〕は四〇名に達した。

民国一三年、「基督復臨安息日会」の劉宝宣、姚光華などが泗陽の鄭楼一帯で布教を行った。民国一四年、戴德明は再び、淮陰の漁溝の孔廷陽、丁長元を派遣し、衆興太平巷に部屋を借りて、教堂と礼拝のための集会所を設立した。これ以降、相次いで運南陳集、新袁、李口、運北八集、来安、王集、里仁などの集鎮に教堂を設立していき、同時にまとまった数の本地人のボランティア伝道員を養成した。

民国二一（一九三二）年、外来の伝道師（西方ミッシヨナリー）と本地の伝道員との間に矛盾が生じ、李靈生、丁樹亭、陳昉らが泗陽教会の自立を提案する。そして民国二二年、「泗陽基督教徒聯合会」が成立し（長老会、安息日会、神召会などが含まれる）、民国二四年には「泗陽県基督教促進会」と改称、衆興鎮驛馬街東首に宅地を購

入し、自ら教堂を建設、その後、相前後して葛集、新袁、八集、里仁、洋河などの地に教堂を設立した。

民国二八年初め、日本軍が泗陽を占領すると、教会は農村部で活動を継続した。占領地では、日本は泗陽教会を蘇淮総会の淮陰分会に戻そうとし、衆興鎮にて集会礼拝を恢復させ、奴隸化思想を伝播した。

民国二九年、王樹亭、賈耀南などが来安賈荘で発起し、教徒の代表大会を開催、泗陽、淮陰の両県からも代表が出席した。会議では、「中華基督教淮、泗、洮自立会」が成立、選挙によって張祥彩が会長に、張耀蘇が副会長に選ばれ、西洋のミッシヨナリーによるコントロールから脱し、自立を実行した。

民国三五年秋、国民党が衆興に侵攻して占領すると、西洋のミッシヨナリーが巻きかえしをはかって再びやってきた。

一九四九年、淮陰地区の基督教教会牧師の孫廷陽、胡鏡心、長老の呉慕光などが前後して泗陽にやってきて、教務を指導し、三自革新運動を展開した。

文化大革命の間、教会活動は停止を余儀なくされた。一九七七年以降、宗教信仰の自由政策は徐々に実行され、泗陽の基督教も恢復し、さらに発展を遂げた。一九八二年、県委員会の統一戦線部は宗教工作会議を開催、基督教三自愛国運動委員会準備組を成立させ、集会所を整頓、合法的な宗教活動を保護した。一九八三年末、三自愛国運動委員会が正式に成立した。一九八七年までに、全県の集会拠点は七八箇所となり、一つの郷に一つの堂があるようになった。これは十里ごとに一つの堂がある配置である。全県の信徒は約三万余人で、継続して増加傾向にある。^(注36)

泗陽県にキリスト教が入ったのも、民国五（一九一六）年と遅かった。最初に入ったのは南長老会の牧師で、当初は通いであった。老泗陽城の南門内の陳氏の祠堂を、後に西門大街の魏という家を借りて会合処を設けた、とい

う話は興味深い。安息日会が入るのは、民国一三年になってからである。先述の如く、『淮陰市志』の記述によれば、安息日会は民国五（一九一六）年に宿遷に入り、民国一三（一九二四）年に徐州から泗陽に伝入し、衆興鎮に到達したとある。おそらく淮陰地区には徐州から伝教し、複数のルートで宿遷や泗陽に到達したものと思われる。その後、大きな発展をみせ、多くの郷鎮に教堂を建設していく。その勢いは教会の自立化へと進み、民国二二年、「泗陽基督教徒聯合会」が成立する。衆興鎮にて自ら教堂を建設したのを皮切りに、各地に教堂を建設していく。民国二八年、日本軍が泗陽を占領するも、教会は農村部で活動を継続した、という記述も重要である。それは県城鎮を押さえることと、広大な農村部を管理することとは別物であるということを示しているからである。同様のことは、改革以降のキリスト教信者の急増が農村部で起こった場合、その管理は容易ではないということを示唆している。

民国二九年に「中華基督教淮、泗、沭自立会」が成立したことは、先述の如く『淮陰市志』にも詳しく記述されている。教会組織の自立化においては、泗陽県が先陣を切ったことが改めて確認できる。一時期、国民党が衆興を占領すると、再び西洋の宣教師らがやってきた、というのも貴重な証言である。民国期における長老会や安息日会などの伝教地を地図に示したのが、【図表18】「泗陽県における伝教地（民国期）」である。

地名の横に●印をつけた所は安息日会の教堂が建設された郷鎮を指す。こうして見ると、民国期の泗陽県においては、長老派に加え、安息日会が活発に活動していたことが分かる。

一九八七年、全県の集会拠点は七八箇所となり、一つの郷に一つの教堂があるようになった。これらの教堂が長老派なのか、安息日会なのか、あるいは中国化した中華基督教会かは不祥であるが、安息日会だとしたら民国期の伝教が今日まで影響を与えていることになる。約三万余人という全県の信徒数は、漣水県の二万三〇〇〇人を抜いて淮陰地区で最大級である。信者数が最大にしては記述が少ないが、それには伝教の歴史が浅いということも関係

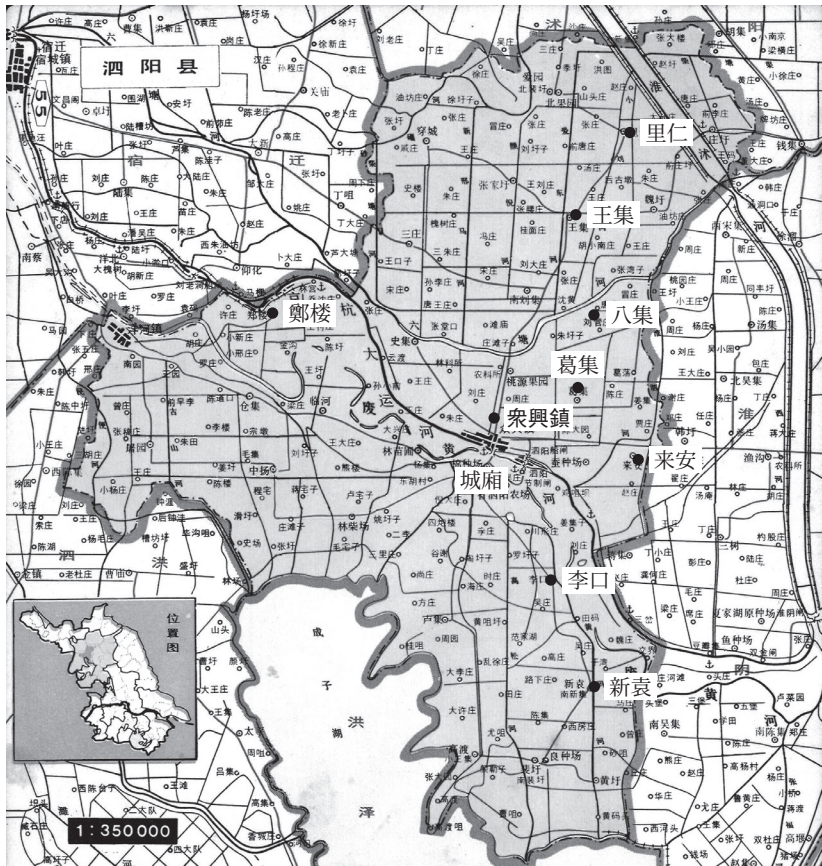
していよう。

(7) 『洪澤県志』の記述

民国四（一九一五）年、アメリカ人牧師、孟格美、艾德士、王慕德、魏礼安（女）らが前後して県内の集鎮にて、図を掛けて大衆を集め、基督教の教義を講釈し、基督教への入信を勧めた。しかし入教する人間は極めて少なかった。

民国一四年（一九二五）前後、アメリカ人伝教士が岔河一帯で、歩きながら布教を行った。当初は岔河中街石橋北胡玉生の旅館に宿をとっていたが、後に胡姓

【図表 18】泗陽県における伝教地（民国期）



の茅葺きの家（四部屋）を借り、教堂を造った。当時、信者は僅かに三〇余人しかいなかった。

民国二二年、アメリカの教会が資金を提供し、岔河の商人で基督教徒の黄富が運営を請け合い、現在の岔河朝陽北路の窪地を購入し、整地をして平らにし、瓦屋根の八部屋からなる建物を建設した。八部屋のうち、五部屋を教堂とし、三部屋を居室と厨房とした。こうして岔河教堂が正式に設立された。この教堂は中国人の呉慕光牧師が責任者となった。信徒の数は一〇〇人近くになった。民国三十一年、岔河教堂は日本軍によって焼き払われ、教徒らの集会場所は、黄富が経営する「民衆茶社」に移った。

民国二二年、アメリカの教会が出資して、高良澗菱角塘東（現城南一村の場所）にて二部屋からなる建物を建てて教堂とし、山東省濰県の張学茂と山東省馬庄の某耶穌教徒がこの場所で伝教活動を行った。信徒数は二〇名近くで、多くは老人と女性だった。

民国二五年末、高良澗教堂は、国民党江澤湖水警隊の張紹武によって取り壊され、砲楼に建て直されたため、教徒らの集会も停止した。

民国二六年、淮陰県の漁溝の基督教徒で西洋医学の医師であった張自才が自ら資金を出し、順河集街西に三部屋からなる教堂を建設、四〇～五〇人の教徒がいた。抗日戦争時期、日本軍が掃討し、診療所部分は焼け落ちたが、教堂部分は幸いなことに残った。文化大革命時期、残された教堂も取り壊された。

民国二六年、東双溝の老街北端に三部屋からなる教堂を建設、山東省濰県人の張学茂が伝教を行った。教徒の数は二〇余人であった。

民国三〇年、顧学文、施善斌など一九人が、双溝の東園で「耶穌家庭」を組織し、自らの資金で八部屋からなる建物を建て、そのうち三部屋を礼堂とした。また耕地を十数畝購入し、一緒に労働し、同じ家に住み、共同で食事

するということを実行した。この教堂は「南京耶蘇家庭」、及び蕪湖と山東の（耶蘇家庭）教会に属していた。教徒の増加に伴い、双溝教堂は双溝の孫庄と、万集及び高良澗に支堂を建設した。教堂の管理は長老の顧学文、施善斌、嚴学余、及び執事の顧文礼、王广太、張歩発らが行った。新中国成立後、礼拝活動は停止し、耶蘇家庭は解体した。

基督教の牧師は「愛人如己、捨己為人」の基督教精神を宣伝し、その土地にとって利益となるようなこともしてきた。民国二三年、アメリカの教堂が出資して西順河沿湖地帯の堤防を修復（これを洋堤という）、湖水を遮り、良田を保持した。翌年、「岔河福音堂小学」を開設、八〇余名の学生がいて、多くは教徒の子弟であった。国語、算数の学習のほか、聖書も学び、基督教の教育も受けた。後に聖書の学習は取り消され、福音堂小学も運営を停止した。

民国二九年九月九日、日本軍の飛行機が岔河一帯を爆撃した際、岔河教堂の屋上に漆で「USA」の文字を書き、竹竿の上に赤十字の旗を星条旗を掲げた。これを見た日本軍の飛行機は、低空で飛行しただけで通過した。日本軍の爆撃にあう度に、岔河教堂は避難民で満杯となった。

中共一期三中全会以降、宗教政策が実行され、一九八一年一二月には、江澤県基督教三自愛国委員会が成立した。一九八四年、県の人民政府は、全県二三箇所あった「信者の」家を転用した集会拠点を一三に合併させた。

一九八五年二月、岔河鎮合興村の域内に四部屋からなる教堂（一一〇平米）を再建した。全県の基督教活動場所も一箇所を増設した。一九八七年、全県には基督教活動拠点が二四箇所あり、教徒は一人近くいる。そのうち、まだ批准を受けていない「非合法の」基督教活動拠点は六〇近くあり、そこで礼拝している教徒は五〇〇〇余人いる。^{（注27）}
老子山には教徒が一〇〇〇余人いる。

ここからは大運河の西側の諸県となる。なかでも洪澤県はキリスト教徒が一万人と多いこともあり、『洪澤県志』

におけるキリスト教に関する記述は多い。

洪澤県への伝教は淮陰地区内では遅い方で、民国四（一九一五）年のことであった。南長老教会のアメリカ人牧師らが県内の集鎮にて、図を掛けて大衆を集め、基督教の教義を講釈し、基督教への入信を勧めたという記述は、教堂建設以前の状況を彷彿とさせる。それから十年後、岔河の旅館に宿をとっていた情況から、胡姓の茅葺きの家を借りて教堂を造ったが、信者は僅かに三〇余人しかいなかった。こうした当初の情況は、アブサラム・サイデンストリッカーも自伝で記していると通りである。民国二年になって岔河教堂が正式に設立される。岔河は淮安よりの鎮であることから、宣教師らは淮安側から洪澤県に入ったことになる。民国十一年、岔河教堂が日本軍によって焼き払われ、教徒らの集会場所は、有力信者が経営する「民衆茶社」に移ったということであるが、これはおそらく茶館であろう。

民国二二年には、洪澤湖沿いの高良澗にも教堂が建設されたが、伝教に当たったのが山東省から来た人物というのが注目される。しかしこの教堂は、国民党の江澤湖水警隊によって砲楼に転用されてしまう。洪澤湖沿いの順河集（西順河鎮のことか）にも教堂が建設されるが、日本軍によって診療所が焼け落ちてしまう。残された教堂も文革時期に取り壊されてしまう。

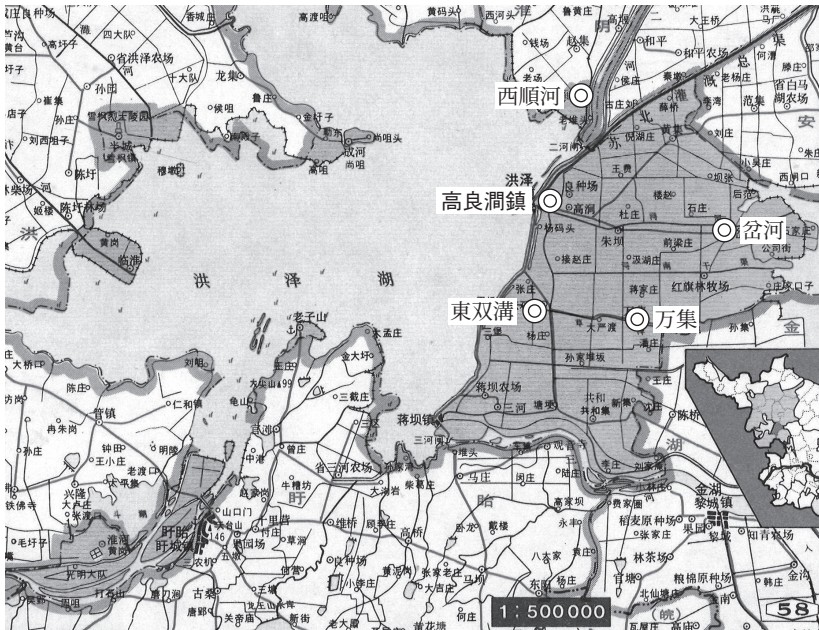
洪澤県で注目されるのは、山東で発生した「耶蘇家庭」が、民国三〇年に双溝にて組織されたことである。その前にも山東からの人物が双溝にて教堂を建設しており、山東とのコネクションがあったようである。「耶蘇家庭」は万集と高良澗に支堂を建設するも、建国後は解体を命じられる。このことは『淮陰市志』では言及されておらず、貴重な記述となっている。なお、地図上では「東双溝」となっているが、これは洪澤湖を挟んで西側にある泗洪県にも「双溝」があり、それと区別するため、洪澤県の「双溝」を「東双溝」と呼んでいるのであろう。

牧師らが西順河沿湖地帯の堤防を修復したり、岔河福音堂小学を開設するなど、地元民にとって利益になることも行った、と明確な言葉で評価をしている点も、他の県志には見られないことである。

民国期における洪澤県における主要な伝教地を図に示したのが、【図表19】「洪澤県における伝教地（民国期）」である。

民国期における信者の総数は記されていないが、それほど多くはなかったようである。しかしながら、改革以降、洪澤県でも信者の数は急増したようである。一九五八年の教堂の整頓については触れていないが、一九八四年、県の人民政府が全県二三箇所あった「信者の」家を転用した集会拠点を一三に合併させた、ということは、教堂はなくとも家を拠点とした集会所が乱立していた状況を想起させる。その一方

【図表 19】 洪澤県における伝教地（民国期）



で、翌一九八五年には岔河に教堂を再建し、全県の基督教活動場所も一一箇所に増設される。そして一九八七年になると、全県の基督教活動拠点は二四箇所と倍増し、教徒は一人近く達する。そのうち、まだ批准を受けていない（非合法の）基督教活動拠点が六〇近くあり、そこで礼拝している教徒は五〇〇〇余人いる、という記述は、県政府による管理よりも速いスピードで、底辺の農村部において信者が急増している状況を示しているよう。こうした状況もあり、『泗洪県志』のキリスト教に関する記述は、ローカルな情報は含まれるものの、全体としてはやや断片的となっており、スタンスも明確ではなく、評価に迷いがあるように見受けられる。

（８）『泗洪県志』の記述

県内の基督教の主要な会派はアメリカの北長老教会と復臨派の復臨安息日会である。北長老会は民国二（一九一三）年、「安徽省の」宿州から泗洪に伝入した。九年までに、二名のアメリカ籍の伝教員と五名の中国伝教員が伝教を行い、教会が運営する小学校があり、初小（初級小学）と高小（高級小学）とで合わせて九一人の学生がいた。これは全県の小学生数の七パーセントを占めた。教徒数は未調査で、民国一〇〜一九年の間については資料がない。

民国二〇年、中華全国基督教協進会（長老会）の蘇北分会（徐州に拠点がある）の分会長である潘水如とアメリカの差会（ミッシヨナリー）駐会者であるト得生が前後して梁集、金鎮、埕仁、青陽などの地に伝教に入り、活動拠点を設けた。二六年、ト得生は宿遷の南関に行き、仁濟医院を創設し、「基督教西差会」を成立させた。翌年、抗日戦争が勃発、アメリカ人教士のト有存、梅克康、梅姑娘などが金鎮と埕仁にて拠点を設けて伝教を行った。二九年、アメリカ人教士らが帰国する前に、「基督教西差会」は「基督教連南区会」と名称を変更し、吳登堂が主

任を、梁龍業が副主任を務めた。この会派の神学生である鄭子仁は金鎖鎮に行つて伝教し、教徒の数は一〇〇人を超えた。金鎖鎮では蔣桂香が教内の行政事務の責任者となり、青陽鎮にて「遠東宣教会」を成立させ、牧師の趙沾泉は川城の教務も兼業した。同年、「運南区会」は教士の陳華南を帰仁に派遣して伝教を行わせ、「長老会」の旧称を恢復させた。「運南区会」の牧師蔡統金（山東神学院）が金鎖鎮の教務を引き継ぎ、併せて朱湖鳳を教区に送り込んだ。三三年、張鳳祥牧師が金鎖鎮に赴任して蔡統金を引き継ぐも、一九五三年以降は活動を停止した。

復臨安息日会は、民国二〇年に漣水県から伝入した。教士の陳金坭が界集の趙国文の家に拠点を設け、入信者は二〇余人であつた。陳は『牧声』や『安息学課』などの教義を宣伝した。二三年には何集、謝嘴一帯にまで拡大し、何集に七間の教堂を建設し、正式に「基督教復臨安息日会」という看板を掲げた。三〇年には無錫から長老の陳玉珍が派遣され陳金坭を引き継いだ。三三年、泗陽県の衆興陳の李金蘭が赴任して後を引き継いだ。一九五四年、全県の教堂は二六個所となり、教徒数は一〇三九人に達した。主要な分布地は魏営、峰山、四河、上塘、双溝、青陽など一五の郷鎮であつた。「教堂整頓が行われた」一九五八年、李金蘭は原籍に戻つた。宗教整頓の後、全県の教堂は朱湖、金鎖、青陽、峰山、何集などの五つだけとなり、礼拝に参加する教徒も僅かに四〇〇余人となつた。一九六三年になると、双溝、楊場、七里、潼河の五つの拠点が増え、信徒も二一〇人増えた。文化大革命の期間中、教会活動は全て停止した。

中共の一期三中全会後、「本来の」民族と宗教政策が施行された結果、各地で信徒らが次から次へと入り乱れるように聚会を開くようになり、一時「宗教熱」が出現した。古くからの信徒は信仰生活に戻り、新たな信徒が徐々に増えていった。一九八一年、全県で基督教の活動を行う公社や「農」場、鎮などは二五に、「信者の」自宅を使った聚会拠点は七二個所に達した。ある地域では、一人が信者になると一家全員が信者になったり、一戸から全村に

広がり、一つの姓に伝わると一族全員が信者になる、というような情況が生じた。王集公社（天崗湖郷）の潘崗大隊南馬生産隊では、三三戸中、二七戸が信徒になった。四河公社の淮豊大隊第一生産隊では三七戸中、三五戸が信徒になった。朱湖公社の臧橋大隊では臧姓の殆どが信徒になった。「宗教熱」の最中、管理が薄弱となり、個人個人が看板を掲げて伝道し非合法活動を行うようになった。上塘公社の棗林大隊第四生産隊の社員である張×は、手に『聖書』を掲げ、背中に十字架を背負い、峰山や四河などの地を歩いて遊説を行った。また魏営公社の官塘大隊の社員である朱××ら二名は夫をもつ婦人を騙して安徽省の杯遠や蚌埠などの地に連れて行き、伝教の名目で公開同居を行った。王集公社の李莊大隊第四生産地の社員李×は、長期間に渡って「上帝」への敬奉の名目で信徒から錢財を巻き上げ、私腹を肥やした。

一九八二年、「基督教泗洪県三自籌備領道小組」が成立し、成員は趙豊漢、呉従余、何修業、周瑞余、王昭栄（女）の五人で、長老の趙豊漢が組長を兼ね、呉従余が副組長となった。小組は信徒に対し広く党の宗教政策を宣伝し、「自治、自養、自伝」の方針を堅持し、教規を取り決め、盲従信者らをコントロールし、徐々に「定片、定点、定人」（地域の一角から地点、そして人々）の管理を実現していく、宗教活動の秩序を基本的に恢復した。全県の五六の聚会所、三万七六〇〇人の信徒の宗教生活は正常な方向に向かった。一九八六年一月、全県基督教第一回會議が招集され、「泗洪県基督教三自愛国運動委員會」が成立し、選挙を通して、一人からなる常務委員會を組織し、趙豊漢が副主席（主席の誤植か）に任じられ、全面工作を主導した。張克運が副主席となり、秘書長も兼ねた。一九八六年末までに、全県の基督教の聚会拠点は五六から七八個所に増えた。

一九八九年一〇月二七日、基督教「泗洪県三自愛国運動委員會」は第二回の代表會議を招集し、張克運を主席に、趙豊漢を副主席に選出したほか、二項目の章程を決議によって制定した。その年の末までに、県人民政府が批准し

た基督教の聚会拠点は全部で七八個所に、信徒は三万二〇〇〇人に達した。そのち、女性の信徒は八〇パーセントを、四〇歳以上の信徒は六〇パーセントを占める。^(注38)

泗洪県内に北長老会が民国二（一九一三）年に、安徽省の宿州から泗洪に伝入したというのは『淮陰市志』には書かれていない。淮陰地区では南長老教会が早くから伝教しており、意外な感じを受けるが、安徽省からの伝教ということであれば、納得はいく。小学校まで設立しており、それなりに本格的な伝教であったようだが、信徒数は不祥という。

民国二〇年になると、今度は中華全国基督教協進会（長老会）の蘇北分会の会長である潘水如とアメリカ人のト得生が金鎮、埤仁、青陽、などの地に伝教に入り、活動拠点を設ける。こちらは南長老教会の流れを汲むので、南長老派が改めて伝教に入ったということであろう。青陽は县城鎮であるが、金鎮と埤仁は宿遷県や泗陽県に隣接しており、南長老派の伝教活動が地理的に拡大していき、泗洪県に至ったことになる。

一方の安息日会も民国二〇年に泗洪県に伝教に入るが、こちらは泗洪県とは距離のある漣水県からであった。当初は界集を拠点とし、やがて一九五〇年代には青陽の他、魏營、峰山、四河、上塘、双溝など、県の西南部に信者を増やしていく。どうやら県内で長老派との地域的な棲み分けが行われているようである。

泗洪県における安息日会の活動に関しては、『淮陰市志』には記述がなく、『泗洪県志』の記述は貴重である。逆に、『淮陰市志』では内地会、及び耶蘇家庭が泗洪県で布教活動をしていることになっているが、『泗洪県志』には言及がない。内地会はそれほどの影響がなかった可能性もあるが、耶蘇家庭の場合は、カルト的な集団故に言及を避けたのかも知れない。

民国期から一九五〇年代までの泗洪県における主要な伝教地を图示したものが、【図表20】「泗洪県における伝教地（民国期～一九五〇年代）」である。梁集、何集、謝嘴、楊場、七里、潼河以外の地名は全て地図上で見つけることができた。

『泗洪県志』で興味深いのは、改革以降の「宗教熱」の実情を具体的に書いていることである。カトリックと違ってプロテスタントの場合、自宅を聚会拠点にすることがあり、こうなると地方政府も把握、管理しき

【図表 20】 泗洪県における伝教地（民国期～1950年代）



れなくなる。また、王集公社（天崗湖郷）や四河公社のとある生産隊の如く、一戸から全村に広がったり、朱湖公社の臧橋大隊の臧姓の如く、一つの姓に伝わると一族全員が信者になる、というような情況が生じた。さらには、上塘公社の棗林大隊では手に『聖書』を掲げ背中に十字架を背負い、峰山や四河などの地を歩いて遊説を行う者が現れたり、魏営公社の官塘大隊では婦人を騙して安徽省まで連れて行く者や、王集公社の李莊大隊では信徒らから錢財を巻き上げ、私腹を肥やす者まで現れる始末であった。天崗湖郷と朱湖はそれぞれ長老派と安息日会が伝教している土地であり、一戸から全村に広がるという現象は会派を問わなかった。一方、怪しげな人物や不正を働いた例が報告されている上塘や魏営は安息日会の伝教地であり、こうした行動と会派との間には何らかの相關関係があるのかも知れない。但し、王集は界集の近くであり、私腹を肥やす輩の出現は地域や会派を問わなかった。

県内の宗教活動の秩序が恢復するのは、「基督教泗洪県三自籌備領道小組」が成立した一九八二年のことであった。そして一九八九年末の時点で、県政府が批准した聚会拠点は七八箇所、信徒は三万二〇〇〇人に達した。この数は、漣水県の二万三〇〇〇人、泗陽県の約三万余人を抜いて淮陰地区で最大である。また、女性の信徒は八〇パーセントを、四〇歳以上の信徒は六〇パーセントを占める、という情報も興味深い。仏教の場合もそうであるが、やはり年配の女性の方が信心深いというか、宗教に依存する割合が高いということであろうか。

（9）『盱眙県志』の記述

民国二三（一九三四）年、基督教は西側の近隣地域から盱眙に入ってきた。「安徽省蚌埠市の」五河県の劉桂珍が盱眙にやってきて、「県城鎮である盱城鎮の」順河街に最初の教堂を設立したほか、蚌埠市の牧師、劉子玉もまた盱眙にやってきて伝教した。その後、続々とイギリス人の修女紀碧蓮、アメリカ人の修女施恩峰らがやってきた。

これらの伝教士は前後して、河橋の街道、方荘、仇集の下崗、淮河の腰灘などで活動を行った。教徒の数は六〇余名になった。城内には児童の教養所を一箇所作り、二〇余名の貧しい家庭の子供を収容した。

民国二六（一九三七）年、全県の教徒数は四三一人に達した。抗日戦争勃発後、教徒の数は四三人に減少し、二箇所あった教堂（一つは城内、一つは郷）も皆、破壊された。

建国後、「安徽省滁集市の」嘉山県の明光教堂が董徳文を盱眙に派遣し、伝教を行った。六〇年代初め、教徒数は一〇四人に増加した。一九六四年六月、全県の中華基督教堂は三箇所あり、教徒数は二九九名であった。主要な分布は仇集、河橋一帯であった。そのうち、仇集堂には一〇六人、方荘堂には六二人の教徒がいた。文化大革命の間、活動は停止した。

一九八〇年代初め、盱眙基督教組織が恢復し、教徒は五六四名となった。一九八四年十二月、県基督教三自愛国会準備小組が成立、丁倫維が責任者となった。一九八五年、全県の基督教徒数は一五〇〇人、集会拠点は二八箇所、二一の郷鎮に分布しているが、長老や神学生はいない。^{（注39）}

盱眙県に基督教が伝教するのは民国二三年と遅く、しかも隣接する安徽省の蚌埠市からであった。そのことを反映してか、最初の伝教地は県城鎮である盱城鎮を除くと、安徽省寄りの河橋や仇集などであった。会派は不祥である。しかしながら信徒数は少なく、二つあった教堂も抗日戦争時期に破壊された。建国後、再び伝教に來たのも安徽省嘉山県からであった。信者数も多少は増加したものの、主要な伝教地は民国期と同じ仇集、河橋一帯となっている。盱眙県における民国期の伝教地を図示したものが、【図表21】「盱眙県における伝教地（民国期）」である。

信徒数が一五〇〇人（一九八五年）
 というのは、淮陰地区では三番目に
 少ない県である。

（10）『金湖県志』の記述

一九七〇年代初、淮陰から本県に
 移住してきた者の中に少数の信徒が
 おり、これによって本県の基督教活
 動が始まった。信徒らは一般に家で
 「礼拝」を行っていた。後に、教徒
 の中の一人が、陳橋郷の管庄村に「挿
 戸」（世帯が使っている家に別な所
 帯が割り込んで住むこと）していた
 一人の老基督教徒と連絡をとり、頻
 繁に彼の家で礼拝を行い、『聖書』
 を読み、神に祈りを捧げ、賛美歌を
 歌った。イエスの誕生日には、集会
 を開いて記念活動を行った。影響は

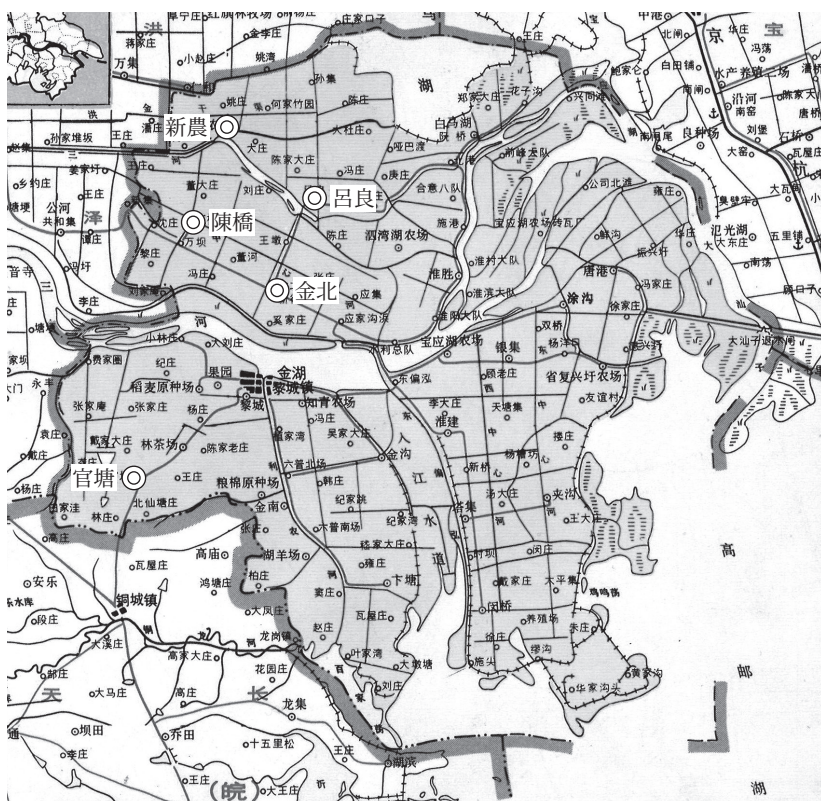
【図表 21】盱眙県における伝教地（民国期）



徐々に拡大し、信徒数も不断に増加し、一九八二年には一三人、一九八三年に三〇人、一九八四年に八七人、一九八五年に二〇七人となった。分布しているのは、陳橋、金北、呂良、新農、前鋒、官塘などの郷である。^(注4)

金湖県における基督教の伝教は淮陰地区内では最も遅く、一九七〇年代初になってからで、しかも淮陰から移住してきた信徒によるものであった。おそらく南長老派と推測される。信者数も一九八五年の時点で二〇七人と、淮陰地区では最小となっている。その割には分布地域が広く、信者らが少数、分散して居住していることを窺わ

【図表 22】 金湖県における伝教地 (1970 ~ 80 年代)



せる。

一九七〇～八〇年代における金湖県での伝教地を图示したものが、【図表22】「金湖県における伝教地（一九七〇～八〇年代）」である。こうして見ると、最初の伝教地である陳橋を中心にその周辺に信者が広がっていつているのが分かる。伝教地が県城鎮に達していないことも、金湖県での伝教が極めてローカルな現象となっていることを示している。やはり一万人を超える信者を獲得するには、長い年月を要するということでもある。

五 考察

以上、『淮陰市志』で淮陰地区におけるカトリック、及びプロテスタントの伝教状況を概観したあと、各県志の記述にあたりながら、よりローカルな状況をみてきた。県志によつては、『淮陰市志』で言及されていない情報を記述しているものもあり、これらを丁寧に見ていく意義は十分にあった。すでに見てきた如く、詳細な資料そのものが、淮陰地区における基督教伝教の歴史や問題点などを如実に物語っており、ここでそれを繰り返す必要はないであろう。但し、最後に全体を通して考察を加えることにより、本稿の締めくくりとしたい。

第一の視点は、カトリックとプロテスタントの関係である。まず、両者の歴史的な展開を整理しておきたい。淮陰地区においては、カトリックとプロテスタントとはあまり接点がなかったようである。カトリックの伝教開始は一八五一年と古く、淮安から始まって、漣水や沭陽、宿遷などで教堂を建設していく。そして宿遷に総本山が建設され、一九二二年の時点で信者は六六〇〇人に達した。一方、プロテスタントはカトリックの伝教から遅れるこ

と三六年、一八八七年になって淮安に伝教に入り、その後、各県に拡大していく。従って、時期的にはこれ以降、カトリックと重なることになる。地理的には淮安のほか、漣水、沭陽、宿遷などの県で重なることとなるが、両者は敵対こそすれ、協力するような関係ではなかった。そうした中で、長老派及びその中国化した中華基督教会は信者を拡大していくが、カトリックは共産党政権の成立によって壊滅的な打撃を受けることになる。

次に、組織面を見てみたい。中国ではカトリックを天主教と称し、基督教というところをプロテスタントを指す如く、両者を別物と認識している。日本人から見ると、これには多少の違和感を覚えるが、中国人の側からしたら、ある意味、理にかなった認識でもある。これには、カトリックが明代にまで遡る長い伝教の歴史を持つのに対し、プロテスタントは清末からという歴史的な違いもあるが、両者を分けて認識する最大の違いは、その組織である。ローマ教皇を頂点とする組織化されたカトリックは、中国においても組織的に伝教活動を展開した。

中国においてカトリックが持つある種の「威力」を物語る話が、『宿遷市志』に見える。即ち、宿遷では「豪紳らは教会に特権があることを見抜き、官府（地方の役所や官吏）はこれに畏服したため、多くの者が天主教に加入し、外国の教士らの庇護を受けることができた」とし、当初は豪紳らから「入信」と記している。実際、同治八年に捻軍が北上して宿遷県の嶂山を通過した際、天主堂を破壊すると、外籍宣教師らは県に賠償を求め、教堂を再建させ、併せて県に警備隊を教堂に派遣させるなど、強気な対応をとっている。カトリックに対する対応は、国民党や占領した日本軍、共産党による「民主政府」もほぼ同じといっている。建国後はその対立も先鋭化し、淮陰地区では順治年間（一六四四）以来、長い中断を経ながらも三〇〇年間にも渡って継続されたカトリックの伝教活動は、建国後の取り締まりにより壊滅状態となり、細々と続いた活動も一九八〇年代初めをもって完全にその姿を消すことになる。

対して、プロテスタントはなぜ消滅することがなかったのであろうか。プロテスタントは、カトリックの世俗的な権威を否定することによって誕生したという歴史的な背景や、聖書を唯一の拠り所とする教義から、常に分派を繰り返すことが「内包」されているとも言える。各会派には組織があっても、プロテスタント全体としては、必ずしもカトリックのように組織化されていた訳ではない。それは中国における伝教方法においても見られ、別の見方をすれば、各会派が競うようにして未開拓の処女地に向かっていた。淮陰地区の場合、南長老教会が主流とはいえ、時代が下って民国期になると、安息日会や真耶蘇教会、神召会などの会派も伝教に入る。さらには、長老派の中国化の過程で生まれたとも言える中華基督教会や、小群会、自立会などの他、耶蘇家庭の如く、カルト的な集団まで誕生していく。こうした諸会派に入信しても、カトリックのような世俗の権力が信者に付与されることはない。

当初は豪紳から入信したカトリックに対し、プロテスタントに入信した信者の多くは女性や年配者であった。信仰の名を借りた営利行為や不法行為がまかり通った背景にはこうした信者層の問題もありそうである。プロテスタントの組織としての相対的な「弱さ」と、こうした信者層は、共産党政権にとってもそれほどほどの「脅威」にはなかった。但し、広大な農村部での信仰となると、政府も管理しきれなくなる。特に、信者の自宅が聚会所となった場合、なおさらである。

信者の急増に対しては何度か、整理統合が繰り返された。建国間もない一九五〇年代初めに展開された三自愛国運動を皮切りに、一九五八年には教堂の整理が行われた。この時、真耶蘇教会の拠点の一つであった流陽県が「無教県」になったことを宣言している。一九六三年には統一戦線部による宗教活動に関する規定が公布され、「社会主义教育運動」中の一九六六年には、淮陰県も「無宗教宣言」を出した。同年に始まった文革により、一切の宗教活動は地下に潜るも、改革以降、再び信者数が激増する。地域によっては、不法行為が発生するなど混乱状態に陥り、

一九八七年までに全市で六名が死刑判決を言い渡される。こうした事態に対する対応は、県によって温度差があるように見受けられる。淮安県や泗陽県のように「寛大」なところもあれば、宿遷県のように信者が増えない所もある。泗洪県や洪澤県の場合は、農村部で急増する信者を管理しきれない状況のように見受けられる。

第二の視点は、キリスト教の「中国化」の問題である。これはカトリックとプロテスタントの差異とも深く関係してくる。カトリックはその組織上、「中国化」は難しい。共産党政権が司教の任命権を保持しようとしても、ローマ教皇がそれを認定しない、という問題が長らく続いている。^(注4) 対して、プロテスタントはその教義上、「中国化」はそれほど難しいことではなかった。ここでいう「中国化」とは、単に教会の運営資金の自立化や、牧師の中国人化だけを指すのではなく、長老会を中華基督教会と名称を変更するなど、会派そのものの「中国化」を指す。もちろん、教会側もある程度の抵抗はしたようである。例えば、泗洪県では、民国二十九年に「長老会」の旧称が復活したり、泗陽県では民国三五年に国民党が県城の衆興鎮を占領すると、西洋のミッシヨナリーが巻きかえしをはかって再びやってきたという。長老派そのものを「中国化」する以外にも、小群会や自立会の如く、長老派から分派する形をとれば、「中国化」は瞬時に行うことができる。おまけに、民国末から外国人宣教師らが一齐に帰国し、その後、二度と伝教を目的に中国に入ることがなくなれば、「中国化」は必然の結果でもあった。共産党政権も、外国教会と一切の関係を断った教会組織であれば、それほど危険なものにはならない。こうした「中国化」の動きに対し、本家の長老派は打つ手立てがない。南長老派自体も、本国にて分離融合を繰り返して今日に至っているからである。

第三の視点は、伝教の歴史地理である。本稿では淮陰地区に限定して伝教過程を詳しくみてきたが、淮陰地区だけでも広大な地域であり、当然のことながら、伝教の状況には地域差が見られる。最大の原因は、伝教が開始された時期に地域差が見られたことであつた。伝教開始年の古い順から、各県の一九八〇年代以降の活動拠点数、信者数、一拠点当たりの信者数を表にしたものが、【図表23】「各県の伝教開始年、一九八〇年代以降の活動拠点数、信者数、一拠点当たりの信者数」である。

こうして表にして見ると、現在、淮陰地区の全県にキリスト教徒が分布しているとはいえ、県によるばらつきが非常に大きいことが分かる。概して、教派数が多いほど、信者数は増えるものと思われる。また、ある程度は、伝教の歴史の長さで説明ができるが、歴史が古いほど信者数が多いとは限らない。例えば、民国初年から五年にかけて伝教され始めた灌南県、泗陽県、泗洪県、洪澤県は、いずれも一万から三万の信者数がある。このうち、灌南県を除くと、泗陽県は大運河を跨ぐし、泗洪県と洪澤県は大運河の西側に位置する。つまり、比較的伝教の歴史の

【図表 23】 各県の伝教開始年、1980 年代以降の活動拠点数、信者数

県名	伝教開始年	活動拠点数	信者数	一拠点当たりの信者数
淮陰県	光緒 24 (1898) 年	28	10000 人	357 人
淮安県	光緒 21 (1895) 年	40	11800 人	295 人
漣水県	光緒 15 (1889) 年	62	20000 人	370 人
宿遷県	光緒 13 (1887) 年	30	1200 人	40 人
灌南県	民国初 (1912) 年	95	17860 人	198 人
泗洪県	民国 2 (1913) 年	78	32000 人	410 人
洪澤県	民国 4 (1915) 年	24	10000 人	416 人
	[以上に加えて未批准	60	6000 人	100 人]
泗陽県	民国 5 (1916) 年	78	30000 人	384 人
盱眙県	民国 23 (1934) 年	28	1500 人	53 人
金湖県	1970 年代	--	207 人	--

※活動拠点数、及び信者数は盱眙県、金湖県が一九八五年、淮陰県、漣水県、灌南県、洪澤県、泗陽県が一九八七年、泗洪県が一九八九年、宿遷県が一九九〇年、淮安県が一九九一年のものである。但し、淮安県と漣水県の活動拠点数だけは一九八七年のものである。

※活動拠点当たりの信者数は小数点以下は切り捨てた。

浅い大運河の西側の諸県において、急激な信者の増加がみられる、ということである。実際、光緒年間に伝教が始まった淮陰県・淮安県・漣水県・宿遷県の四県の現在の信者数の合計は四四八〇〇人となっている。対して、民国初、五年に伝教が始まった灌南県・泗洪県・洪澤県・泗陽県の四県の現在の信者数の合計は八九八六〇人と、倍以上となっている。

また、古い伝教の歴史を誇る宿遷県の現在の信徒数が一二〇〇人と少ない。これにはどのような要因があるのか、資料からでは計りようがないが、今後、検討の余地はあろう。一つ考えられるのは、カトリックとの関係である。先述の如く、淮陰地区で最初にカトリックが伝教されたのは淮安であったが、信者数も最大で一〇〇〇人と少なく、一九五三年には活動を停止している。対して、宿遷県では、信者数は最大で六六〇〇人に達し、しかも細々ではあるが、一九八二年まで活動していた。嶂山にカトリックの総本山が置かれた如く、宿遷県は淮陰地区内においてカトリックの伝教拠点であり、且つ、歴代政府からも厳しい対応を迫られた。こうした歴史的な経緯から、宿遷では新旧を問わず、キリスト教に対する警戒感が根強く残っている可能性が考えられる。

なお、淮陰地区の信者数を合計すると、一三万四五六七人となる。『沭陽県志』が入手できなかったため、沭陽県の信者数は計算に入っていない。『淮陰市志』によると、全市のキリスト教徒は一九八七年までに一四万五三九六人に達しているとあり、これから先ほどの総数を引くと、一万八二九人となる。沭陽県にも一万人近い信者がいるものと推測される。

活動拠点数は、県城鎮などにある大きな教堂と郷鎮レベルにおける聚会所とを合計したものである。例えば、灌南県では教堂が三箇所、活動拠点が九二箇所、といった具合である。当然、県城鎮にある教堂には多くの信者が集まるはずであり、一拠点当たりの信者数は必ずしも実情を反映した数字ではない。それでも、信者数に対する活動

拠点の供給状況を知る上で、一つの目安にはなろう。これから読み取れるのは、一拠点当たりの信者数の幅が四〇から四一〇人と、実に一〇倍の幅があることである。信者が一万人を超える県では、一拠点当たりの信者数は三〇〇人から四〇〇人の間となっている。郷鎮レベルの聚会所での人数はもう少し少ないにしても、これはかなりの数と言わざるを得ない。対して、灌南県では一七八〇人の信者に対して集会拠点が九五箇所もあり、一拠点当たりの信者数は一九八と少なめである。さらには、宿遷県では一二〇〇人の信者に対し三〇もの活動拠点があり、一拠点当たりの信者数は四〇人、盱眙県も一五〇〇人の信者に対し二八もの活動拠点があり、一拠点当たりの信者数は五三人と、供給が需要を大幅に上廻っている。信者の急増とそれに対する対応も県によってばらつきがあり、このような需要と供給のアンバランスな状況が続いている結果となっている。

第四の視点は、人類学的なものである。淮陰地区におけるキリスト教の伝教には、人類学からみていくつかの興味深い点がある。一つは、キリスト教信者のコミュニティの形成の問題である。都市と農村の格差が大きい中国の場合、これは都市―農村関係、具体的には伝教における郷鎮レベルの位置づけの問題と捉えることもできる。もう一つは、宗族と呼ばれる父系親族集団と信仰との関係である。

伝教における郷鎮レベルの位置づけの問題は、プロテスタントの宣教師らが中国における都市―農村関係農村をどのように捉えていたか、という問題にも繋がる。中国人類学においては、ウイリアム・スキナーによる一連の農村市場圏の研究により、それまで、完結した共同体の単位として考えられていた村落に対して、マーケット・タウンを中心として複数の村からなる市場共同体モデルが提示された。このマーケット・タウンこそ郷鎮レベルに他ならならず、郷鎮を中心とした市場共同体は、商品流通という経済機能のほかに、社交、娯楽、通婚圏、宗族、軍事

行動などの範囲と密接な対応関係にあるとした。実際、社会主義改造時代、人民公社に組織された地理的な規模も、この郷鎮レベルであった。スキナーはさらに、散在しているかに見える村落は、市場圏モデルのもつ階層性により、都市を頂点とする市場システムに位置づけ、中国農村社会、さらにはその頂点に立つ都市の研究に新たな視点をもたらしした。

中国の農村部に入った宣教師らは、経験的にこうした中国社会の構造を把握し、最も効果的な伝教方法を模索した。それが広大な村々を歩き回るのではなく、村人らが集まる郷鎮レベルを拠点にすることであった。こうした方法は、南長老教会のアブサラム・サイデンストリッカーも自伝で述べている。彼は新しい郷鎮に行くと、その茶館に居座り、集まっている人々に福音を説く。これを定期的に繰り返して、興味をもった人が一定数集まると、最初は個人宅の一室を借りて拠点とした。さらに信者が増えると、常設の活動拠点を設ける。教堂建設までにはこうした長い道のりがあった。^(注4) この過程はカトリックの伝教でも同様である。茶館を拠点とした話は、『洪澤県志』に見える。即ち、民国三十一年に岔河教堂が日本軍によって焼き払われると、教徒らの集会場所は黄富が経営する「民衆茶社」に移った、というのがそれである。

伝教士らは、新しい県に入ると、まずは県城鎮を拠点とする。これは宿舍の確保や安全性の問題からして当然である。やがて土地勘も出てきたところで、周辺の郷鎮から回るようになる。最終的に、信者が一万人を超えるような県となると、県城鎮における教堂のほか、ほぼ全ての郷鎮に聚会拠点が設けられるようになる。このような状況は自然発生的に起こるものではない。全ての郷鎮にまで活動拠点が行き渡るには、伝教士らの地道な伝教活動があった。とりわけ、キリスト教の中国化が進むと、伝教士も中国人が中心となる。彼ら地元の人間の伝教活動があったこそ、これだけの地理的な拡大が可能になったとすべきであろう。

この郷鎮レベルにおける伝教拠点の具体的な状況であるが、『漣水県志』にそれを知る手がかりが記されている。即ち、一九八五年における漣水キリスト教の聚会所リストがそれである。例えば、「北集郷沈蕩村」のように村名が一つしかあげられていない場合は、郷の中心部の村に一つの聚会所が設けられているものと推測される。一方、「岔廟郷孫橋村五組」のように一つの郷の一つの村、さらに一つの組となると、必ずしも郷の中心部の村とは限らないし、聚会所があるのもその村の中心部というよりは、特定の組（集落）の可能性がある。「南祿郷徐圩村六組・高陳村二組・張顧村圩外組」となると、一つの鎮内にある三つの村にあるだけでなく、さらにはその中の特定の組（集落）に聚会所があることになる。この郷の場合、特定の村内の三つの集落に聚会所がある訳で、集落の住民の多くが信者となっていることが推測される。その一方で、他の村には聚会所がないため、信者は郷内でも特定の村、特定の組（集落）に集中していることになる。各県志には、「全ての郷鎮に聚会所がある」というような記述があるが、実際には、聚会所が万遍なく均等に広がるのではなく、このように郷内の特定の村やその中の特定の組（集落）に集中していると考えてよからう。こうしたいわば、「分散集中型」となるのは、広大な農村部においてはむしろ自然なことであろう。対して、都市部の場合は、個人が単位となるので、完全な「分散型」となる。

もう一つの、父系親族集団と信仰との関係であるが、宗族との関連で目を引くのは、『漣水県志』の記述である。即ち、伝教地としてリストアップされた地名を見ていくと、張莊村や張莊組など、姓を冠した村名や組名が多い。また、集落を意味する「莊」や、市場を意味する「集」の文字ともよく組み合わされている。村名や組名として出てくる姓は、張の他に、洪、霍、徐、高、陳、朱、李、孫、薛、蔡、梁、郭、黃、秦、傅、余などがある。一つの県としては、それほど数は多くない。現在住んでいる住民がその姓を名乗っているかは別にして、歴史的にこれら

の姓の一族が開墾に入ったか、移住した結果、こうした名前が付けられたのであろう。村レベルの場合、完全な単姓村というよりは、大多數を占める姓という状況であろうが、組レベルだと一族が集住している可能性が高い。だとすると、キリスト教の伝教において、一族が連れ添って入信している可能性が高く、伝教には地縁のみならず、親族のネットワークも活用されているようである。但し、姓がつけられた地名は、教堂が建設されていない地域でも沢山みられるため、特定の村落への伝教とそこが同族村であるか否かには、相関関係はなさそうである。親族組織が作用し始めるのは、その村なり組の誰かが入信した後のことであろう。こうした姓を冠した地名は、漣水県に限らず、淮陰地区には多く見られることから、同様の状況が各県で見られたものと推測される。

実際、『泗洪県志』にもこれを裏付ける記述がある。即ち、改革以降に出現した「宗教熱」の最中、「ある地域では、一人が信者になると一家全員が信者になったり、一戸から全村に広がったり、一つの姓に伝わると一族全員が信者になる、というような状況が生じた。王集公社の潘崗大隊南馬生産隊では、三二戸中、二七戸が信徒になった。四河公社の淮豊大隊第一生産隊では三七戸中、三五戸が信徒になった。朱湖公社の臧橋大隊では臧姓の殆どが信徒になった」がそれである。ここで言う公社は郷鎮に、大隊は村に、生産隊は集落に相当する。前者二つは一戸から全集落に広がった例であり、最後のは村の一族全員が信者になった例である。前者二つは雑姓の集落のようで、姓を超えて信者が広がったものと推測される。一方、最後の例も単姓村ではなさそうであるが、村名から判断して、臧姓がその多数派を占めているようである。その臧姓の一族が信者になったということである。この場合は、姓を超えて信者が集落や村全体に広がったというのではなく、姓を同じくするものが集落を越えて全村にまで広がった例である。

こうした情況と、泗洪県においては「女性の信徒は八〇パーセントを、四〇歳以上の信徒は六〇パーセントを占

める」という記述との関係はどうであろうか。おそらく、集落で最初に信者になったのは年配の女性で、そこから一家（の特に女性）、さらには全集落（の特に女性）に信者が拡大していったものと推測される。だとすると、信仰の拡大には、父系親族のみならず、姓を超えた女性同士の繋がりがりも大きな役割を果たしたことになる。『泗洪県志』の執筆者は、こうした事例を不法行為と並列しており、非正常的な現象として捉えているようである。

それとはともかく、信仰の拡大には、年配の女性が大きな役割を果たしたこと、そして信者の拡大には、女性同士の繋がりに加え、集落内という地縁と、同姓親族という血縁関係が作用したことは間違いないだろう。場所によっては、この両方が作用した可能性も考えられる。但し、これは農村部の話であって、都市部においては、地縁や血縁関係はそれほど影響することはなかったであろう。それでも、年配の女性が信者の中心であったことは変わりなさそうである。

このことは、入信の動機とも関係してくる。『淮安市志』でも、耶穌家庭の記述において、「当時、人々の」生活は苦しかったため、訪れて礼拝に来る人間は多かったとか、建国初期、宗教活動は基本的に自由放任の状態であり、入教した大多数は婦女や病人であった、という記述に見られ如く、生活の苦しさや病などの悩みが入信の直接的な動機となっていたようである。そういった状況だからこそ、祈祷で病を治すと称して金銭や財産を騙し取ったり、婦女に対する墮胎、暴行や連行など、さまざまな不法行為も発生した。こうした現象は、外国人宣教師らが伝教活動をしている限りは起こり得なかったであろうが、彼らが帰国し、外国の教会組織と絶縁した状態となると、雨後の竹の子のように各地で見られるようになった。組織的な伝教を行うカトリックに対しては、清朝による禁教令や共産党政権による活動停止命令の如く、組織に対する管理で対抗してきた。しかし新教の場合、相手は組織というより個人であるため、管理は容易ではない。なかには、山東から泗洪県や洪澤県に伝わった耶穌家庭のような運動

も起こった。こうした現象は新教が聖書を唯一の拠り所とする限り、常に発生する問題であるが、中国の場合、中国社会ならではの現象も引き起こされる結果となった。こうした社会現象に対しては、国民党政権や一時的に占領した日本軍、さらには共産党政権も、放任の後は管理、抑制などの政策を必要に応じて繰り返し取ってきた、というのがこれまでの歴史である。

おわりに

本稿の執筆は、「はじめに」でも書いたように、南長老教会の宣教師であったアブサラム・サイデンストリッカーの生涯に焦点をあてた前稿の補足の意味合いもあった。当初は簡潔に概況を整理するつもりであったが、資料を読み込んでいく面白さから、細かな分析にのめり込み、最終的に前稿を超える分量となってしまった。

南長老教会の宣教師であったアブサラム・サイデンストリッカーの自伝にある如く、清末から民国期にかけての蘇北は、先に伝教が進んだ江南や山東に対し、宣教師にとっては「福音」を待つ人々が暮らす未開拓の処女地であった。南長老派の伝教は基本的に上海を拠点とし、揚州を経由して大運河沿いに伝教を進めていった。その一方で、内陸部である淮陰地区には、少数ながらも、北側の山東省や西側の安徽省からも伝教者が入り込んだ。南長老派が主流ではあったが、宿遷を拠点とするカトリックのほか、他のプロテスタント会派も多く、淮陰地区は各会派がある種の棲み分けを行いながら活動地域を拡大していった、モザイクのような場所であった。

前稿では、アブサラム・サイデンストリッカーの生涯をかけた蘇北での布教活動は、彼自身、最終的に「失敗」に終わった、という評価であった。この場合の「失敗」とは、改宗した信者の数は微々たるもので、この地域の住

民をキリスト教者に改宗することができなかった、という意味である。

しかしながら、その後に漏れ聞く情報は、私の予想を上回った。実際、『淮陰市志』の記述にある如く、改革以降、「党の宗教政策が全面的に貫徹され、基督教を信仰する人数も不断に増加し、一九八〇年以降、平均毎年二万人以上の速度で増加している。分布も全市の各地に広がり、一九八七年までに一四万五三九六人に達し、これは江蘇省が管轄している市のなかで、キリスト教徒の数が最も多い市となっている」という状況になっているからである。最終的にアブサラム・サイデンストリッカーの撒いた種は、内戦や革命の嵐をくぐり抜けて、立派に花を咲かせたということになる。こうした状況は、もちろん、アブサラム・サイデンストリッカー一人の功績ではないが、このことを今も廬山の墓地に眠る彼が知ったら、どんな思いを浮かべるであろうか。

清末以来の外国の宣教師らによる人生を賭けた伝教活動は、このような形で実を結ぶこととなった。もともと、それが可能となったのは、会派を問わず「中国化」することが必須条件でもあった。そしてその「中国化」には一定の副作用が伴うこととなった。一方、カトリックは明末の伝教以来、歴代王朝や政府によって厳しく管理され、信者は地下に潜り、プロテスタントにはない緊張関係が続いている。その背景には、カトリックの「中国化」の度合も関わっているといえよう。

当初は、前稿で落としてしまったカトリックの状況と、民国期以降の状況を知りたい、という思いから本稿の執筆に取りかかった。各県志のキリスト教に関する記述には濃淡があり、また執筆者のスタンスも微妙に異なる。淡々と事実だけを列記したものもあれば、中には執筆者にキリスト教徒が加わっているのではないかと、と思わせるものもあった。こうした県志を読み込んでいくのは面白く、当初想定していた以上の面白い情報を数多く見つけ出すことができた。分量だけでなく、その内容からして、本稿は前稿の補足を超える内容となった。

本稿は、資料の関係から、一九九〇年代の状況で止まっている。その後、キリスト教信徒の急増は、また何らかの制約や管理がなされるであろう事は、歴史を見ても明らかである。一九九〇年代以降の状況も気になるところであるが、詳細な資料を持ち合わせていない。とはいえ、最新の情報を追いかけるのはジャーナリストの仕事であって、我々の仕事は、過去をできる限り詳細に再構成し、そこから読み取ることのできる構造や普遍的なものを抽出することにある。その成否は読者の判断に委ねるしかないが、人類学を専門とする者として、本稿が多少なりとも歴史人類学的な論考となっていれば、長い年月をかけて本稿を完成させた甲斐があると言える。

注

- (1) 拙稿二〇一四「蘇北におけるプロテスタント宣教師の布教活動—アブサラム・サイデンストリッカーの中国における軌跡を中心に」『武蔵大学人文学会雑誌』第四六巻第二号。
- (2) 費蘇一九八五「淮安基督教簡況」『淮安文史資料』第二輯 淮安県文史資料研究委員会編。
- (3) 拙稿二〇〇一「パール・バックと江北農村」『中国—社会と文化』一六号、及び拙稿二〇〇二「中国におけるパール・バックの足跡」『武蔵大学・総合研究所紀要』一一号。
- (4) 拙稿二〇一「アメリカ人宣教師の著わした漢語テキスト: Absalom Sydenstricker 著 *An Exposition of the Construction and Idioms of Chinese Sentences: As Found in Colloquial Mandarin for the Use of Learners of the Language* (1889) を読む」『武蔵大学人文学会雑誌』第四三巻二号。
- (5) 秋山元秀「淮陰」『世界大百科事典』(改訂新版 平凡社) ほかを参照。
- (6) 典札問題に関しては、拙稿二〇二一「身体技法(跪拜)からみる中国における典札問題の一考察」伊東貴之編『東アジアの王権と秩序—思想・宗教・儀礼を中心として』及古書院がある。
- (7) 『淮陰市志』二〇九一頁
- (8) 『宿遷市志』一一〇一二頁
- (9) 『淮陰市志』二〇九一頁

- (10) 『淮安市志』 七八二頁
- (11) 『宿遷市志』 八九四頁
- (12) 『宿遷市志』 一七〇一八頁
- (13) 『漣水県志』 八七九〇八八〇頁
- (14) 『淮陰市志』 二〇七九頁
- (15) 『淮陰市志』 二〇八〇〇八一頁
- (16) 『淮陰市志』 二〇八二頁
- (17) 『淮陰市志』 二〇八六〇八七頁
- (18) 『維基百科』にて「同慶堂」、及び「神恩堂」などで検索。
- (19) 佐伯好郎一九四四〇四九『支那基督教の研究』（全四巻）春秋社松柏館、比屋根安定一九四〇『支那基督教史』生活社より
- (20) 『淮陰県志』 六五七頁
- (21) 『漣水県志』 八八〇頁
- (22) 『徐州市志』 二二二三頁
- (23) 拙稿二〇一四「蘇北におけるプロテスタント宣教師の布教活動―アブサラム・サイデンストリッカーの中国における軌跡を中心に―」
- (24) 後述する『淮陰県志』より
- (25) 『金湖県志』 七〇一頁
- (26) 『淮陰市志』 二〇八三〇八五頁
- (27) 拙稿二〇一四「蘇北におけるプロテスタント宣教師の布教活動―アブサラム・サイデンストリッカーの中国における軌跡を中心に―」
八八頁参照
- (28) 『母の肖像』新潮文庫版二二五〇二九頁、拙稿八六〇八八頁参照
- (29) 『淮陰市志』 二〇八一〇八二頁
- (30) 『淮陰市志』 二〇八五〇八六頁
- (31) 『淮安市志』 七八二〇八四頁
- (32) 『漣水県志』 八八〇〇八八五頁
- (33) 『淮陰県志』 六五七頁

- (34) 『宿遷市志』 八九三～九四頁
- (35) 『灌南県志』 七三一～三二頁
- (36) 『泗陽県志』 七六一～六二頁
- (37) 『洪澤県志』 八二九～三〇頁
- (38) 『泗洪県志』 九一三～一四頁
- (39) 『盱眙県志』 七九四頁
- (40) 『金湖県志』 七〇一頁
- (41) 二〇一一年の推計では、中国におけるキリスト教徒の総数は六七〇〇万人で、八割以上がプロテスタント信者で占められている。カトリック信者は九〇〇万人で、政府公認のカトリック組織に五七〇万人が所属するほか、三〇〇万人以上が非公認の地下教会で信仰を守っているとされる。典札問題以降、カトリックの布教は現地化の方向に進んでいるが、ローマ教皇と中国との関係は依然として流動的である。中国共産党と教皇の対立は、司教の任命権に集約される。中国側が宗教を管理し、バチカンの承認なしに司教を任命していることが問題となり、バチカンは、一九五一年に中国と国交を断絶している。中国側が独自に司教を任命すると、バチカン側は破門宣言で対抗してきた。二〇一一年には、ローマ法王庁が、中国政府公認のカトリック団体が任命した司教を破門処分するなど、任命権をめぐる対立はその後も続いていた。二〇一三年、ローマ法王フランシスコが即位すると、中国に譲歩するかたちで中国との関係改善に乗り出す。その背景には、中国には政府公認のカトリック団体がある一方で、非公認の地下教会が存在し、多くの信者が法王に忠誠を誓うものの、当局に弾圧されている状況が存在する。法王としては、関係改善によってこうした教会の分断を回避し、カトリック信者がかかれていた状況を改善したい思惑がある。報道によると、二〇一八年二月、法王が中国任命の司教七人の破門を解除し、教区指導者として承認することを決定した。当然、香港や台湾のカトリック団体は方法のこうした動きに警戒感を強めている。「バチカン、中国に接近?」『産経新聞』二〇一六年一〇月二七日、「ローマ法王、中国に譲歩」『産経新聞』二〇一八年二月六日。
- (42) 茶館の活用を初め、アプサラム・サイデンストリッカーの伝教方法に関しては、拙稿二〇一四「蘇北におけるプロテスタント宣教師の布教活動—アプサラム・サイデンストリッカーの中国における軌跡を中心に」を参照のこと。また、茶館の社会的な機能に関しては、拙稿一九八五「飲茶の話」がある。

文献リスト

【日文】

佐伯好郎

- 一九四四―四九『支那基督教の研究』（全四巻）〈東方文化学院研究報告〉春秋社松柏館／一九七九『支那基督教の研究』（全五巻）復刻版 名著普及会

西澤治彦

- 一九八五「飲茶の話」『GS 楽しい知識』三号 冬樹社
二〇〇一「パール・バックと江北農村」『中国―社会と文化』一六号
二〇〇二「中国におけるパール・バックの足跡」『武蔵大学・総合研究所紀要』一一号
二〇一一「資料紹介 アメリカ人宣教師の著わした漢語テキスト―Absalom Sydenstricker 著 *An Exposition of the Construction and Idioms of Chinese Sentences: As Found in Colloquial Mandarin for the Use of Learners of the Language* (1889) を巡って」『武蔵大学人文学会雑誌』四三巻二号
二〇一四「蘇北におけるプロテスタント宣教師の布教活動―アブサラム・サイデンストリッカーの中国における軌跡を中心に」『武蔵大学人文学会雑誌』四六巻二号
- 比屋根安定
- 一九四〇『支那基督教史』（東亜草書）生活社（二〇一一大空社より『アジア学草書245 支那基督教史』と題し、復刻版が刊行されている）

【中文】

費蘇

一九八五「淮安基督教簡況」『淮安文史資料』第二輯 淮安縣文史資料研究委員會編

〔新編縣志〕

淮陰市地方志編纂委員會編 荀德麟主編

一九九五『淮陰市志』上海社會科學院出版社

淮陰縣志編纂委員會編・周立誠主編

一九九六『淮陰縣志』上海社會科學院出版社

淮安市志編纂委員會編著 鍾士和主編・孫芝瑤副主編

一九九八『淮安市志』江蘇人民出版社

宿遷市地方志編纂委員會編著

一九九六『宿遷市志』江蘇人民出版社

漣水縣志地方志編纂委員會編著

一九九七『漣水縣志』江蘇古籍出版社

灌南縣地方志編纂委員會編

一九九五『灌南縣志』江蘇古籍出版社

洪澤兼地方志編纂委員會編 王德成主編・湯道言ほか副主編

一九九九『洪澤縣志』中國大百科全書出版社

泗洪縣地方志編纂委員會編著

一九九四『泗洪県志』江蘇人民出版社

泗陽県志編纂委員会編

一九九五『泗陽県志』江蘇人民出版社

盱眙県志編纂委員会編

一九九三『盱眙県志』江蘇科学技術出版社

金湖県志編纂委員会編著・呉振宝主编

一九九四『金湖県志』江蘇人民出版社

徐州市地方志編纂委員会編

一九九四『徐州市志』(上下) 王希龍主修・董猷吉総纂 中華書局

【英文】

Buck, Pearl S.

1936 *The Exile: Portrait of an American Mother* John Day (村岡花子訳 一九三六『母の肖像』ダヴィット社・

一九五七新潮文庫／深澤正策訳 一九三八『母の肖像』第一書房)

McCrea, T.F.

1906 "North Kiangsu-Anhui Famine" *The Chinese Recorder* Vol.XXXVII No.12 692-693

Skinner, G. William

1964-65 "Marketing and Social Structure in Rural China PartI, II, III." *Journal of Asian Studies* 24 (1), (2),

(3). (中村哲夫ほか訳 一九七一『中国の農村市場・社会構造』法律文化社)